

「イヅレカワレニ有ランヤ」とよんで、この三事のどれもわしにはまだ出来てゐない、の意味だとする説もあるが、それでは謙遜が過ぎて、かへつて孔子様らしくない。第二十六章・第一八〇章から見ても、孔子様このくらゐの自慢は言はれる。

一五〇 子ノタマハク、徳ノ脩マラザル、學ノ講ゼザル、義ヲ聞イテ徒ル能ハザル、不善改ムル能ハザル、コレワガ憂ヒナリ。

X . X X X X

孔子様がおつしやるやう、『修養の至らぬこと、研究の積みぬこと、正しいと知りながらそちらにうつり得ないこと、善からぬと気がつきながら改め得ないこと、この四つの弱點がありはせぬかと、われながらいつも心配してゐることぢや。』

世人の四弊を憂とするのだ、といふ説もあるが、それでは面白くない。本章の位置から見ても、孔子様自身の事に相違ないと思ふ。孔子様さへ憂とされるのだから、われわれ凡人が憂とせねばならぬことはもちろんだが。

一五一 子ノ燕居

申申如タリ、天天如タリ。

「燕居」は「安居」。「申申」は<sup>すがたかた</sup>姿形のユツタリとのびること。「天天」は顔色のよろこびやはらぐこと。

X . X X X X

孔子様がおひまですらちにくつろいで居られるときには、いかにものんびりした御様子で、にこやかであられた。

これが「はしがき」に書いた谷川さんをして論語ファンたらしめたといふ文章だが、實際孔子様を私たちに近づかせる。儀式のときはもちろんキチンとして居られただらうし、小言をいはれるときはこわい顔もされたらうが、けつして道學先生然とシャチコバッテにが虫をかみつぶして居られるのではなかつた。

参照——一八四・四七七



一五二 子ノタマハク、甚シイカナワガ衰ヘタルヤ 久シイカナ、ワレ復タ夢ニ周公ヲ  
見ズ

「周公」名は旦、周の文王の子で武王の弟、武王の子成王を輔佐して禮樂制度を整へた。其上魯の國の開祖なので、孔子様は常に周公を崇拜して居られたのだ。

X X X X X

孔子様が歎息されるやう、『わしもすいぶん年取つたものぢや。とんと久しく周公の夢を見ぬわ  
5.』

孔子様は若い時から周公を理想とし、魯を周公の遺國たるにふさはしからしめ、周公の道を以て天下を救はんと志し、念々こゝにあつて夢にまで周公と道を語られたものだが、此頃は年老い氣力衰へたか、久しく周公の夢を見ず、而して周公の道を行はんとしふ大願もつひに空しからんとする、となげかれたのである。しかし又老いて其志ますます盛なればこそ此なげきあるなれとも考へられるし、老熟して「聖人ニ夢無シ」の域に達されたのだといふこともできよう。ついでに江戸笑話を一つ。

漢學塾の書生が晝寝してゐるのを師匠が見つけて、「宰予晝寝ネタリ、子曰ク云々」と小言をいふと、弟子が負けてゐず、『御師匠様だつて晝寝をなさるではありませんか。』「イヤわしのは周公にお目にかかりに行くのぢや。』「それでは私のも周公にお目にかかりに行くのです。』「ナニ周公がお前などにお會ひになるものか。』「イエ現にただ今もお目にかかりました。』「そして周公が何とおつしやつた。』「お前の師匠にはまだ會つたことがな」と。

一五三 子ノタマハク、道ニ志シ、徳ニ據リ、仁ニ依リ、藝ニ游ブ。

「徳ハ得ナリ」とあつて、道を心に得てわが物とすること。

「藝」は前の「行ヒテ餘力有レバスナハチ以テ文ヲ學ベ」(六)の「文」と同じく、ひろく文藝と解してよからう。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人の道を學ぶことに心を向け、學んだ所を體得しわが徳として堅くこれを守り、諸徳の綜合たる仁に至つてこれに安んじ、時に文藝をたしなんで氣を養ひ心をゆたか



にする。これが學問の順序ぢや。」

一轉して「藝ニ游ブ」と言つた所が面白いが、私などはとかく「藝ニ游ブ」が先に立つて困る。

一五四 子ノタマハク、東脩ヲ行フヨリ以上、ワレ未ダ嘗テ誨フルコト無クンバアラズ。

「東脩」といふ言葉は今の人にはわからなくなつたが、私たちの若い時には入學金を東脩といつたものだ。「脩」は乾肉で、今日ではいはばハムだが、それを十箇たばねたのが「東脩」で、ちようど日本なら「かつをぶし」といふ所、それを入學のしるしに持つて行くのだ。「以上」を、東脩もしくは其以上、といふ意味に解する人もあるが、それでは面白くない。「東脩を持つて來たからには」と取りたい。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『東脩をおさめて入門した以上、教へてやらんことはないぞ。』

「十分に教へてやるぞ」の意に解するのが普通のやうだが、文章の勢ひから見ても、どうもさうは取れない。

「やらんことはない」ではいかにも不親切に聞えるが、文章に至つてなるほどと思ふ。

一五五 子ノタマハク、憤セザレハ啓セズ、悻セザレバ發セズ、一隅ヲ擧ゲテ三隅ヲ以テ反サザレバ、スナハチ復セザルナリ。

「憤」は「意通ズルヲ求メテ未ダ得ザルノ意」。「悻」は「口言ハント欲シテ未ダ能ハザルノ貌」。

「擧一隅」の下に「而示之」(コレヲ示シ)とある本もある。意味はよくわかるが、無い方が文章は面白い。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『どうしてこれがわからないだらうか、ああでもない、かうでもない、と煩悶する所まで行かなければ、いとぐちを開いてやらぬぞ。理論はわかつたがどうもうまく言へない、ああ言はうか、かう言はうか、と口をモグモグさせる所まで來なければ、キツカケをつけてやらぬぞ。四角いものを教へるにしても、一隅を持ち上げて見せると、ああなるほどとすぐに他の三隅を持ち上げて來るやうでなければ、二度と教へてやらぬぞ。』



これが孔子様の教育法で、今日の「啓蒙」教育といふことは、すでに言葉自身がここから出てゐる。先頃アメリカの教育團が来て我國の教育を批判して行つたが、明治以來の教育の一大缺點は、米國教育團を待つまでもなく、すでに孔子様によつて指摘されてゐる。すなはち先生が一から十まで嚙んでくめるやうにして生徒をひとりあるきさせず、教授が一時間四十五分シャベリつづけて學生に口をきかせなかつたことが、小學校から大學に至るまでの通弊だつたのである。すなはち先生が親切過ぎたのであつて、「誨フルコト無クンバアラズ」ぐらゐがちよとよかつたのである。私は三十年前米國に留學してケース・メソッドなる臨床討論式法學講義を傍聴し（参加し、とは氣がさして言へぬ）「法學教育の目的は法律知識を興ふるにあらずして「法律心ヲ鍛錬スル」（トレーニング・ザ・リーガル・マインド）に在り。」との教授の説明に感服して歸つて以來、大學の講義の第一時間には必ず論語本章を引き、孔子流の啓蒙教育で行くぞ、と宣言したのだが、實際やつて見ると中々うまく行かず、結局いつでもこちらから「四隅ヲ擧グル」ことになつてしまつた。

一五六 子喪有ル者ノ側ニ食スレバ、未ダカツテ飽カズ。子コノ日ニ於テ哭スレバ、スナハチ歌ハズ。

二章に分けてある本があり、間に「子」があるから其方がよい、との説もあるが、續けてよんだ方が面白

い。「哭」については、「大聲ニシテ涙無キヲ哭ト謂ヒ、細聲ニシテ涙有ルヲ泣ト謂フ。」などといふ説明があるが、ここではさやうな形式的なことではなく、「哀悼」の意味。

X X X X

孔子様は、喪中の人と同席の場合には、腹一杯にめしあがられなかつた。又孔子様は、葬式や法事に行つて泣いて來られた日には、歌など歌はれなかつた

孔子様の人情の深さ禮儀の正しさがあらはれてゐる。今日の複雑多事な世の中では、必ずしもかうは行かぬが、氣持だけはさうありたい。江戸時代には葬式の歸りに遊所へ行くことがはやつて、川柳の好題材になり、又戦争前までは、葬式や法事が村人の酒飲み機會になつてゐた地方もあるやうだ。甚だ以て心ない話である。

参照——四四・四六九・四八二

一五七 子顔淵ニ謂ヒテノタマハク、コレヲ用フレバスナハチ行ヒ、コレヲ舍ケバスナハチ藏ル。タダワレトナンヂトノミコレ有ルカナ。子路イハク、子三軍ヲ行ラ



バ、スナハチ誰ト共ニセン。子ノタマハク、暴虎馮河死シテ悔無キ者ハ、ワレ  
與ニセザルナリ。必ズヤ事ニ臨ミテ懼レ謀ヲ好ンデ爲サンモノナリ。

「用之則行。舍之則藏。」は古語らしい。行と藏とが韻を踏んである。君に用ひられれば進んで腕をふるひ、  
捨てられれば退いて自身の修養をとめる意。一軍は一萬二千五百人といふことになつてゐるが、「三軍」と  
は「三軍團」といふのではなく、「大軍」といふこと。

「暴虎馮河」は、あばれ虎が河を渡るのではなく、「暴」はから手で打つこと、「馮」はかちわたりすること。

X

X

X

X

孔子様が顔淵に向つて、『古語に「コレヲ用フレバスナハチ行ヒ、コレヲ舍ケバスナハチ藏ル。」  
とあるが、かく出處進退の宜しきを得るのは、まつわしとお前ぐらゐのものかな。』と言はれた。  
すると子路が進み出て、『なるほどさうでござりませうが、先生が大軍をひきゐて出陣される場合  
には、誰をおつれになりませうかな。』と言つた。其時には顔淵では御役に立ちますまい、この子  
路でなくては、といふ意味合が露骨である。そこで孔子様が子路をたしなめておつしやるやう、『虎  
を手打ちにしたり河をかちわたりしたりして犬死しても後悔しないやうな野猪武者と道連れは御免

ぢや もしいくさに行くならば、事に當る前には臆病なくらゐに用心し十分に計畫を立ててそれを  
遂行し得る分別者を參謀にした。

「必ズヤ」に『わしは元來戦争はきらいぢやが、』の意味を含んでゐる（一五九）。本章にも、いかにも子路ら  
しい態度口振と、子路には特に親しみをもつて遠慮なく物を言はれる孔子様の様子とがあらはれてゐて、面白  
い。

一五八 子ノタマハク、富ニシテ求ムベクンバ、執鞭ノ士ト雖モワレ亦コレヲ爲サン。  
モシ求ムベカラズンバ、ワガ好ム所ニ從ハン。

「執鞭ノ士」は文字通り鞭をもつて王侯の行列の先拂ひをする下役。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『もし富なるものがこちらから求むべきものならば、「下に下に」の足  
輕役でもわしはつとめるが、もし求むべきものでないならば、わしはわしの好む聖人の道を樂しみ







一六一

冉有イハク、夫子衛ノ君ヲ爲ケンカ。子貢イハク、諾、ワレマサニコレヲ問ハントスト。入りテイハク、伯夷叔齊ハ何人ゾヤ。ノタマハク、古ノ賢人ナリ。イハク、怨ミタルカ。ノタマハク、仁ヲ求メテ仁ヲ得タリ、又何ヲカ怨ミン。出デテイハク、夫子爲ケザルナリ。

孔子様が衛の國に居られたとき、衛に内亂があつた。當時の衛の君は靈公の後を嗣いだ孫の出公であつたが、靈公に勘當されて出奔してゐた其長男すなはち出公の實父が、晋の尻押で乗り込んで來たので、出公は武力でこれを防ぎ、衛の人も多く、先代の遺命だからといふので、出公の態度を是認してゐた。そこで孔子様の御供の門人たちが、先生の居られぬ所で雜談中、先生はこの父子の國争ひをどう見てゐられるだらうか、といふ話が出たのである。

X X X X X

冉有が『先生は衛君父子のどちらかを援助なさるだらうか。』と言つた。子貢が『よろしい。僕が一つおたづねして見よう。』といふので、孔子様の御部屋に行き、問答した。『伯夷・叔齊といふ

のはどういふ人でござりますか。』『昔の賢人ぢや。』『後に悔ひ怨んだでござりませうか。』『仁を得ようと願つて仁を得たのだから、何の悔い怨むことがあらうか。』そこで子貢が引きさがつて來て言ふには、『先生は衛君父子のどちらをも援助なさらん。』

、これが子路ならば直説法で行く所を、「言語」の子貢だけに遠廻しにさぐりを入れたのであつて、一問一答、すこぶる面白い。そして例の「往ヲ告ゲテ來ヲ知リ」(一五)、「一ヲ聞イテ二ヲ知ル」(一〇〇)子貢のことだから、ハハアと悟つて出て來たのだが、われわれはあたまがわるいから、今少し底を割つて見よう。孤竹君の三男叔齊は亡父から後嗣に指名されたのだけれども、弟として兄に越えることはできぬと長男の伯夷に譲り、伯夷は又父の遺命にはそむかれぬと叔齊に譲り、互に譲り合つてつひにふたりとも國を出奔し、仲の二男が國君になつたのだが、伯夷叔齊兩人も後になつては、つまらぬ義理立てをしたものと、多少は後悔しなかつたでせうか、と子貢がすびきを試みたのに對し、孔子様が、兩人は本望通り人間としての至徳たる仁を成就し得たのだから、「何ヲカ怨ミン」と答へられたので、先生は衛君父子たるもの伯夷叔齊に恥ぢよと考へて居られるのだなと悟り、どちらにも味方されぬと判断したのだ。徳川光圀の遺蹟、舊水戸藩の庭園たりし小石川の後樂園に、伯夷・叔齊の像を祭つた堂があつて、「得仁堂」と名づけられてゐたが、大正十二年の震災でこわれ、今度の震災で跡形もなくなつてしまつた。



参照——二一四・四二九・四六五

一六二 子ノタマハク、<sup>ソシ</sup>疏食ヲ<sup>ク</sup>飯ヒ、水ヲ飲ミ、<sup>ヒツ</sup>肱ヲ<sup>マ</sup>曲ゲテ枕トス、<sup>ウチ</sup>樂シミ亦其中ニ在リ。不義ニシテ富ミ且貴キハ、ワレニ於テカ浮雲ノ如シ。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『<sup>はんつぎまい</sup>半搗米を食ひ水を飲み肱枕でねるやうな貧乏暮しでも、道に志す眞の楽しみはおのづから其中に在るものぞ。不正不義をして得た富貴などは、わしから見ると、浮べる雲の如くはかないものぢや。』

「疏食」は一般的の粗末な食事と見るよりも、「疏」は「精」の反対で「シラゲザル」米と解する方が面白い。孔子様自身、顔回のやうに「一簞食、一瓢飲、陋巷ニ在リ」(二二八)といふやうな貧乏はされなかつたらしいから、これは「たとひ貧乏しても」といふ話なのだ(一五・七五)。

本章の後段は有名な文句で「太閤記十段目」の淨瑠璃にも、光秀の母の言葉として、「不義の富貴は浮べる

雲」とある。

一六三 子ノタマハク、ワレニ數年ヲ加ヘ、五十ニシテ以テ<sup>ユキ</sup>易ヲ學バシメバ、以テ大過無カルベシ

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『わしにもう數年の壽命が與へられ、五十になるころ易學を勉強し、吉凶の理を知り存亡の道を明かにするならば、人事に通じ天命を知つて、おそらくは大過失なきを得るであらうか。』

これは文面から見て孔子様四十五六歳の時の言葉であらう。易の事は私には全然わからないが、深遠な哲理なので、孔子様も五十になつたら十分研究して見ようと言はれたものと見える。前に「四十ニシテ惑ハズ、五十ニシテ天命ヲ知ル。」(二一〇)とあつたのと相對應する。

「五十」は「卒」の字の誤寫で、「以テ易ヲ學ブ卒ヘシメバ」とよむのだ、とする説もある。或はさうかも知れないが、それだとささか平凡になる。



一六四 子ノ雅ニ言フ所ハ、詩・書・執禮、皆雅ニ言フナリ。

「雅言」とよむ人もある。それだと「正言」といふ意味になり、詩・書・禮を語るときには魯國なまりをつかはれず、正しい古言を用ひた、といふことになるのだが、何やらピンと來ない。

「執禮」については古註に、「人ノ執リ守ル所ナルヲ以テ言フ、イタツラニ誦説スルノミニアラザルナリ。」とある。

X X X X X

孔子様が常に語られた所は、詩と歴史と實踐禮、これらを常に言はれた。

後の第一六七章と相對應する意味からも、「常ニ言フ」とよむ方がよからう。

一六五

葉公孔子ヲ子路ニ問フ。子路對ヘズ。子ノタマハク、ナンヂナンズ曰ハザル、ソノ人ト爲リヤ、憤リヲ發シテハ食ヲ忘レ、樂シミテ以テ憂ヲ忘レ、老ノ將ニ

至ラントスルヲ知ラズトシカ云フト。

葉公は楚の葉縣の長官沈諸梁なる者、「公」と稱するのは僭上沙汰だ。

「曰ハザル」を最後に持つて來るよみ方もある。それでもよいのだが、前記の方が力が強い。

X X X X X

葉公が孔子様の人物を子路にたづねたところ、子路は何と言葉にあらはしてよいかわからなかつたと見えて、返事をしなかつた。孔子様がそれを聞いておつしやるやう、『お前はなぜかう言はなかつたのか。私の師匠はうまれつき學問がすきでござりまして、學理を了解し得ないときは發憤して食事も忘れるほどに其研究思索に熱中し、眞理を會得すると心から喜び楽しんで心配事も忘れてしまひます。かく勉學修養に一身を打ち込んで寄る年波にも氣がつかまぜん。まづはさやうな人物でござりますると』

孔子様が謙遜であつた他面に絶大の自信をもつて居られたことがよくあらはれてゐる。「老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラズ」といふ言葉の有難味を、年取るにつれてしみじみと感ずるが、私も大學定年退官後年ならずし



て「老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラザル」大切な御奉公を授けられ、恐懼はもちろんながら、心から感謝してゐる。昭和二十一年四月、御供をして葉山に行つてゐたとき、海岸で小魚とりの御相手をしつつ、即興一首を得た。

老の將に至らんとするを忘れけり

皇子みこときほひて磯にはせ追ふ

一六六 子ノタマハク、ワレ生レナガラニシテコレヲ知ル者ニアラズ。古イニシヘヲ好ミ、敏ニシテ以テコレヲ求ムル者ナリ。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『自分はけつして生れながら學ばずして道理を知つてゐる聖人でも天才でも何でもない。ただ昔の聖人の道を好み、精出してこれを求めただけの話ぢや。』

一六七 子ハ怪・カ・亂・神ヲ語ラズ。

×

×

×

×

孔子様は、怪談や、武勇傳や、亂倫背徳の話や、神佛靈驗記やを語られなかつた。

左の古註がよく當つてゐる。

『聖人ハ常ヲ語リテ怪ヲ語ラズ、徳ヲ語リテカヲ語ラズ、治ヲ語リテ亂ヲ語ラズ、人ヲ語リテ神ヲ語ラズ。』

一六八 子ノタマハク、三人行ケバ必ズワガ師有リ。ソノ善ナル者ヲ擇ビテコレニ從ヒ、ソノ不善ナル者ハコレヲ改ム。

「三人行へば」とよむ人もある。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『人生の道連れが三人となれば、二人は必ずそれぞれ自分の先生になる。善なる者にならつて自らの善を進め、不善なる者にかんがみて自らの不善を改めることになる。』



からぢや。

第八章と同趣旨だ。不善者を師とは如何、この善不善は善者不善者にあらず、善行不善行なり、といふのが「行へば」とよむ方の解釋だ。私は敢て、ともに詩を語るに足らずと申したい。

一六九 子ノタマハク、天徳ヲワレニ生ズ。桓魋ソレワレヲ如何

宋の重臣桓魋（司馬向魋）が孔子様を殺さうとたくらんだので、門人たちが心配して避難をおすすめしたとき、孔子様が泰然自若として言はれた言葉である。

× × × × × × × ×

孔子様がおつしやるやう「天から仁義道德の道を生みつけられたわしぢや、桓魋風情がわしをどろろすることができようぞ。

ふだんは自分は生まれながらの聖人ではないと謙遜される孔子様だが、いざとなると、經國濟民の天命われ

に在り、火も焼くべからず水も溺らすべからず、の太自信を發揮される。全く大したものだ。第二一〇章を見よ。

一七〇 子ノタマハク、二三子、ワレヲ以テ隠スト爲スカ。ワレナンヂニ隠スコト無シ。ワレ行フトシテ二三子ト與ニセザルモノ無シ。コレ丘ナリ。

「二三子ニシメサザルモノ無シ」とよむ人もある。

× × × × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、「お前たちはわしが隠してゐると思ふのか。わしはけつしてお前たちに隠しはしない。わしは何をするにもお前たちと一緒にではないか。それがすべてお前たちに對するわしの講義なのぢや。丘の丘たる所以はそこにある。

孔子様は自身が「黙シテ識ス」流儀なので、門人に對しても必ずしも多言されない。それで先生はわれわれに奥義を隠して居られる、と誤解する者があつたかも知れないので、かう告げられたのである。



参照——一四九・四五〇

一七一 子四ツヲ以テ教フ、文・行・忠・信。

× × × × ×

孔子様の教授要目は結局四つであつた。まづ古典の講義と徳行による垂範、而して其中心徳目は忠と信とである。

一七二

子ノタマハク、聖人ハワレ得テコレヲ見ズ。君子者ヲ見ルコトヲ得バココニ可ナリ。子ノタマハク、善人ハワレ得テコレヲ見ズ。恒有ル者ヲ見ルコトヲ得バココニ可ナリ。亡クシテ有リト爲シ、虚シクシテ盈テリト爲シ、約ニシテ泰ト爲ス。難キカナ恒有ルコト。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『聖人は今の世にとうてい見ることはできぬ故、君子といはれるほどの者でも見ることができれば結構なのぢやが、それも中々むつかしい。』又おつしやるやう、『聖人の次の善人も今の世では見ることはできぬ故、言行一致終始一貫の恒有る者でも見ることができると結構ぢやが、それもめづらしい。多くの者は、無いのに有るとかさり、空虚を充實と見せかけ、困りながらえらさうに構へてゐる次第で、『恒有り』といふのが又むつかしい事ぢやわい。』

「聖人」はともかく、「善人」についても孔子様の採點はすこぶるからい。

一七三 子釣シテ網セズ、弋シテ宿ヲ射ズ。

「網」は「網」のあやまりとする説もあり、又そのままで「アミ」とよむ人もある。一網打盡といふ意味からは「アミ」の方が面白いが、「網」とは、大綱に釣針のついた小綱をシメのやうにさげたいはゆる「はへなは」のことだとすふ。

「弋」とは、「イグルミ」として、糸をつけ鳥にからみつかせるしかけの矢。



孔子様は魚をとるに、つりはされたが、はへなははつかはれなかつた。又鳥をとるのに、ねとりを射ることをされなかつた。

「はしがき」に語つた宇野先生の講義の時、若い連中が全體不徹底だと論難したことを思ひ出す。しかし孔子様は、「殺生禁斷」「葷酒山門ニ入ルヲ許サズ」といふやうな窮屈な戒律は設けなかつたので、漁獵の獲物をさかんに晚酌の二本を傾げるくらゐの事はされただらうが(二四三)、一舉多獲や不意打は好まれなかつたといふ、人間味の中にも又孔子様らしさのある所を示したのだらう。或は又魚鳥の捕獲を目的とせず、いはばスポーツとしての釣魚そのもの射術そのものに興味をもたれたのだと考へてもよからう。

一七四 子ノタマハク、ケダシ知ラズシテコレヲ作ル者有ラン、ワレハコレ無キナリ。  
多ク聞キテソノ善キモノヲ擇ビテコレニ従ヒ、多ク見テコレヲ識ス。知ルノ次ナリ

孔子様がおつしやるやう、『知りもしない事を獨斷で作り出す者も事によるとあるかも知れないが、わしはさういふ事はしない。自分も智者とは申せないが、多く聞いてその善いものをえらんでわが身に行ひ女多く見てそれを心にとめて置くことは怠らぬつもりで、まづ智者の次ぐらゐのことはあらうか。』

本章を第一四八章・第一四九章あたりの趣旨として解説したが、後半は第三四章のやうな一般論とも取れる。

一七五 互郷與ニ言ヒ難シ。童子見ユ。門人惑フ。子ノタマハク、ソノ進ムヲ與ス、ソノ退クラ與サズ。タダ何ゾ甚シキ人オノレヲ潔クシテ以テ進マバ、ソノ潔キヲ與ス。ソノ往ヲ保セザルナリ。

「ソノ進ムヲ」から「何ゾ甚シキ」までが後になつてゐる本もある。



互郷といふ話にならぬほど風俗の悪い村があるが、其村の少年が入門を願つたのを許されたので、門人たちが、あのやうなけがららしい土地の者を受け入れられるとはどういふものか、と疑ひ惑つた。そこで孔子様がさとしておつしやるやう、『いやしくも道に進むをたすけてあともどりせぬやう世話するのが教育といふものぢや。互郷の者だから教へないなどといふのは、あまりにも狭量な次第ではないか。人が身を清くする氣持で道に進んで来るならば、その身を清くしようといふ所を買つてやらう。將來をむき去りはしないといふことまで受合はずともよさうなものぢや。』

「往」を將來と見る説と過去と解する説とある。「往ヲ告ゲテ來ヲ知ル」(一五)といふ所から見ると過去の事らしくもあり、舊惡を根にもたないでもないではないか、といふことになつて、それでも通するが、

『往ク者ハ追ハズ、來タル者ハ拒マズ、イヤシクモコノ心ヲ以テ至ラバ、コレコレヲ受ケンノミ。』

といふ孟子の言葉をも考へ合せて、前説に従つた。

一七六 子ノタマハク、仁遠カラシヤ。ワレ仁ヲ欲スレバ、ココニ仁至ル。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『仁なるものはけつして遠いものではない。仁が欲しいと思へば、そこに仁が来る。』

仁に達せぬのは、仁を欲することが切實でないからだ、といふのであつて、孔子様が色々な形で繰り返されるところだ。

一七七 陳ノ司敗問フ。昭公禮ヲ知ルカ。孔子イハク、禮ヲ知レリ。孔子退ク。巫馬期ヲ揖シテコレヲ進メテイハク、ワレ聞ク、君子ハ黨セズト。君子モ亦黨スルカ。君吳ニ取リ。同姓ナルガ爲メニコレヲ吳孟子ト謂ヘリ。君ニシテ禮ヲ知ラバ、誰カ禮ヲ知ラザラン。巫馬期以テ告グ。子ノタマハク、丘ヤ幸ナリ。イヤシクモ過チ有レバ、人必ズコレヲ知ル。

「司敗」は官名、名は出てゐない。



「巫馬期」は門人、名は施、期は字。

吳は太伯の後、魯は周公の後で、同じく姫姓である。それ故魯の昭公が吳の女を娶つたことは「同姓娶ラズ」の古禮に反する。そこで其夫人は元來ならば「吳孟姬」と稱すべき所を、子姓の宋から娶つたやうに見せかけて「吳孟子」と稱した。(かの衛靈公の夫人は宋の女だから「南子」といふ。)

「取」は「娶」の古字。

×

×

×

×

陳の司敗某が孔子に、「あなたの主君昭公は禮を知つて居られるか。」とたづねたところ、孔子が『禮を知つて居ります。』と答へてそのまま引きさがつた。そこで司敗が門人巫馬期に會釋して呼び近づけ、『君子は仲間びいきをせぬものと聞いてゐるが、孔子のやうな君子もやはり仲間びいきをされるのか。昭公は吳の女を娶られたが、同姓なのはばかり、吳孟子と名づけてごまかされたやうな次第で、昭公が禮を知るならば、誰が禮を知らぬ者があらうぞ。しかるに孔子が昭公は禮を知ると言つたのは、仲間びいきではあるまいか。』と言つた。巫馬期が其事を孔子様に申し上げたところ、孔子様がおつしやるやう、『丘は仕合せ者ぢや。ちつとでも過ちがあると、人様が必ず氣がついて教へてくださる。』

孔子様もとより昭公の同姓結婚をにがにがしく思つて居られたのだらうが、主君の事だから他國人から問はれてさうだとも言へず、『禮ヲ知レリ』と何氣なく答へて置かれたが、摘發されて見るとさだとは言へないから、それは氣がつかなかつた、よく注意してくださつたと、自身の不明にしてしまはれたのであつて、ことにおくゆかしい態度だ。

一七八 子人ト歌ヒテ善ケレバ、必ズコレヲ反サシメテ而シテ後コレニ和ス。

×

×

×

×

孔子様が人と合唱されるとき、相手がうまく歌ふと、必ず自分はやめて獨唱でそこを繰り返させ、さらにそれについて合唱された。

「人ノ美ヲ成ス」(二九四)ことを喜ぶ孔子様らしさがあらはれてゐると同時に、中々耳のいゝことがわかる。孔子様は相當の音樂理論家兼實演者だつたのだ。



一七九 子ノタマハク、文ハワレナホ人ノ如キコト莫カランヤ。躬君子ヲ行フハ、スナハチワレ未ダコレヲ得ルコト有ラズ。

「文莫ハワレナホ人ノ如シ」とよんで、「文莫」は當時の俗語で勉強の義なりとする説明もあるが、強ひてさやうな奇説を立てることもあるまい。

× × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『本を讀むことはわしも人なみに出来るつもりだが、君子の行を實踐躬行することは、わしにはまだ中々出来得ない。』

大した謙遜な言葉だが、同時に理論は易くして實行は難きことを示されたのである。

一八〇

子ノタマハク、聖ト仁トノゴトキハ、スナハチワレアニ敢テセンヤ。ソモソモコレヲ爲シテ厭ハズ、人ヲ誨ヘテ倦マズ。スナハチシカ云フト謂フベキノミ。公西華イハク、正ニタダ弟子學ブコト能ハザルナリ。

× × × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『聖人とか仁者とかいふのは、わしなどの及びもつかぬこと、まづまづ聖人仁者の道を學んで怠らず、それをあきもせず人に教へるといふ、ただそれだけの事ぢや。』それを聞いてゐた門人公西華が言ふやう、『そのそれだけの事が弟子どものまねもできない所でござります。』

第一四九章と同趣旨の孔子様の謙遜と抱負とだが、それに對する公西華のあいさつも面白い。

一八一

子疾病ナリ。子路禱ランコトヲ請フ。子ノタマハク、コレ有リヤ。子路對ヘテイハク、コレ有リ。誄ニイハク、ナンヂヲ上下ノ神祇ニ禱ルト。子ノタマハク、丘ノ禱ルコト久シ。

× × × × × ×

孔子様が御病氣で容態が思はしからず、師匠思ひの子路が心配して、御祈禱を致させませうと申



し出た。孔子様は事をいやくもされぬ性分なので、『それには故實のあることか。』と問はれた。子路が、『ござりますとも。誅と申す昔の祈禱文に、なんぢの幸福を禱つて天地神明にまごころを捧げる、といふ本文がござります。』と答へた。すると孔子様がおつしやるやう、『禱るといふのは天地神明にまごころを捧げることか。それならば丘はすでに久しくふだんから禱つて居るぞ。』

『丘ノ禱ルコト久シ。』實に泰然自若、確信に満ちたりつばな言葉だ。儒教はいはゆる宗教ではなからうが、孔子様は最高至上の宗教心もち、安心立命を得て居られたのだ。「苦しい時の神頼み」などはまるで選を異にする。

一八二 子ノタマハク、奢ナレバスナハチ不孫、儉ナレバスナハチ固。ソノ不孫ナランヨリハ、ムシロ固ナレ。

「孫」は「遜」と同じ。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『奢侈だと「不遜」すなはち尊大非禮になるし、儉約が過ぎると「固」すなはち吝嗇頑固になる。どちらもどちらだが、不遜であるよりはまだしも固でありたい。』

一八三 子ノタマハク、君子ハ坦ダイラカニシテ蕩蕩トウトウ、小人ハ長トコシナヘニ戚戚セキセキ。

×

×

×

×

孔子様がおつしやるやう、『君子は心が平靜で様子のがのびのびしてゐる。小人はいつでもコセコセビクビクしてゐる。』

君子は何事も道理に従つて行動し、損の得のといふことに心がわづらはされない故、どんな逆境に立つても泰然自若と落ちついて居り、小人は常に外界に支配されるので、心にゆとりがなく、足るを知らず乏しきをおそれて絶へずあくせくしてゐる、大それた相違ちや、といふのだ。「坦カニシテ蕩蕩」で孔子様の温容を思ひ浮べると同時に、「長ヘニ戚戚」でわれわれ自身のみじめな姿がかへりみられる。

一八四 子温ニシテ厲シク、威アリテ猛カラズ、恭ニシテ安シ。



X X X X X

孔子様の感じを申さうならば、春風のあたたかさの中に秋風のさびしさを含み、威厳があつてい  
かつからず、ていねいで樂樂らくらくしてござる。

中和を得た聖人の威風と溫容とが眼前に浮きあがるやうな氣がするが、殊に「恭ニシテ安シ」がよい。禮儀  
正しくして窮屈にならぬ所が孔子様のねうちだ。

参照——一八六・四七七

## 泰 伯 第 八

本篇は主として古聖賢を目標としての政治論道德論であるが、はじめの方にならぶ「曾子曰」五章がすこぶ  
る重要である。

一八五 子ノタマハク、泰伯ハソレ至徳ト謂フベキノミ。三タビ天下ヲ以テ讓リ、民得  
テ稱スル無シ。

泰伯は周の大王の長子で、仲雍・季歴の二弟があり、季歴の子の昌（後の文王）が徳があつたので、大王は  
位を末子の季歴に傳へて昌に及ぼしたいといふ考であつた。そこで泰伯は父の志を察して、弟の仲雍と共に國  
を去り、南蠻の地に隠れた。

「三タビ天下ヲ以テ讓ル」とあるので、三回の事績を擧げる説明もあるが、回数の意味ではなく、固く讓つた  
といふのであらう。又讓つたのは諸侯の位だが、結局は自分の系統が天子になる幸運を棄てたといふところ  
で、「天下」と言つたのだ。



孔子様がおつしやるやう、『泰伯の徳は至徳と稱すべきかな。義によつて固く天下を譲つたが、それが又世人の口のはにものぼらぬほど暗々裏に行はれたのは、えらいものぢや。』

伊藤仁齋が左の如く説いたのは、要領を得てゐる。

『聖賢ノ心、皆天下ノ爲メニシテ己ノ爲メニセズ。泰伯ノ季歴ニ讓ルハ、ケダシスノ民ノ爲メニ計ルナリ。其後文武ノ道大ニ天下ニ被リ、民ヒソカニ其賜ヲ受ク、シカモ實ハ泰伯ノ徳タルヲ知ラズ。コレ夫子ノ其至徳ヲ歎ズル所以ナリ。』

一八六 子ノタマハク、恭ニシテ禮無ケレバズナハチ勞ス。慎ニシテ禮無ケレバズナハチ意ス。勇ニシテ禮無ケレバズナハチ亂ス。直ニシテ禮無ケレバズナハチ絞ス。君子親ニ篤ケレバズナハチ民仁ニ興リ、故舊遺レザレバズナハチ民倫カラズ。

「勞」は困苦。「意」は畏懼。「亂」は亂暴。「絞」は急迫。

前段と後段とは何等意味の連絡がない。別章だつたのが、「子曰」が落ちたのだらう。後段は曾子の言葉だといふ説もあるが、證據はなす。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人に對してうやうやしいのは結構だが、それが禮になつたていねいさでない、骨折損でかへつて人にあなどられる。事に當つて慎み深いのは結構だが、禮から出た謹慎さでない、臆病者の形になる。勇氣のあるのは結構だが、禮で調節しないと亂暴になる。卒直なのは結構だが、禮のかざりがないと冷酷になる。』又おつしやるやう、『人の上に立つ者が親族に手厚ければ、人民に仁愛の心がおこり、古なじみを忘れずに優待すれば、人民が輕薄でなくなる。』

参照——四六七

一八七 曾子疾有リ。門弟子ヲ召シテイハク、ワガ足ヲ啓ケ、ワガ手ヲ啓ケ、詩ニ云フ、戰戰兢兢トシテ深淵ニ臨ムガ如ク薄氷ヲ履ムガ如シト。今ヨリシテ後チワレ免



ルルヲ知ルカナ。小子。

「詩」は詩經小雅小旻篇。

「戰戰」は恐懼の形、「兢兢」は戒慎の姿、俗に言へばビクビクすること。

X

X

X

X

曾子が病氣危篤の時に、弟子たちを枕べに呼び集めて言ふやう、  
「かけぶとんをとりのけて、私の手をあらためて見よ、私の足をしらべて見よ。かすりきつ一つあるまいがな。深い淵のへりに立つて落ち込むことをおそれる如く、薄い氷を渡つて割れはせぬかと心配する如く、戰戰兢兢として言行を用心する、といふ古い詩があるが、私は父母から受けた此からだをきつつけぬやうにと、後生大事に身を守つて來た。まづまづ無疵であの世に行ける次第、今日はじめ責任解除ぢや。安心して死ねる。喜んでくれ、若人たちよ。」

孝經によると、曾子は孔子様から

「身體髮膚コレヲ父母ニ受ク、敢テ毀傷セザルハ孝ノ始メナリ。」

と教へられたのだが、其教を戰戰兢兢として實行したのである。そして、からだすら然り、いはんや心と行とに於てをや、であることもちろんだ。或は曾子がこれを以て弟子たちに孝を教へようとしたのだといふ説明もあるが、それまで言はない方が味がある。曾子自身うれしくてうれしくてたまらず、弟子たちに話さないではゐられなかつたのだ、といふことにして置きたい。

曾子の臨終については、禮記（檀弓上篇）にかういふ小話が出てゐる。病床としてゐた「すのこ」はかねて大夫季孫氏から贈られたものだつたが、重態に陥つたのち、看病の童子が何心なく、これは大夫でもつかへぬりつばな品だ、と言つたのを聞き、季氏がこれを持つてゐたのさへ僭上非禮なのに、自分がそれをを用ひたのは相濟まなかつたと思つたが、息子の曾元に「すのこ」をとりかへよと命じた。何分にも危篤の際なので、そのままにして置きたいと思つたが、曾子は、君子たる者正を得て斃るれば本懐なり、とてきかなかつたので、やむを得ず床をしきかへたが、曾子は新しいすのこの上にうつされると、すぐに目をつぶつたといふ。

一八八

曾子疾有り。孟敬子コレヲ問フ。曾子言ヒタイハク、鳥ノマサニ死ナントスルヤソノ鳴クコト哀シ。人ノマサニ死ナントスルヤソノ言フコト善シ。君子ノ道ニ貴ブ所ノモノ三ツアリ。容貌ヲ動カシテハココニ暴慢ニ遠ザカリ、顔色ヲ正シクシテハココニ信ニ近ヅキ、辭氣ヲ出シテハココニ鄙倍ニ遠ザカル。籩豆ノ



事ハスナハチ有司存セリ。

「孟敬子」は魯の大夫仲孫氏。名は捷、武伯の子。  
「籩豆」は祭の供物を盛るたかつきのやうなもの。「籩」は竹製、「豆」は木製、おそらく「豆」の字の形に似  
たうつはなのだらう。

曾子の病が危篤なので、大夫孟敬子が見舞に來たところ、曾子がこれに向つて言うやう、『古語  
に「鳥ノマサニ死ナントスルヤソノ鳴クコト哀シ、人ノマサニ死ナントスルヤソノ言フコト善シ。」  
とありますが、これは私の最後の言葉でござりますから、どうかそのおつもりでお聞きくだされま  
せ。およそ人の上に立つ者が道を行つて國を治めるにつきたつとぶべき事が三つあります。態度舉  
動が荒々しさをやじだらくさから遠ざかるやう、心の誠を顔色にあらはして裏表のないやう、言葉づ  
かひが野卑不合理にならぬやう、この三つが大切でござります。祭の供物臺のならば方などは、  
それぞれ係の役人がありますから、さやうな事務的な事はまかせて置かれて宜しからうと存じま  
す。』

名君とか賢大夫とかいはれる人が、とかく根本を忘れてこそこそと末節の世話をやくことを得意がる氣味があ  
るので、かう言つたのであらう。

一八九 曾子イハク、能ヲ以テ不能ニ問ヒ、多キヲ以テ寡キニ問ヒ、有レドモ無キガゴ  
トク、實ツレドモ虚シキガゴトク、犯セドモ校ラズ。昔者ワガ友カツテ事ニコ  
ロニ從ヘリ

「友」とは誰のこととも言つてゐないが、顔回であらう。曾子の同門中回以外には此文句に當る人はあるま  
す。

曾子が言ふやう、『才能がありながらまだ無能だと思つて才能の無い人にも問ひ、見聞が廣いの  
になほ無知だと考へて見聞の狭い人にもたづね、道有つて道無しと恥ぢ、内容充實しつつ空虚を感  
じ、道にはつれた事をしかけられてもいたづらに是非曲直を争はぬ。これは物我の隔てのないよほ



と練れた有徳人でなくてはかなはぬことだが、亡友顔回はその出来た人であつた。」

一九〇 曾子イハク、以テ六尺ノ孤ヲ託スベシ、以テ百里ノ命ヲ寄スベシ。大節ニ臨ン  
デ奪フベカラズ。君子人カ、君子人ナリ。

「六尺」は周の寸法で、わが四尺三寸餘に當るといふ説もあり、尺は年齢で、二歳半が一尺だといふ説もあるが、いづれにしても十四五歳の年少者といふことになる。

「百里」は百里四方の諸侯の國といふことだが、面積の問題ではなく、つまり「一國」といふこと。

X X X X X

曾子がいふやう、「安心して幼弱のみなしごの將來を頼める人、心配なく一國の運命をまかせ得る人、そして危急存亡の大事に當つて心を動かさず度を失はぬ人、さういふ人こそ君子人ではあるまいか、正に君子人である。」

本章は「託孤寄命章」といつて、論語中でも特に有名な一段だが、これが「日ニ三たびワガ身ヲ省ミ」「戰

戰兢兢、深淵ニ臨ムガ如ク薄氷ヲ履ムガ如ク」死して而して後ち免かるることを知る謙抑慎重な曾子の言葉として、特に意味深長なるを覺える。加藤清正が豊太閤歿後に人に語つて、前田利家晩年儒學に志し、浮田秀家・淺野幸長及びわれを招いての話の中で、論語託孤寄命章を擧げた。われ當時學ばず、その何の謂たるを解しなかつたが、今にしてこれを思へば、ほほ悟る所がある、今の時に當りて此語を念とせざる者、おそらくは不忠不義に陥らん、と言つた。其後玉をいだいて虎穴に入る如きかの二條城の會見を終つて無事大阪に歸城したとき、自邸の奥の間に入つた清正は、かくし持つた豊公賜ふ所の短刀を懐中から取り出して押しただき、今日はじめて太閤鴻恩の萬分一に報ひ得たりと感泣したといふ。

これは誰知らぬ者なき物語だが、ここに人多く知らずして私がたまたま知るの因縁ある一史實がある。私の祖先は伊豫國宇和島藩伊達家の家臣であつたが、祖先の同僚に八十島治右衛門親隆なる侍があつた。藩の財政が非常な窮迫に陥つた際奉行に任せられて其立直しを擔當し、思ひ切つた大節約と大増税とを立案實施したので、たちまち士民両面の怨府となり、猛烈な非難排斥を受けたが、少しも斟酌する所なく其所信を斷行し、最後まで頑張り通して見事に財政整理に成功した後、自身は、あらかじめ一家斷絶の處置をとつた上で、従容として腹かき切つた。けれど君國のためとはいひながら藩士と領民とに當面の犠牲を強要した全責任を一身に負ひ、一死これをあがなつたのであつた。かくして其家は久しく絶家になつてゐたが、後の藩公が其功績をおもひ孤忠をあはれんで、命じて其家を再興させたのが今の八十島家であつて、私の家とは永年の別懸であつたが、最近さらに縁有つて近親となつたのである。



かくして前に清正あり、後に親隆あり、曾子をして知らしめたならば、かれは以て六尺の孤を託すべし、これは以て百里の命を寄すべし、日本に君子人あるかな、と讚歎するであらう。而して私は特に國歩艱難人心不安の今日の日本に於て、大節に臨んで奪ふべからざる君子人出でよ、と熱望切願せざるを得ない。

〇すでに廣瀬淡窓（「君ハ川流ヲ汲メ我ハ薪ヲ拾ハン」の詩人）の「加藤公ノ廟ニ謁ス」を書いて置かう。

寸木支へ難シ大園ノ額ルルヲ

丹心死ニ抵ルマデ未ダ曾テ灰トナラズ

遺孤託スベシ眞ノ君子

夙ニ會參ノ一語ヲ誦シ來タル

一九一 曾子イハク、士ハ以テ弘毅ナラザルベカラズ 任重クシテ道遠シ 仁以テオノ

レガ任ト爲ス、亦重カラズヤ 死シテ而シテ後チ已ム 亦遠カラズヤ

ここに「士」とは、學問あり見識ありて道に志す者の稱。

X

X

X

X

曾子が言ふやう、「士たる者は、度量が大きくして意志が強くなければならぬ。負擔すべき責任が甚だ重くして前途がきはめて遠いからである。その任する所は至高最大の徳たる仁である。實に重きことではないか。そして其重任は死ぬまで續く。まことに遠きことではないか。」

本章も亦有名な本文であるが、私自身に取つて特別な意味があるのは、すなはち「重遠」なる名の出典だからである。私の名は澁澤榮一祖父が附けてくれたのであつて、此全文を横額に書いてもらひ、又はからずも手に入れた藤田東湖先生大書の「任重而道遠」の五文字を板にきざんだものを愛藏してゐたが、昭和二十年三月十日未明の米機空襲により家を焼かれたとき、居室にかかかつてあつた額は焼失し、書庫に入れてあつた板はのこつた。越えて八月十日東宮大夫兼東宮侍從長の大任を拜し、十三日に奥日光湯元なる行啓先に着任して、翌翌八月十五日側近に侍立して終戦大詔の玉音御放送を拜するといふ歴史的の御奉公始めをした次第であるが、其御放送中眞に思ひも寄りす「任重クシテ道遠キヲ念ヒ」の御言葉を承り、時も時、折も折、全く電氣に打たれた如く身も心もしびれる心地がして、生れて六十二年、初めて祖父命名の深意を感じたことである。よつて昭和二十年十二月二十三日の皇太子殿下御誕辰に當り、爾來念々忘れざる衷情を謹詠して奉祝に代へた。

任重く道は遠しのみことのり

けふをことほぐ心にしめむ



一九二 子ノタマハク、詩ニ興リ、禮ニ立テ、樂ニ成ル。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『詩によつて人心を感奮興起せしめ、禮により節制して確立する所ありしめ、さらに音楽によつて美化完成する、これが教化の順序である。』

詩で始め樂で終るところ、孔子様中々以ていはゆる道學先生でない。

一九三 子ノタマハク、民ハコレニ由ラシムベシ、コレヲ知ラシムベカラズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『人民にはこれに由るべき立脚地を興へねばならぬ。ただ知識を興へただけではだめぢや。』

論語中に今の若い人に評判のわるい二章がある。其一つが本章である。(他の一つは四五六)すなはち十章は民を愚にすべしとする秘密主義専制政治の暴露だと非難攻撃されるのであるが、私はさうは思はない。「知ラシムベカラズ」を「知らせてはいけなし」とせず、「知らせただけはいけなし」と解したらどんなのだらうか。そして「由ル」といふのは、抽象的理論ならぬ具體的實踐であつて、人民に道義實踐の規準を興へよ、といふのである。近頃はやりの「自由」なども、無軌道脱線の得手勝手でないことはもちろんの話で、「自暴自棄」に對する「自らの由り所」である。すなはち各人を理窟倒れでない足の地についた自由の民たらしめよといふのが孔子様の眞意だ、と言つたら間違つてゐるだらうか。

一九四 子ノタマハク、勇ヲ好ミテ貧ヲ疾メバ亂ス。人ニシテ不仁ナル、コレヲ疾ムコト甚ダシケレバ亂ス。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『血氣の勇を好む者が貧を嫌つてそれを免かれんとあせると、取り亂して惡逆を爲すものぞ。他人の不仁をにくむはよいが、その憎惡の念が度を過すと心の平靜を失つて自身不仁に陥るぞよ。』



「亂」の字が二つあるが、前のは自身が取り亂すこと、後のは人を取り亂させること、といふのが専門家一致の解釋のやうだ。すなはち人の不仁を追窮することあまりに甚しいと其人を自暴自棄に陥らしめるといふのだ。しかし私は、文章の續きから見ても又意味の面白さから見ても、自分が取り亂すことと見る方がよいと思つて、前記の新解釋を敢てした。御批判を願ひたい。

一九五 子ノタマハク、モシ周公ノ才ノ美有ルモ、驕リ且吝ナラシメバ、其餘ハ觀ルニ足ラザルノミ。

この「吝」は、金錢上のことよりも、むしろ他人の美を成すを好まざるやぶさかさである。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『たとひ昔の周公のやうな才能の美しさがあつても、自ら其才能にほこつて他人に才能あるをさらふやうなケチな量見であつたら、其以外のいかなる美德も問題にならぬ。』

一九六 子ノタマハク、三年學ビテ穀ニ至ラザルハ、得易カラザルノミ。

この「三年」も必ずしも年を限つたわけではなからうが、「三年も」といふくらゐに言つて置いてよからう。

「穀」は官吏の俸給(三三三)、穀物による支給だからかく謂ふ。

「至」は「志」の誤りだとの説もあるが、「至」でも通ずる。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『三年も學問して仕官の氣を起さぬ篤學者は、めづらし。』

門人たちは、必ずしも生活問題のためではなからうが、學び得た所を亂世に施したい氣持で、仕官を急ぐ者が多かつたと見える。そこで孔子様は、子張をさとしたり(三四)、漆雕開を褒めたり(九七)して、就職のための學問であるな、としきりにいましめられる。

一九七 子ノタマハク、篤ク信ジテ學ヲ好ミ、死ヲ守リテ道ヲ善クス。危邦ニハ入ラズ



亂邦ニハ居ラズ。天下道有レバスナハチ見ハレ、道無ケレバスナハチ隠ル。邦道有リテ貧シク且賤シキハ恥ナリ。邦道無クシテ富ミ且貴キハ恥ナリ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『道を信ずること固く、學を好んで道を求め、學び得たる正しき道は命にかけても守り通さねばならぬ。これが人の身の立て方である。亂れんとするさざしある國には入らず、既に亂れたる國には居らず、天下に道義が行はれてゐる場合には出でて働き、天下に道義が行はれぬ場合には隠れて出でぬ。これが人の世に處し方である。したがつて道有る國にありながら用ひられずして貧賤なのは恥づべく、又道無き國に用ひられて富貴なものも恥である。』

初二句はわが國にも通用する金言だが、第三句以下は支那戰國時代の話だ。當時の支那は諸侯の國がならび立ち、魯の人だから魯の國に仕へねばならぬといふわけではないのだから、危邦だの亂邦だの道が有るの無いといふよりごのみができるのであり、又亂世ならばいはゆる傍觀者である方が賢明だとされる。しかしわが國にしても又今日の中華民國にしても、單一無二の現代的國家として、入るも去るもあり得ず、邦道有ればもちろん、邦道無くばなほさら全力をつくして道有る國とせねばならぬのである。

一九八 子ノタマハク、其位ニ在ラザレバ其政ヲ謀ラズ。

この「政」は必ずしも「政治」とは限らず、「仕事」といふほどの意味。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「各人其分を守るべきで、其地位にゐない者が其仕事に口出しせぬがよ。

これは局外者が無責任な批判や干渉をするなといふのであつて、當時の支那にはいはゆる「處士横議」の弊が甚しかつたからの警告である。天下國家を憂ひての正論は、其位置職業乃至男女長幼を問はず許さるべきである。も一度「太功記十段目」を引けば、『女わらべの知る事ならず』とどなりつけるのは、光秀の封建思想である。又役所などが此名言を逆用して獨善になりセクシヨナリズムになつては困る。

安井息軒曰く、

『コレ在位者ノ爲メニ言フナリ。其田ヲ舍キテ人ノ田ヲ芸ルハ、古今ノ通弊ナリ。ココヲ以テミダリニ思慮



ヲ費シテ其職荒ム。孔安國云フ、「各其職ニ專一ナランコトヲ欲ス」ト。各ノ字味フベシ。」  
第三五八章に重出。

一九九 子ノタマハク、師摯ノ始メ、關雎ノ亂、洋洋乎トシテ耳ニ盈ツルカナ。

「師摯」は魯の樂師の摯といふ人（四六六）。「始」は樂の名目で「四始」といひ、「關雎」（六〇）が其第一  
段だとする説もあるが、簡単な説に従つて文字通り「始メ」のこととした。  
「亂」は終曲、曲調が變るから「亂」といふのだといふ。能の「猩々の亂れ」などといふのも、或はここから  
來たのだらう。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『樂師摯の演奏する關雎の曲は始曲から結構だが、殊に終曲が美しく  
盛んで、曲終つて後も餘韻がゆたかに耳にみちてゐることかな。』

これも孔子様が音樂鑑賞家であることを示す一節である。

二〇〇 子ノタマハク、狂ニシテ直ナラズ、侗ニシテ愿ナラズ、慳慳トシテ信ナラズン  
バ、ワレコレヲ知ラザルナリ

「狂」は氣位のみ高くして思慮行動粗雑なこと、其代りさういふ人は正直なもの。「侗」は無知、其代り律義  
なのが普通。「慳慳」すなはち無能な人は概して信實。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『氣位が高いくせに不正直であつたり、馬鹿なくせにするかつたり、  
無能な上に不まじめだつたりしては、わしも手が附けられぬわい。』

漱石のいはゆる「行徳のまないた」で、馬鹿ですれてゐては、全くとりえがなす。

二〇一 子ノタマハク、學ハ及バザルガ如クスルモ、ナホコレヲ失ハンコトヲ恐ル。



孔子様がおつしやるやう、『學問は逃げる人を追ひかけても追ひつき兼ねるやうな氣持であつても、なほ取り逃しさうな心配がある。』

『學問は坂に車を押す如し、油斷をすればあとに戻るぞ。』  
追ひかけるといへば、江戸笑話に『追ひかける名人あり。ある時盗人をおひかけてゆく。むかうから友達來り、なんだ〜。どろぼうを追かける。その泥坊はどれた。アレあとから來る。』といふのがある。追ひつかなくてはならぬが、目標を飛び越して先走りしてしまつても困る。

二〇二 子ノタマハク、巍巍乎タリ、舜禹ノ天下ヲ有ツヤ。而シテ與ラズ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『高大なことかな、舜や禹が天下をりつばに治められたことは。そして御自身は關係のないやうな御顔をしてこゝろ。』

いはゆる無爲にして治まる徳治の理想をあらはしたものである(三八〇)。

二〇三 子ノタマハク、大ナルカナ堯ノ君タルヤ。巍巍乎タリ。タダ天ヲ大ナリト爲ス。タダ堯コレニ則ル。蕩蕩乎トシテ民能ク名ヅクル無シ。巍巍乎トシテソレ成功有リ。煥乎トシテソレ文章有リ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『さても大いなることかな、堯舜の天子様振りは。實にりつばなことぢや。およそ唯一の大きなものは天だが、堯のみが天と肩をならべる。其廣大無邊なること、何と名の附けやうもない。ただ見る所は高くそびえる其事業と、光りかがやく其禮樂制度とのみ。』

伊藤仁齋の左の解説が要領を得てゐる。

『言フ心ハ、民堯ノ徳化ニ涵育シテ、而シテ其徳化ノ然ル所以ヲ知ラズ。ナホ人天地ノ中ニ在リテ、天地ノ大イナル所以ヲ知ラザルガ如キナリ。タダソノ見ル所ノモノハ、功業文章ノ巍然煥然タルノミ。』



二〇四

舜ニ臣五人有リテ天下治マル。武王イハク、ワレニ亂臣十人有リト。孔子ノタ  
マハク、才難シト、ソレ然ラズヤ。唐虞ノ際ココニ於テ盛ンナリト爲ス。婦人  
有リ九人ノミ。天下ヲ三分シテ其二ヲ有チ、以テ殷ニ服事ス。周ノ德ハソレ至  
徳ト謂フベキノミ。

「亂臣」の「亂」は「治」だといふ。變な事だが、昔はかういふ逆な用法もあつたらしい。

「唐虞」は堯舜のこと。堯は陶唐氏、舜は有虞氏。

X X X X X

舜には賢臣が五人あつて天下が治まつた。武王は、自分には亂を治める重臣が十人ある、と言つた。それについて孔子様がおつしやるやう、『人才は得難し、といふ古語があるが、なるほどさうではないか。堯舜以來周が人材有ることに於て一番盛んだつたが、十人のうち一人は女で男は九人だつた。しかしともかくもそれだけの人材があつたので、天下の三分の二までが其勢力下にはいつたが、それでもなほ殷に臣として事へてゐた。文王時代の周はまことに徳の至極なものと謂つてさ

しつかえない。』

「天下ヲ三分シテ」以下は別章だといふ説もあるが、前記の如く解すれば意味が通る。

孔子様がしきりに文王を褒める裏には、臣として君を討つた武王にあきたらざる氣持が含まれてゐる。

二〇五

子ノタマハク、禹ハワレ間然スル所無シ。飲食ヲ菲クシテ孝ヲ鬼神ニ致シ、衣服ヲ惡シクシテ美ヲ黻冕ニ致シ、宮室ヲ卑シクシテカヲ溝洫ニ盡ス。禹ハワレ間然スル所無シ。

「黻」は前掛、「冕」は冠、共に祭祀用。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『禹王にはわしも非の打ちやうがない。自身の食事は輕少にして祖先の祭の供物を豊富にし、「ふだんぎ」は粗末にして祭服をりつばにし、御殿を質素にして灌漑水路に全力をそそいだ。禹王にはわしも非の打ちやうがないわう。』



# 子罕第九

子罕篇には主として孔子様の徳行に關するものを集めてゐる。

二〇六 子罕ニ利ヲ言フ。命ト與ニシ、仁ト與ニス。

× × × × ×

孔子様は稀に利の事を言はれた。そしてそれを言ふ場合にも、利だけを言ふと誤解が起ることをおそれて、常に天命の事又は仁の事と組みあはせて言はれた。

「子罕ニ利ト命ト仁トヲ言フ」と普通によむが、命はともかく、仁に至つては「マレニ言フ」どころではないから、前記のよみ方を採つた。これは荻生徂徠の説だといふ。

二〇七 達巷黨ノ人イハク、大ナルカナ孔子。博ク學ビテ名ヲ成ス所無シト。子コレヲ

聞キテ門弟子ニ謂ヒテノタマハク、ワレ何ヲカ執ラン。御ヲ執ランカ、射ヲ執ランカ。ソレハ御ヲ執ラン

「達巷」は「黨」の所在地名。「黨」は前にも出たが、五百家の隣保集團。

× × × × ×

達巷の或人が「偉大なるかな孔子様は。博學で何でもおできになるため、何か一つで有名といふことがない。」と言つた。孔子様がこれを聞いて内弟子たちにおつしやるやう、「それでは何か一つやつて見ようかな。御にしようか。射にしようか。わしは御にしよう。」

古註に

「達巷黨ノ人、孔子ノ大ナルヲ見、ソノ學ブ所ノモノ廣キヲ意ヒ、而シテソノ一善ヲ以テ名ヲ世ニ得ザルヲ惜ム。」

とあるが、「惜ム」といふよりは、むしろ褒めたのだらう。ところが孔子様はわざとそれを、いろいろかぢるが一つも物になつてゐない、といふ悪口の意味にとり、それでは禮・樂・射・御・書・數の六藝のうちを何か



一つ専門にやつて、「名取り」にでもなつて見ようか、禮樂はむつかしし、書數はめんどうくさし、まじ射か御といふ所だらうが、一番下等な御ぐらゐがわしに相應な所だらう、と言はれたのであつて、謙遜の言葉だが、同時に内弟子たち相手のじようだんと見るべきだらう。

参照——二二一

二〇八 子ノタマハク、麻冕ハ禮ナリ。今ヤ純ニスルハ儉ナリ。ワレハ衆ニ從ハン。下  
ニ拜スルハ禮ナリ。今上ニ拜スルハ泰ナリ。衆ニ違フト雖モワレハ下ニ從ハン。  
X X X X X

孔子様がおつしやるやう、麻の冠が古禮だがそれは製作に手數がかかるので、今では絹糸にすることになつた。古禮には違ふが簡素でよいから、わしは皆のするやうに絹糸の冠を用ひよう。臣下が君主に對してはまづ堂下で拜するのが古禮なのを、今ではイキナリ堂上で拜することになつたが、それは僭上沙汰だ。皆のやり方とは違ふが、わしは堂下で拜しよう。』

孔子様は必ずしも古制だから何でもよいと言はれるのではなく、事の宜しきに從はれるのである。

二〇九 子四ツヲ絶ツ。意ナク、必ナク、固ナク、我ナシ。

「意」は自分の量見で物事をおしはかること。「必」はぜひかうあらねばならぬときめてかかること。「固」は一事にこだはつて融通のきかぬこと。「我」はただ我れあるを知つて他人を考へぬこと。

X X X X X

孔子様は、意と必と固と我との四つを絶ち物にされた。

すなはち、獨善なく、先入主なく、固執なく、我意なく、眞に圓滿な人格者たらんことをつとめられたのである。

二一〇 子匡ニ畏ル。ノタマハク、文王既ニ没シテ文ココニ在ラズヤ。天ノ將ニ斯ノ文ヲ喪サントスルヤ、後ニ死スル者斯ノ文ニ與ルヲ得ジ。天ノ未ダ斯ノ文ヲ喪サ



ザルヤ、匡人ソレワレヲ如何。

「匡ニ畏ル」は、後にも出て来るが(二七五)、孔子様の一行が衛を去つて陳蔡方面に向ふ途中(二五五)、匡といふ土地で遭難したこと。「畏」は畏るべき事件にあつたといふことで、孔子様がこはがられたといふのではない。傳説によれば陽虎(四三二)が匡で亂暴したことがあつたので、匡人が今度來たらばと手ぐすねひいて待ちかまへてゐた。そこへ一行が通りかかつたところ、孔子様の顔形がたまたま陽虎に似てゐたので、匡人が兵を以てこれを圍むこと五日だつたといふ。孔子様がそんな大悪人に似てゐるはずがないといふ議論もあるが、そんなに氣にすることもなからう。曾呂利新左衛門の言ひ草ではないが、孔子様が陽虎に似てゐたのではなく、陽虎が孔子様に似てゐたのだ、といふことにして置かう。

「文」は道の形にあらはれて文をなすもの、すなはち禮樂制度。

「後ニ死スル者」はすなはち「後ニ生ルル者」であつて、ここでは孔子様自身。

孔子様が匡で大難にあはれたとき、おつしやるやう、「文王がなくなられた後、其名に負へる文はこのわしに傳はつてゐるとは知らぬか。もし天がこの文をほろぼさうといふおつもりならば、後

に生れたわしがこの文に參與することはできなかつたはずである。もし又天がまだこの文をほろぼさぬおつもりならば、文の代表者たるこのわしが殺されることなどは斷じてあり得ない。匡人如きがわしに指一本でもさせようや。

「桓魋ソレワレを如何」(一六九)と共に、孔子様の毅然たる大勇を私たちの眼の前に生き活きと出現させる。

二二一 大宰子貢ニ問ヒテイハク、夫子ハ聖者カ、何ゾソレ多能ナルヤ。子貢イハク、モトヨリ天コレヲ縱シテ將ニ聖ナラントス、又多能ナリ。子コレヲ聞イテノタマハク、大宰ワレヲ知レルカ。ワレ少クシテ賤シ。故ニ鄙事ニ多能ナリ。君子多ナランヤ、多ナラザルナリ。牢イハク、子云ヘリ、ワレ試ヒラレズ、故ニ藝ナリト。

「大宰」は官名、大官らしい。名はわからない。

「牢」は門人子張の名、姓は琴、子張は字だが、子開といふ字もある。



大宰某が子貢に向つて、『先生はなるほど聖人でもあらうか、何と多能なことよ。』と言つたので、子貢が『先生は元來天の許せる所でほとんど聖人の域に達して居られ、其上に多能であられます。』と答へた。孔子様がこれを聞いておつしやるやう、『大宰はわしの事をよく知つて居られる。わしは若い時賤しかつたので、つまらぬ事に多能なのぢや。元來君子の君子たる所以が多能な事であらうか。否、君子はけつして多能でない。』それについて子張も言つた。『先生が、わしは世の中に用ひられなかつたので多藝になつたのぢや。』と言はれたことがある。』

大宰は多能だから聖人だと思ひ、子貢は、聖人であることと多能であることは別問題だが、先生は聖人にして且多能なのである、と述べ、孔子様は、謙遜と同時に多藝多能はけつして聖人君子たる所以にあらざることとを語られたのである。

二二二 子ノタマハク、ワレ知ルコト有ランヤ。知ルコト無キナリ。鄙夫有リ、ワレニ問フ。空空如タリ。ワレ其兩端ヲ叩キテ竭ス。

「空空」は前(二〇〇)に出た「空空」と同じく、誠實の意。或はこれを文字通り無知の意に解する説もある。

孔子様がおつしやるやう、『わしが何を知るものか、何も知つてはゐない。ただかりにいなか者があつてまじめにわしに物をたづねたとしたら、終始 本末 大小 上下 精粗 厚薄のはしからはしまでを叩きつくして、知つてゐるかぎりを残す所なく教へてやるだけのことぢや。』

二二三 子ノタマハク、鳳鳥至ラズ、河圖ヲ出ダサズ、ワレ已ンヌルカナ。

「鳳鳥」は鳳凰。舜の時來儀し、文王の時岐山に鳴く、とある。  
「圖」は八卦の圖。伏羲の時に龍馬(馬の八尺以上なるを龍といふ)が圖を負ひて黄河から出現した、とある。



孔子様がおつしやるやう、「鳳凰」も來り舞はず、河から八卦の圖も出ず、これ聖主名君なきし  
るし。ああわが道もこれでおしまひか。』

聖主明君に遇ひこれを輔佐して道を行はうといふのが、孔子様の大願であつたが、當時孔子を知りこれを用  
ひる人君なく、これではわしも如何とも致しやうがない、と歎息されたのである。孔子様が吉兆祥瑞を迷信さ  
れたのではないことはもちろんで、伊藤仁齋は其點を

『或人曰ク、聖人ハ祥瑞ヲ言ハズト、此ニ鳳鳥河圖ヲ言ヘルハ何ゾヤト。曰ク、コレ祥瑞ヲ説ケルニアラ  
ズ、鳳鳥河圖ヲ假リテ以テ時ニ明主無キヲ歎ゼルナリ。ケダシ聖人ハ人ト與ニシテ以テ異ヲ立テズ、世ト同  
ジクシテ敢テ聽ヲ駭カサズ。オヨソ事ノ大ナル得失無キモノハ、皆舊套ニ從フ。敢テ紛紛ノ説ヲ爲シテ以テ  
人ノ聽聞ヲ泊サズ、鳳鳥河圖ハ古來相傳ヘテ以テ聖王世ヲ御スルノ瑞ト爲セリ。故ニ夫子コレヲ假リテ以テ  
其歎ヲ寓セルノミ。』  
と説明した。すなはち明君無しと正面から言つてしまふと、魯の君に對しては不敬となり、他の諸侯にもあた  
りさほりがある故、遠廻りに聖主名君出現の吉兆がないとほのめかされたのである。

二二四

子齊衰者ト冕衣裳者ト瞽者トヲ見ル。コレヲ見レバ少シト雖モ必ズ作ツ。コレ  
ヲ過ダレバ必ズ趨ル。

「齊衰」は第二級の喪服、第一級は「斬衰」だが、ここでは一般に喪服といふ意味。  
「趨」は「ワシル」とよむしきたりになつてゐる。小腰をかがめて小走りすること。

X X X X

孔子様は、喪服をきた者と、大禮服の役人と、盲人とにであはれると、それが自分より若い人  
であつても、あちらがこちらの前に來る場合には必ず起立され、こちらがあちらの前を通るときに  
は必ず小走りされた。

孔子様が人の喪に同情し、爵位を尊び、不具者をあはれましたことを言つたものだが、喪服や大禮服に對し  
てはともかく、盲人に對して相手に見えない禮をつくす所が、孔子様だ(二五一)。



二二五

顔淵喟然トシテ嘆ジテイハク、コレヲ仰ゲバイヨイヨ高ク、コレヲ鑽レバイヨイヨ堅シ。コレヲ瞻レバ前ニ在リ、忽焉トシテ後ニ在リ。夫子循循然トシテ善ク人ヲ誘キ、ワレヲ博ムルニ文ヲ以テシ、ワレヲ約スルニ禮ヲ以テス。罷メント欲シテ能ハズ、既ニワガ才ヲ竭セリ。立ッ所有リテ卓爾タルガ如シ。コレニ從ハント欲スト雖モ、由ナキノミ。

×

×

×

×

顔淵が溜息をついて言ふやう、「先生の御徳は、高山の仰げばいよいよ高くして登るべからざるが如く、金石の切ればいよいよ堅くして及がたためと同じである。又其真相のとらへがたきこと、今まで前に見えたかと思へばたちまちうしろに在るやうな始末である。しかし先生は順序よく人を誘導されて、われわれの知見をひろむるに文字を以てし、われわれの行爲を規律するに禮を以てされるので、やめようにもやめられず、カ一杯を出し切つてここまで追ひすがつて來た。ところがどこまで行つて見ても、先生はわれわれの目の前にそびえ立つて居られて、どうかして追ひつかうと思つても、及びもつかない。」

高弟たちが孔子様に追隨精進する様様が目に見えるやうだ。「立ッ所」を顔淵自身の事として、ともかくも自立し得る所までは來たが先生の位置までは達し得ぬ、の意に解する説もあるが、前記の方が續きもよく面白いやうだ。

二二六

子疾病ナリ。子路門人ヲシテ臣タラシム。病間ニシテノタマハク、久シイカナ由ノ詐リヲ行フヤ。臣無クシテ臣有リト爲ス、ワレ誰ヲカ欺カン。天ヲ欺カンヤ。且ワレソノ臣ノ手ニ死ナンヨリハ、ムシロ二三子ノ手ニ死ナンカ。且ワレタトヒ大葬ヲ得ズトモ、ワレ道路ニ死ナンヤ。

大夫が病氣ならば家臣が見舞客の應接もし又死ねば葬儀も執り行ふのだが、孔子様は當時退官して居られたから家臣といふものがない。そこで子路が、それでは體裁もわるし、萬一の場合は葬儀も盛大に執り行ひたいと思つて、若い門人たちを家臣に仕立てたのである。前に出てゐた「禱ランコトヲ請フ」(一一八一)と同じ時かどうか知らないが、子路はとかく師匠思ひのあまり出過ぎたことをする。殊に重態だからとて葬式の心構へまでしたのならば、少々氣が早過ぎる。江戸笑話にかういふのがある。

今度雇つた下男は、「エヘンと言へばたばこばん」でまことに氣がきいてゐる。咳をすれば醫者にかけて



ける、二三日ねると寺に行く。

「久シイカナ」は、今さらならぬことながらの意。わが國でも「久しいものだ」といふ。

X X X X X

孔子様の病氣が重態なので、子路が門人たちを家臣に仕立てた。病氣がややおこたつたとき、はじめてそれを知つておつしやるやう、「久しいものだ、由がこしらへ事をするのも、わしに家臣がないのは皆が知つてゐるから、家臣があるやうに見せかけたとして、誰をだませやうか。よし人はだませても、天道様をあざむけようか。其上わしは、大夫として家臣の手で死ぬよりか、むしろ先生としてお前ら弟子たちに死に水を取つてもらひたいのだ。たとひ大夫の禮で葬られずとも、まさか道ばたでのたれ死をしいすまいぢやないか。」

「二三子ノ手ニ死ナン」といふのがいかにも人情があつてよい。私は某元老の國葬の儀に參列して、萬端一切が係役人の手で取りしきられ、親族友人は隅の方に小さくなつてゐるのを見て、此本文を思ひ出したことがある。

二二七 子貢イハク、美玉ココニ有リ。匱ニ韞メテコレヲ藏センカ。善買ヲ求メテコレヲ沽ランカ。子ノタマハク、コレヲ沽ランカナ、コレヲ沽ランカナ。ワレハ買ヲ待ツ者ナリ。

これは孔子様が盛徳をいだきながら仕官されないのを、子貢が「寶の持ちぐされ」と惜み、例の美辭麗句のたとへを以ておたづねしたのであつて、孔子様と子貢との問答はいつもながら面白い。「匱」は箱のこと。「買」を「コ」とよんで買ひ手と解したが、「カ」とよんで値段と解する人もある。

X X X X X

子貢が「ここに美しい玉がありますが、櫃に入れてしまつて置きませうか、或は善い買手をさがして賣りませうか。」と言つたところ、孔子様がおつしやるやう、「賣らうとも、賣らうとも、わしは買ひ手を待つてゐるのぢや。」

孔子様の言葉には、「しかしこちらから賣りつけることはしない。」といふ意味が含まれてゐる。すなはち「コレヲ用フレバスナハチ行ヒ、コレヲ舍クバスナハチ藏」れるのである(一五七)。



二一八 子九夷ニ居ラント欲ス。或ヒトイハク、陋シキコトコレヲ如何。子ノタマハク、君子コレニ居ル、何ノ陋シキコトカコレ有ラン。

支那は中國で、四方は皆野蠻國、といふ風に昔の支那人は考へてゐたので、それがすなはち東夷・南蠻・西戎・北狄である。そして東夷が九ヶ國あるといふのが「九夷」なのだが、其中に「倭人國」といふのがあり、それが日本だなどといふ。そこで伊藤仁齋などは、孔子が支那に愛想をつかして、いはゆる「夷狄ノ君有ル」(四五) 日本に渡らうとしたのだと説く。私は仁齋先生の説には感服して、おりおり引用するが、これなどはどうかと思ふ。「桴ニ乘リテ海ニ浮バン」(九八)の場合と同様、實際に外遊しようといふのではなくて、天道無きをなげく孔子様の歎聲に外ならぬのだ。本章の「或ヒト」なども、本當の事と思つて口を出したのだらう。

X X X X

孔子様が東夷の國に住まうと望んで居られると聞いた或人が、「風俗が野蠻下等でどうにもなりません」と言つたのに對して、孔子様がおつしやるやう、「君子が行つて住めば、其感化によつ

て風俗善良となりさうなことぢや。何の野蠻下等なことがあらうか。」

「言忠信、行篤敬、蠻貊ノ邦ト雖モ行ハレン」(三八一)といふ孔子様の自信が、ここにもあらはれてゐる。

二一九 子ノタマハク、ワレ衛ヨリ魯ニ反リ、然ル後樂正シク、雅頌各其所ヲ得タリ

魯の哀公の十一年、孔子様六十八歳の時、衛の國を最後として魯に歸り、門人の教育と古禮古樂の復興とに専念したのであるが、音樂整理の成績を自ら満足して語られた言葉である。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「わしが衛から魯に歸つて以來骨折つたかひあつて、亂れてゐた音樂が是正され、朝廷の舞樂なる雅、宗廟の舞樂なる頌、其他それぞれ正しい音樂が正しい場合に演奏されるやうになつた。」

二二〇 子ノタマハク、出デテハスナハチ公卿ニ事ヘ、入リテハスナハチ父兄ニ事ヘ、



喪事敢テ勉メズンバアラス、酒ノ困レヲ爲サズ。何ゾワレニ有ランヤ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『朝廷に出ては上官に服従し、家庭に入つては父母兄弟に奉仕し、葬儀や服喪には出来るだけを盡さぬといふことなく、酒は飲むが亂醉するまでに至らぬ。まづ其のくらの所で、外には何のとりえもないわしぢや。』

これは、第一四九章と同様、孔子様の謙遜と自信との言葉だ。前の場合にも申した通り、「何ゾワレニ有ランヤ」を「以上の事もわしにはできない」の意味に解する説があるが、此場合には「酒ノ困レヲ爲サズ」が變なことになる。第二四三章に「量無シ亂ニ及バ」さる孔子様の酒の上のよかつたことが出てゐるではないか。

二二二 子川ノ上ニ在リテノタマハク、逝クモノハ斯クノ如キカナ、晝夜ヲ舍カズ。

× × × × ×

孔子様が川ばたにたたずんで歎息されるやう、『人間萬事過ぎ去つて歸らぬこと、川水の晝となく夜となく流れてやまぬやうぢやなう。』

道は流れて絶ゆることなし、學問もすべからく間斷なかるべし、の教訓と解する説もあるが、それでは詩的でない。安井息軒の左の説明が正に圖星だ。

『春秋ノ末天下大ニ亂レ、人其生ニ聊ゼズ。孔子明君ヲ輔ケテ以テコレヲ極ハント欲ス。シカモ世ノ主用フル能ハズ、歲月流ルルガ如ク、孔子モ亦スデニ老イヌ。タマタマ川流ノ一タビ去ツテ反ラザルヲ見ル。ココニ於テカ嘯然トシテ以テ歎ジ、此言ヲ發セルナリ。』

二二三 子ノタマハク、ワレ未ダ徳ヲ好ムコト色ヲ好ムガ如クナル者ヲ見ズ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『色を好む如く熱烈に徳を好む者を、わしはまた見たことがない。遺憾な事ぢや。』

本章の「色」も、前の「賢ヲ賢トシテ色ニ易ヘ」(七)の場合と同じく、婦人の容色である。さりとして又



「有徳者ヲ好ムコト美人ヲ好ム如クナル者ヲ見ズ」と解するもの、あまりに直説法過ぎる。「色」を美人と見るにしても、「徳」は徳そのものとして置く方がよい。

二二三 子ノタマハク、譬ヘバ山ヲ爲ルガ如シ。未ダ成ラザルコト一箕ナルモ、止ムハワガ止ムナリ。譬ヘバ地ヲ平カニスルガ如シ。一箕ヲ覆スト雖モ、進ムハワガ往クナリ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「たとへば山を築く場合に、モウひとつこといふ所で山が出来上らないのは、誰のせいでもない自分がやめたのぢや。又たとへば地ならしをする場合に、タツタひとつつこあけただけでも、それだけ自分で仕事をはかどらせたのぢや。」

學問修養についての言葉だが、萬事にあてはまる。それからこれが出たのか、これからこれが出たのか、議論があるが、『九似ノ功ヲ一箕ニ缺ク』といふ諺がある。

二二四 子ノタマハク、コレニ語ゲテ惰ラザル者ハ、ソレ回ナルカ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『一應説明してやると、それで済んだつもりで気がゆるむのが普通で、さうでないのは顔回ぐらゐのものか。』

次章にも見える通り、顔回はさらに一步前進するのである。

二二五 子顔淵ヲ謂ヒテノタマハク。惜シイカナ。ワレソノ進ムヲ見タリ。未ダソノ止マルヲ見ザリキ。

X X X X X

顔淵の死後孔子様が追懐しておつしやるやう、『ほんとに惜しいことをした。進む所は見たが止まる所を見なかつたのに。』



其學徳の日進月歩して止まる所を知らず、此様子ならばどこまで伸びるかと思はれ、居られた様子が、短い言葉にあふれてゐる。

二二六 子ノタマハク、苗ニシテ秀デザル者有ルカナ、秀デテ實ラザル者有ルカナ。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、苗のうちにはよさうだつたがそれきりで花の咲かぬ者もあることかな。花は咲いたが實のならぬ者もあることかな。

「十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人」の多いことを遺憾として、小成に安んずるな大成せよ、と門人たちをばげまされたのである。前章との聯想から、顔回の短命を惜しんだ言葉と解する説もあるが、どうもさうではあるまい。壽命の問題ではなくて、學徳の問題である。

私は両親が芝居好きで、子供の時九代目團十郎・五代目菊五郎を見せて置いてくれたことを感謝してゐる次第、それ以来すいぶん大勢の役者を見たが、いつでも感心するのは子役の上手なことだ。父はよく「ガクシヤ

の子よりヤクシヤの子の方がえらいぞ。」と私をからかつたものだが、それで將來どんな名優になるかと楽しみにしてゐると、存外期待はづれの場合が多い。個人をさしては悪いが、二代目左團次の弟の進升が「ぼたん」といつた少年時代は實に驚くべき名子役だつた。坪内逍遙作「牧の方」の初演のとき、政範といふ役で、芝翫すなはち後の歌右衛門の牧の方を向ふに廻して大芝居を演じ、兄左團次（當時の進升）の北條義時などは問題でなかつた。其後「ヴァイルヘルム・テル」の翻案劇で左團次が「獵師照藏」を演じたとき、例のりんごをあたまにのせる其子をつとめて、スツカリ兄貴を食つてしまつたこともある。これに反して左團次は進升時代には大根役者と罵られた。「矢の根」の五郎を演じたとき、新聞漫畫に大根が馬上で大根を振り上げてゐる所が書いてあつたのを覚えてゐる。初代左團次の追善興行のとき、弟ぼたんとならんで舞臺にすはり、私は御承知の通りの未熟者でござりますが、これなる弟は末の見込みがござります故御引立を願ひ上げます、といふ口上を言つて、見物を氣の毒がらせたものだ。しかしさすがは團十郎で、左團次のぼたん時代に、こいつは大物になる、と言つてゐたさうだが、果して洋行歸朝以來あの通り我國の劇界に新生面を開き、先代とは又型のちがつた、そしてより偉大な名優になつた。それに引きかへ麒麟兒ぼたんは進升になつてから「秀デテ實ラズ」そのまま今日に至つてゐる。さらに團十郎すらが、若い權十郎時代には「權ちゃん甘い」といはれたさうな。大器晩成なるかな、大器晩成なるかな。



二二七 子ノタマハク、後生長ルベシ。イヅクンゾ來者ノ今ニ如カザルヲ知ランヤ。四  
十五十ニシテ聞コユル無クンバ、ソレ亦長ルルニ足ラザルノミ。

「後生」は「先キニ生マレタル者」(二四)に對する「後ニ生マル者」。

「四十五十」——禮記(内則篇)ニ「四十ヲ強ト曰フ、仕フ。五十命ゼラレテ大夫ト爲リ官政ニ服ス。」とある。すなはち身を立て道を行ふ時である。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「若い者はおそろしい。明日の後進が今日の先輩に及ばぬとどうして言ひ切れようぞ。しかし四十歳五十歳にもなつて善行有能の名が聞えぬやうでは、おそるるに足らなす。』

孔子様が若い門人たちを見渡して、其將來を楽しみに思はれると同時に、前章にいはゆる「秀デテ實ラザル」者になりはしないかと心配された言葉であらう。私なども、故山本元帥と御同様「今の若い者は」などは申せぬ、と感心することがしばしばあるが、同時に「今時の若い者は」と言ひたくなることもないではない。

のは、ヤツパリ年を取つたせいであらうか。

参照——四五七

二二八

子ノタマハク、法語ノ言ハ能ク從フコト無カラシヤ。コレヲ改ムルヲ貴シト爲ス。巽興ノ言ハ能ク説ブコト無カラシヤ。コレヲ釋ヌルヲ貴シト爲ス。説ビテ釋ネズ、從ヒテ改メズ。ソレ未ダコレヲ如何トモスルコトナキノミ。

古註に「法語ハ正シクコレヲ言フナリ。巽興ハ婉ニシテコレヲ導クナリ。」とある。

「釋」は糸口をたぐり出すこと。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、「真正面からの忠告は、イヤと言へぬから、ハイとは言ふだらうが、ハイと言つただけではだめで、其忠告をいれて過ちを改めるのが貴いのである。遠廻しの忠告は、耳當りがよいから、悦ぶではあらうが、其意の在る所を汲み取るのが貴いのである。ハイと言つた



だけで改めず、悦んだだけで意味がわからない、といふやうなことで、わしも何とも手の付けやうがない。」

二二九 子ノタマハク、忠信ヲ主トシ、已ニ如カザル者ヲ友トスルナカレ、過ツテハスナハチ改ムルニ憚ルコトナカレ。

これは既に前に出て居り(八)、重出だから現代語譯ははぶく。おそらく前章の「コレヲ改ムルヲ貴シト爲ス」と關聯させてここに並べたのだらう。

二三〇 子ノタマハク、三軍モ帥ヲ奪フベシ、匹夫モ志ヲ奪フベカラズ。

「匹夫」を「微賤の者」の意味に取つてもよいが、「三軍」の對句として、「一人」として置かう。

孔子様がおつしやるやう、「大軍で守つてゐる大將をとりこにすることは出来ても、ひとりの人

間の志を動かすことはできなす。」

古註に「三軍ノ勇ハ人ニ在リ、匹夫ノ志ハ己レニ在リ。故ニ帥ハ奪フベク、志ハ奪フベカラザルナリ。モシ奪フベクンバ、コレヲ志ト謂フニ足ラズ。」とある。

二三一 子ノタマハク、敵レタル縵袍ヲ衣、狐貉ヲ衣タル者ト立チテ恥ヂザル者ハ、ソレ由ナルカ。伎ハズ求ラズ、何ヲ用ツテカ臧カラザラン 子路終身コレヲ誦ス。子ノタマハク、コノ道ヤ、何ゾ以テ臧シトスルニ足ラン。

「縵」は綿の代用品で、「縵袍」は綿入れよりはさらに下等な衣服だが、假りに「綿入布子」と言つて置かう。「終身」はここでは「一生」ではなく、「平生」の意。

孔子様が「ほころびた綿入布子」をきて、狐むじなの毛皮をきた者とならび立つても、恥しいやうな顔もせず平氣であるのが、由の由たる所だらうか。詩經に「人の有るを嫉んでそこなはうとせ



す、おのれの無きを恥ぢてむさぼらうとせぬ、まことに結構ではないか。といふ意味の文句があるが、正に由ソツクリぢや。」と褒められた。子路が得意になつて、其後始終右の詩句をくちさずんでゐたので、孔子様がたしなめておつしやるやう、「それだけでは消極的で、まだ結構とは言へぬぞ。』

此本文は元來前後兩段が別章なのだ、といふ説もある。なるほど後段の孔子様の言葉は前段よりも後の場合の話と思はれるが、話が一続きだから一章にしたのだらう。

前段はかねての子路の志で（一一七）、最も得意とする所、それを褒められ少々有頂天の氣味なので、「惡衣惡食ヲ恥ヂヌ」（七五）だけではまだ十分結構とは言へぬぞ、と抑へられたのである。「何ヲ用ツテ臧カラザラン」の句を「何ゾ以テ臧シトスルニ足ラン」と變へて逆を言つた所に孔子様の修辭技巧がある。

二三三 子ノタマハク、歳寒クシテ然ル後松柏ノ凋ムニ後ルルヲ知ル。

「シボムニオクルル」は「ノチニシボム」のではなく、「外ノ木ノ葉ガシボムアトマデ殘ツテシボマヌ」の意。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「嚴寒の候、ほかの木の葉がしほみ落ちる時になつて、はじめて松やカヤのみどり色かへぬときは木たることがわかる。』

「國亂レテ忠臣アラハレ、家貧ニシテ孝子出ツ。」で、人間の眞價も大困難に遇つてはじめて發揮されるものぞ、といふ趣旨であること言ふまでもない。今日の日本こそ正に「歳寒クシテ」だが、われわれ願くは「凋ムニ後ルル」松柏の操を堅持したいものだ。

二三三 子ノタマハク、知者ハ惑ハズ、仁者ハ憂ヘズ、勇者ハ懼レズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「知者は道理に明かだから迷はない。仁者は常に道理に従ひ私慾がなから心配しない。勇者は道理の命ずる所を信じて行ふからこはがらない。』



この頃のやうに惑ひつ愛ひつ懼れつの有様では、全く以てなさない。願くは國家としても、又個人としても、「惑ハズ愛ヘズ懼レズ」の知仁勇三徳兼備でありたいものだ。

二三四 子ノタマハク、與ニ共ニ學ブベシ、未ダ與ニ道ニ適クベカラズ。與ニ道ニ適クベシ、未ダ與ニ立ツベカラズ。與ニ立ツベシ、未ダ與ニ權ルベカラズ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、「共に學問に志す人は求め得ようが、共に道に進み得る人は得難い。共に道に進み得る人はあつても、共に道の上に立つて物に動かされない人を得ることはさらにむづかしい。共に立つことのできる人は得られても、事の宜しさに随つて變通し本末の輕重をはかつて正義に合せしめることを共にする人を得ることは、難中の至難ぢや。」

孔子様の學問はけつして固定的でなく、結局は義にかなつた臨機應變なのだ、その義にかなつた臨機應變が至難なのだ。

二三五 唐棣ノ華、偏トシテソレ反ル。アニナンチヲ思ハザランヤ、室コレ遠ケレバナリト。子ノタマハク、未ダコレヲ思ハザルナリ。何ノ遠キコトカコレ有ラン。

前段は當時の民謡らしい。イクリの花がヒラヒラとひるがへる、といふので、かの萬葉の「野守は見ずや君が袖振る」の趣だ。

X X X X

『いくりの花がひらひら招く、思はぬぢやないが、住居が遠い。』といふ民謡がある。孔子様がおつしやるやう、『それはまた思はぬのぢや。思ふならば、何の遠いことがあらうか。』

孔子様が男女相思の民謡をかりて第一七六章の意味を言はれたのだ。孔子に戀歌は不似合だといふので、これは賢人を思ふ古詩だとする學者がある。それだから道學先生はせつかくの論語を乾燥無味にするといふのだ。孔子様はそんなボクネンジンではない。もしわが國の俗謡を御存知だつたら、『日本には「ほれて通へば千里も一里」といふがあるよ。』とおつしやつたかも知れない。



### 郷黨第十

郷黨篇は他と趣を異にし、「子曰」があたまにならんでゐない。すなはち孔子様自身の教訓ではなく、門人が先生を客観的に描寫した記録であつて、これで孔子様の風采や生活が相當によくわかる。其意味では論語中大切な部分なのだが、實のところ若い頃に讀んだときには一向面白く感ぜず、むつかしい字が多く、何々然、何々如とばかりで、やつかない一篇だと思つてゐた。

ところが年をとるにしたがつてだんだんに面白く感じ出したが、殊に昨昭和二十年、永い間の書生生活から一足飛びに「なれぬ雲井の宮仕へ」にはいつて後、此篇を讀んで見ている思ひ當る所があり、すこぶる感興をもつに至り、或程度は實際上の参考にもなつたことである。此編は元來全部一章として書いてあつたらしく、それを後に十何章に分けたので、刊本によつて其數が必ずしも同じでない。ここでは一番普通に行はれてゐる分け方によつた。

二三六 孔子郷黨ニ於テハ、恂恂如タリ。言フコト能ハザル者ニ似タリ。ソノ宗廟朝廷ニ在ルヤ、便便トシテ言フ。タダ謹ムノミ。

X

X

X

X

孔子様が郷里家庭に居られるときには、恭順質朴な御様子で、ロクロク口もさき得ないやうに見える。大廟や朝廷ではスラスラと物を言はれる。ただ言語態度をつつしまれることはもちろんである。

郷里や家庭では、長老や目上もゐること故、先に立つて利口ぶつた口をきかないのである。大廟や朝廷は儀式や政治の大事な公務の場所だから、言ふべきだけの事はハッキリと言ふ。ただ言葉づかひのていねいなことはもちろんだ。

二三七 朝ニ下大夫ト言ヘバ、侃侃如タリ、上大夫ト言ヘバ、誾誾如タリ、君在セバ、蹀躞如タリ、與與如タリ。

X

X

X

X

朝廷で下級の大夫と語るときは、隔意なく打ち解けた様子であり、上席の大夫と語るときはかへ



つてキチンとした中正な態度である。君が朝廷に出て居られる場合には、うやうやしくつつしんで席に安んぜぬやうだが、さりとしてしやちこぼるのではなく、ユツタリと落ちついておられる。

前に「恭ニシテ安シ」とある(二八四)のが、此最後の部分に當る。

「侃侃」「闐闐」については、二六五参照。

二三八

君召シテ櫛<sup>ヒシ</sup>セシムレバ、色<sup>ホツゾ</sup>勃如タリ、足<sup>アシカクゾ</sup>如タリ。與ニ立ツ所ヲ揖スレバ手ヲ左右ニス、衣<sup>コロモ</sup>ノ前後檐<sup>セシ</sup>如タリ。趨<sup>ツシ</sup>リ進ムヤ翼<sup>ヨクシヨ</sup>如タリ。賓退<sup>ヒシ</sup>ケバ必ず復命シテ曰ク、賓顧ミズト。

X X X X X

君の御召で貴賓や外國使節などの接待を命ぜられると、これは大事の御用とばかり、顔色を變へ、足も進み得ぬやうな謹んだ様子をなさる。同役としてならび立つ接待掛にあいさつするため、左を向き右を向いて、こまねいた手を上げ下げされるが、其場合に衣の前後がキチンとして亂れな<sup>い</sup>賓客の御案内をして小走りに進むとき、肱を張るので、兩袖が翼のやうにひろがる。賓客が退

出するのを送つて出た後、必ず御前へ出て、「御客様は御満足で後ろを見かへらずに御歸りになりました。と復命する。

このあたりは昨年以來しばしば體驗する所で、そのたびに「趨り進ムヤ翼如タリ」といふことを思ひ出す。

二三九

公門ニ入レバ鞠躬<sup>キツキユツジョ</sup>如タリ。容<sup>イ</sup>レラレザルガ如シ。立ツニ門ニ中<sup>チユウ</sup>セズ、行クニ闕<sup>シキ</sup>ヲ履マズ。位<sup>クラキ</sup>ヲ過グレバ、色勃如タリ、足<sup>カクゾ</sup>如タリ、其言足<sup>コトク</sup>ラザル者ニ似タリ。齊<sup>モスツ</sup>ヲ攝<sup>カカ</sup>ゲテ堂ニ升<sup>ノボ</sup>レバ、鞠躬如タリ、氣ヲ屏<sup>オウ</sup>メテ息<sup>イキ</sup>セザル者ニ似タリ。出デテ一等ヲ降<sup>ヘ</sup>レバ、顔色ヲ逞<sup>ハナ</sup>チテ怡怡<sup>イイゾヨ</sup>如タリ。階ヲ没<sup>ヘ</sup>シテ趨<sup>ツシ</sup>リ進ムヤ翼如タリ。其位ニ復<sup>カヘ</sup>レバ蹶<sup>シユクセキツヨ</sup>踏<sup>フミ</sup>如タリ。

「屏」を「ヒソメテ」とよむ人もある。

X X X X

御所の門をはいるときは、小腰をかがめて、いれてもらへないやうな様子である、ツカツカと大



手を振つて通つたりしない。門で立ちどまる場合にも、中央に立ちふさがらない。そこは君の通られる所だからである。又門の敷居は踏まずにまたいで通る。敷居を踏むのは無作法だし、あとから来る人の裾をよごすおそれがあるからである。門内に君の立たれる位置があるが、其前を通るときは、それが空席であつても、顔色を變じ足進まざる様子をすする。門から堂までの間も、多言せず又は、高ばなしせず、口不調法な人のやうである。堂にのぼるときは、衣の前を踏んでつまづかぬやう、裾を引き上げ小腰をかがめて階段をのぼるが、息を殺して呼吸もせぬかのやうである。御前をさがつて階を一段おりと、顔色をやはらげてにこやかになり、階段をおりきると、兩袖を翼の如く張つて小走りに席にかへり、うやうやしくひかへて居られる。

「其席ニ復ス」を、再び君の空席の前を通る意味に解する人もある。

二四〇

圭ヲ執レバ鞠躬如タリ、勝ヘザルガ如シ。上グルハ揖スルガ如ク、下グルハ授クルガ如シ。勃如トシテ戦色アリ、足踏踏トシテ循フコト有ルガ如シ。享禮ニハ容色有リ、私覲ニハ愉愉如タリ。

「圭」は天子が諸侯を封する時に授ける其位のしるしの玉の物。諸侯が大夫を他國へ使にやる場合には、いはば信任状といふやうな意味で、模造の圭を持たせてやる。

「循」は足の爪先を上げかかとで地をすつて進むこと。

諸侯の使が相手國の君に謁するに、第一段の正式會見が「聘禮」、第二段の贈物披露が「享禮」、第三段の個人としての謁見が「私覲」である。

X

X

X

君の使として相手國の君に謁するとき、まづ聘禮では、圭を兩手にささげ小腰をかがめて進まれるが、圭はさして重いものではないけれど、其重さにたへないといふ風に大事に持ち、動作につれて多少の上がり下がりはあるが、上がつても手をこまねいてあいさつする程度の高さであり、下がつても人に物を授ける程度の低さである。そして落しては大變だといふやうに、顔色を變じてすこしふるふる氣味があり、足は小股ですり足の形である。享禮となると顔色やはらぎ、さらに私覲となると、一段と打ちとけられる。

孔子様が魯の君の使として他國に行かれたことは記録に見えないから、此一段はかうもあらうかといふ想像



だ、といふ説があるが、逆にこれを孔子様が外交使節をつとめられたことのある證據と見たい。伊藤仁齋曰く「按ズルニ、孔子隣國ニ聘セラレシ事ハ、經傳ニ載セズト雖モ、然レドモ當時門人親シク見テ直チニコレヲ記シタルハ、スナハチ總黨ノ一篇ニシテ、モットモ信據スベキナリ。」

二四一

君子紺纁ヲ以テ飾トセズ、紅紫以テ褻服ト爲サズ。暑ニ當リテハ袷ノ縹纁ス。必ズ表シテ出ヅ。縹衣ニハ羔裘シ、素衣ニハ麕裘シ、黄衣ニハ狐裘ス。褻裘ハ長クシ、右ノ袂ヲ短クス。必ズ寢衣有リ、長サ一身有半、狐貉ノ厚キ以テ居ル。喪ヲ去レバ佩ビザルトコロ無シ。惟裳ニアラザレバ必ズコレヲ殺ス。羔裘玄冠、以テ期セズ。吉月ニハ必ズ朝服シテ朝ス。

これは孔子様の服装の記録であつて、孔家に傳へられたものといふ。すなはちここで「君子」といふのは孔子様のこと。服地や染色や型など、着色圖でも載せて詳しく説明せねばならぬわけだが、簡略にして置く。「必ズ表シテ之ヲ出ダス」と書いた本もある。それだと下着の上にひとへをきることになるが、やはり「之」の字のない方がよさうだ。

X X X X X

孔子様の服装はすこぶる禮儀正しいものであつた。紺色や栗梅色は喪の色だから、其色の布を襟や袖口にしなかつた。紅や紫ははでなまめかしいから、ふだんぎにしなかつた。暑い時には麻のひとへをきるが、客に會つたり外出するときには、必ず其上にうわぎをきた。黒衣には子羊の黒い毛皮、白衣には子鹿の白い毛衣、黄衣には黄色の狐の毛皮、といふ風に、上着も下着も同色を用ひた。ふだんぎの毛衣は、暖かさを主として長めにし、右の袖をたくし上げうるやうに仕立てた。ねるには必ずねまきにさかへ、ねまきは身長一倍半のたけにした。喪の時以外は玉其他一通りの装身具をつける。禮服の場合の裳は一幅のきれで腰の部分にひだを取るが、其以外は上をそぎ下を縫はせる。黒は吉禮の色だから、黒い冠や黒い毛衣では弔問や葬式に行かない。大夫をやめた後でも、毎月朔日には大禮服で朝廷に參賀される。

毎月朔日は例の「告朔」の日なので、其禮は當時もはや行はれなかつたが、孔子様は必ず古禮によつて參賀されたのである(五七)。



二四二 齊スレバ必ズ明衣有リ、布ヲモツテス。齊スレバ必ズ食ヲ變ジ、居レバ必ズ坐ヲ遷ス。

「齊」は「齋」に同じ。「ものしみ」はゆる齋戒沐浴すること。

X X X X

ものいみをされる場合には、必ずあかるい色の淨衣を著する。其衣は布でつくる。ものいみ中は食事もかへて、酒を飲まず、にんにくのやうな臭いものをたべず、平生の居間とは別の部屋に居られる。

二四三

食ハ精キヲ厭ハズ、膾ハ細キヲ厭ハズ。食ノ饑シテ餽セル、魚ノ餒シテ肉ノ敗レタルヲ食ハズ。色悪シキハ食ハズ。臭悪シキハ食ハズ。飪ヲ失ヒタルハ食ハズ。時ナラザルハ食ハズ。割正シカラザレバ食ハズ。其醬ヲ得ザレバ食ハズ。肉多シト雖モ食氣ニ勝タシメズ。タダ酒ハ量無シ、亂ニ及バズ。沽酒市脯ハ食ハズ。薑ヲ撒セズシテ食フ。多ク食ハズ。公ニ祭レバ肉ヲ宿セズ。祭肉ハ三日

ヲ出ダサズ、三日ヲ出ヅレバコレヲ食ハズ。食フニ語ラズ、寢ヌルニ言ハズ。疏食菜羹瓜ト雖モ祭ル。必ズ齊如タリ。

これは孔子様の食生活である。今時こんな事は言つてゐられないが、孔子様のキチヨウメンな性質があらはれてゐる。文字の講釋もいろいろあり、又異説もあるが、前者は略し、後者は二三を後にしるさう。

「言」は自ら言ふ。「語」は人の言に答へる。

X X X X

飯は精白な方がよいとはされるが、せひさうなくてはならぬといふのではない。さしきは細切りの方がよいとはされるが、せひさうなくてはならぬといふのではない。飯のすえて味の變つたもの、又魚のただれたもの、獸肉の腐つたものはたべない。色の悪いものはたべない。にほひの悪いものはたべない。煮過ぎたものや生煮えのものなど、料理の適度を失つたものはたべない。行儀よく切つたものでなければたべない。魚や肉は、何にはカラシ醬油、何にはシヨウガ醬油、何にはワサビ醬油といふやうな、それぞれ合ひ物のかけ汁がなければたべない。副食の肉料理がたくさんあつても、主食なる飯の食慾を壓倒するほどはたべない。ただ酒は、どのくらゐといふ分量はきめな



いが、酔つて取り亂すほどは飲まない。町で賣る酒や市場で買った乾肉はたべない。料理のツツについてゐるシヨウガは、毒消しになるから、下げさせずにたべる。大食しない。殿様の御祭のおてつだひをした時頂戴して歸る供物の生肉は、宵越をさせずに家人にただかせる。又家の祭の供物の肉は、三日たためうちに處分し、三日を過ぎたらたべない。食事中絶対に談話せぬといふのではないが、食物をたべかけてゐるとき人から話しかけられるとも返事せず、又寢床にはいつてから人に話しかけない。玄米飯や野菜汁や瓜のやうなものでも、まづ一箸を膳の向に供へて、天地と祖先と生産者と共に謝意を表する。それも形式的のおまじなひでなくまごころこめ、供養するのである。

「厭ハズ」をただ「厭ハズ」ではあたりまへのこと故、「厭ハズトハ、コレヲ以テ善シト爲スヲ言フ。必ずカクノ如キヲ欲スルノ謂ニアラズ。」といふ古註に従つた。

「時ナラザルニ」には三説がある。第一説は「食時ニアラザルヲ謂フ」とする。すなはち間食をしないといふのだ。第二説は「五穀成ラズ、果實未ダ熟セザルノ類ナリ」とする。すなはち未熟のものをたべぬといふのだ。第三説は「生ズルコト其時ニアラザルヲ謂フ」とする。すなはちいはゆる「はしり」といふやうな初物などを賞翫せぬといふのだ。第三説によつた。

前にも「酒ノ困ヲ爲サズ」(二二〇)とあつて、孔子様は御酒は相當おすぎだつたらしい。一高名物の「ゼ

カンショ節」に『論語孟子も讀んで見たが、酒を飲むなと書いてない。』といふのがあるが、しかし酔つばらつてストームをしる、とも書いてないやうだ。

町で賣る酒や乾肉を買はないといふのは、昔は衣服飲食は必ず家庭でととのへたもので、禮記に『衣服飲食ハ市ニ弼ガズ。』とあるやうな次第だからだが、今日さういふわけには行かない。しかし闇市露店屋臺店の酒や肉は用心した方がよさうだ。メチールか猫か知れたものでないから。

「多ク食ハズ」を、シヨウガを澤山たべない、と上に續けてよむ説もあるが、大食のいましめとする方が面白

5。一箸の御初穂を膳の向に供へるのは、わが國でもしたことだ。水戸烈公の「農人形」などは、此本文から出てゐるのかも知れない。

二四四 席正シカラザレバ坐ズセ。

X X X X X

座席の敷物がまがつたりしてゐるとすはらな。キチンとなほしてすはる。



二四五 郷人ノ飲酒ニ、杖者出ヅレバココニ出ヅ。郷人ノ儼ニハ、朝服シテ阼階ニ立ツ。

「杖者」は老人。禮記（玉制篇）に『五十八家ニ杖ツキ、六十八郷ニ杖ツク。』とある。  
「儼」は「鬼やらひ」。わが國の節分の豆まきに當るが、三月・八月・十二月と年三回行つた。豆をまいたか  
どうかは知らぬが、正月の獅子舞のやうに、村人が家々をまはつて厄拂ひをしたらしい。  
「阼階」は堂の東の階段、主人の出入する玄關。

X

X

X

X

村人の酒盛にも、長老が退席するのを待つて續いて出た。村人が鬼やらひをしに來ると、大夫の  
官服をつけ玄關に立つてそれを受ける。

たはむれ事見たやうになつてゐる年中行事にも、大まじめであられたのだ。

二四六 人ヲ他邦ニ問ハシムレバ、再拜シテコレヲ送ル。康子藥ヲ饋ル。拜シテコレヲ

受ク。イハク、丘未ダ達セズ、敢テ嘗メズ。

X

X

X

X

使を他國へやつて人を見舞はせる場合には、再拜して送り出された。魯の大夫の季康子が病氣見  
舞に藥を贈つたとき、病中であるのに拜禮してこれを受け、さて使者に向つて、「御好意かたじけ  
なく御禮申し上げますが、御藥が病症に適するかどうかまだ心得ませんので、早速には服用致しま  
せぬ。」と言はれた。

前後兩段續かぬやうだが、使者を出したり受けたりするときのまじめな態度といふ意味で一章にしたらし  
す。

前段については、伊藤仁齋が左の如き面白い話を書いてゐる。

『宋ノ楊簡嘗テ書ヲ作りテ人ニ與へ、楊某再拜ト書シテコレヲ附ス。僕既ニ發ス。忽チ自ラ思ヘラク、親ラ  
拜セズ而シテ拜ト書スルハコレ僞ナリト。急ニ僕ヲ呼ビ返シ、書ヲ案上ニ置キ、拜ヲ設ケテシカル後ニ遣  
ル。暗ニ孔子拜シテ使者ヲ送ルノ意ニ合ス。學者カクノ如キノ忠信有リ、シカル後ニ以テ學ヲ言フベシ。』  
後段については古註に左の如くある。

『大夫賜フ有リ、拜シテコレヲ受クルハ禮ナリ。未ダ達セズシテ敢テ嘗メザルハ、病ヲ謹ムナリ。必ズコレ



ヲ告グルハ直ナリ。」

二四七 厩焚<sup>ウマヤキ</sup>ケタリ。子朝<sup>チヨウ</sup>ヨリ退イテノタマハク、人ヲ傷<sup>ソコナ</sup>ヘリヤト。馬ヲ問ハズ。

X X X X X

孔子様が御役所へ出勤の留守、馬屋が失火で焼けた。歸宅してそれを聞かれたが、「人にけがはなかつたか。」といはれたさりで、馬の事を問はれなかつた。

これは「厩火事」といふ落語があるほど、有名な一段だ。

馬をも問はぬのは不仁だといふので、「人ヲ傷ヘリヤ否ヤ。馬ヲ問フ。」とよみ、まづ人を、次に馬を、と解する人があるが、それは考へ過ぎだ。むしろ責任問題の起ることを避ける意味で馬を不問に附されたのだ、と解した。

二四八 君食<sup>シ</sup>ヲ賜<sup>ハ</sup>ヘバ、必ラズ席ヲ正シテ先ヅコレヲ嘗<sup>ナ</sup>ム。君腥<sup>セイ</sup>ヲ賜<sup>ハ</sup>ヘバ、必ズ熟シテコレヲ薦<sup>ス</sup>ム。君生<sup>シ</sup>ヲ賜<sup>ハ</sup>ヘバ、必ズコレヲ畜<sup>ヤシ</sup>フ。君ニ侍食スルニ、君祭レバ先ヅ

飯<sup>シ</sup>ス。疾<sup>ム</sup>トキ君コレヲ視レバ、東首シテ朝服ヲ加ヘ紳<sup>シ</sup>ヲ施<sup>ヒ</sup>ク。君命ジテ召セバ、駕<sup>ガ</sup>ヲ俟<sup>マ</sup>タズシテ行ク。

X X X X X

君が御料理をくださると、必ず席を正しくしてさつそく頂戴する。君が生肉をくださると、必ず煮て先づ祖先の靈に供へる。君が生きた動物をくださると、必ずそれを飼つて置く。君の御相伴をするとき、君が食前の祭をされる間に、まづ御毒味をする。病氣のとき君が見舞に來られると、東枕にねて君が南面なされるやうにし、禮服を寢具の上に向け、東帯を其上に引く。家に在るとき君の御召があると、馬車の用意が出来るのを待たずに出かける。

「紳」は官服の大帯で、わが國ならば束帯といふ所だ。「紳士」といふ言葉はこれから來てゐる。」

二四九 大廟ニ入リテ事毎ニ問フ。

これは前に今少し長文で出た(五五)。



二五〇 朋友死シテ歸スル所無ケレバ、ノタマハク、ワレニ於テ殯セント。朋友ノ饋ハ、車馬ト雖モ、祭肉ニアラザレバ拜セズ

「殯」は「カリモガリ」入棺してまだ本葬をしない間をいふ。天子は七ヶ月、諸侯は五ヶ月、大夫は三ヶ月、士は二ヶ月、といふ古禮になつてゐる。そして支那では今でもさうのやうだが、故郷外で死んだ者の遺骸は、「カリモガリ」して置いて便宜の時祖先の墓地へ歸葬するのが、古來の慣行であつた。

X X X X X

友人が死んで此土地に遺骸を引取るべき親類のない場合には、わしの所で「カリモガリ」を引受けよう、と申し出た。朋友から贈物があつたときには、友達の間柄の事だから、車馬のやうな高價な贈物でも、祭の供物の肉の場合の外は、拜禮をしない。

出獄人保護事業で有名だつた故原胤昭翁は、元は相當の幕臣で、印幡沼のほとりに廣い墓地をもつてゐるが、其墓地には同一家一族以外の者の墓が五十何基がある。それは世話になつた人々のうち死んでも引取り手の

ない者及び前科者なるが故に故郷では遺骨をも容れられぬ者を葬つた墓である。中には、先生の墓地に葬つてくれ、と遺言して死んだ者もあるといふ。實際そこまでの親切は中々出来ない事だ。

二五一 寢スルニ尸セズ居ルニ容ラズ。齊衰者ヲ見レバ、狎レタリト雖モ必ズ變ズ。是者ト替者トヲ見レバ、褻レタリト雖モ必ズ貌ヲ以テス。凶服者ニハコレニ式ス。負版者ニモ式ス。盛饌アレバ必ズ色ヲ變ジテ作ツ。迅雷風烈ニハ必ズ變ズ。

「版」は戸籍簿。民政の根本たる大事の書類故、それをついで行くのは役所の下役小使でも、戸籍そのものに對して敬意を表されたのである。

X X X X X

ねるときには、死骸を投げ出したやうなねぞうのわるいかつこうをしない。起きてゐるときには強ひて容態ぶらない。喪服をきた人を見ると、親密な間柄でも顔色を變ずる。衣冠をつけた人や又盲人を見ると、別懇の間柄でも形を改める。車に乗つて通るとき、喪服の人にあふと、車の前の横木に手をかけてあたまを下げた。戸籍簿の運搬者にも禮をした。りつばな御馳走が出ると、これは



これはと驚いた顔附をし、立つて主人の厚意を謝した。急に雷鳴がしたり烈風が起ると、天變地異に恐懼する意味で、いつも顔色を變へて立ち上つた。

「イスルニシカバネセス」は、若人たち相當耳がいたからう。

齊衰者、冕者・替者については、前にも同様の記事がある(二二四)。

雷鳴や暴風を恐怖するのではない。天變地異を馬鹿にせず、天の警告と取つて畏こみ慎むのであつて、禮記(玉藻篇)にも『モン疾風迅雷甚雨有レバ、スナハチ必ズ變ズ。夜ト雖モ必ズ興チ、衣服冠シテ坐ス。』とある。ともかく本章の末句は有名だ。十八史略に左の記事がある。

「車騎將軍董承、密詔ヲ受クト稱シ、劉備トトモニ曹操ヲ誅セントス、曹操一日從容トシテ備ニ謂ツテ曰ク、今天下ノ英雄ハ、タダ使君ト操ノミト。備マサニ食ス。匕筋ヲ失ス。雷震ニ値ツテ詭ツテ曰ク、聖人云フ、迅雷疾風ニハ必ズ變ズト。マコトニ以アリ。」

二五二 車ニ升レバ必ズ正シク立チテ綏ヲ執ル。車中ニテハ、内顧セズ、疾言セズ、親指セズ。

X X X X

車に乗るときには、眞直に立つて車の吊革を握り、踏みはづしたりつまづいたりせぬやう、ユツクリと落ちついて乗る。車の中では、あちこち振り向いたり、高聲早口で物を言つたり、ゆびさしたりしない。

「親指セズ」で思ひ出したが、西洋では、往來で他人を指さすのは失禮な事とされて居り、向から來る人をジロジロ見たり、行き過ぎてからふりかへつて見ることも不作法となつてゐる。三十年も前の話だが、ロンドンの往來で向から母親が五つ六つのお人形のやうな女の子の手をひいて來る。あまりかはいいので、子供さきの私は目はなさず見ながら近づいたが、間もなく行きちがつた残り惜しさに、思はず振りかへつて其子を見た。すると少女も、やはり「異人さん」が物めづらしかつたものと見えて、同時に振りかへつて私を見た。とたん、母親が其子の耳をグイと引つばつた。そんな失禮不作法をするものではありません、とたしなめたのだ。私は自分の耳を引つばられたやうな氣持がした。

二五三 色ミテココニ舉リ翔リテ後ニ集ル。ノタマハク、山梁ノ雌雉、時ナルカナ、時ナルカナト。子路コレニ共フ。三タビ嗅イテ作ツ。



本章はいささか難解で、いろいろの説があるが、孔子様が雉の進退時を得たりと褒めたことを語つて、孔子様自身の進退こそ「時ナルカナ、時ナルカナ」とほめめかし、以て郷黨第十の聖人描寫を結んだもの、とする説が面白い。

X

X

X

X

孔子様が門人たちと山路を行かれたとき、行手の山橋のほとりにおりてゐた雌雉が、人のけはひに一度飛び立つたが、一廻り輪をかくと、害心なしと見定めて、再び元の所へおり立つた。孔子様がこれを見て、『山路の橋の雌雉よ、飛ぶも返るも時を得たるかな、時を得たるかな。』と感嘆された。すると子路が、おとなげもなくつかまへようとも思つたか、雉に近寄つたので、雉は三度鳴いて飛び去つた。

最後の二句を、子路が雉に食物を投げ與へたところ、三度かいだけでたべずに飛び去つた、といふ意味に解する説もある。

中村正直が本章に關聯して論語の文章につき左の如く言つてゐるのは、すこぶるわが意を得たものだ。

『色ミテココニ舉リ、翔リテ後ニ集マル、トハ何物タルヲ言ハズ、讀ミテ下段ニ至リテ、マサニコレ雌雉タルヲ知ル、絶世ノ妙文、天衣無縫ナリ。ケダシ郷黨一篇、門人力ヲ極メテ描寫シ、聖人ノ聲音笑貌、躍然トシテ現出シ、行住坐臥、八面俱ニ到ル。儀禮・檀弓・考工記皆及ブコト能ハズ。知ルベシ、周人ノ文精妙絶倫、而シテ論語ノ文ハスナハチ又類ヲ出デ萃ヲ抜クモノノミ。』



### 先進 第十一

此篇には主として門人其他の人物評を集めてある。

二五四 子ノタマハク、先進ノ禮樂ニ於ケルハ野人ナリ。後進ノ禮樂ニ於ケルハ君子ナリ。モシコレヲ用ヒバ、スナハチワレハ先進ニ從ハン。

「先進」「後進」は「先輩」「後輩」である。ここでは殷末周初の人と周末すなはち當時の人をいふ。

この「君子」は現在の「紳士」といふくらの意味。

「先ヅ禮樂ニ進ムハ」「後ニ禮樂ニ進ムハ」とよんで全然別の解釋をする人もあるが、省略する。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、「昔の人の禮樂に對する態度は、いなか者的質朴であつた。今の人の禮樂に對する態度は、紳士の華美である。いづれも完全ではないが、もしどちらか一つによれと

いふなら、わしは昔流儀に從はう。」

安井息軒曰く、

『周公ノ禮ヲ制スル、文ヲ尙ビテ以テ殷ノ質ヲ變ゼリ。スナハチ周公ノ俗ハ必ず質文ニ勝テリ。周道ステニ衰へ、孔子ノ時ニ至リテハ、文日ニ勝チテ質衰フ。孔子コレヲ周初ノ盛ニ反サント欲ス。故ニ此言ヲ發セルナリ。』

二五五 子ノタマハク、ワレニ陳蔡ニ從ヒシ者ハ、皆門ニ及バザルナリト。德行ニハ顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語ニハ宰我・子夏、政事ニハ冉有・季路、文學ニハ子游・子夏

× × × × ×

「陣蔡方面に同行して共に難儀した門人たちも、或は死亡し、或は出でて仕へ、或は歸國して、今は誰も門下に居らぬ。さびしい事かな。」と孔子様が晩年に歎息された。其人々は、德行がすぐれた者としては顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語にまさらつた者としては宰我・子貢、政治で聞えた



者としては冉有・季路（子路）、文學に長じた者としては子游・子夏であつた。

此十人は編者の附記と思はれるが、これがいはゆる「孔門の十哲」である。もつとも曾參・有若などといふ優等生がはいつてゐないが、此二人は若い門人で、陣禁に隨行せず、又當時門下にゐたのであらう。なほ冉有も「陣禁に従ヒシ者」ではないが、古い門人だから加へたらしい。

二五六 子ノタマハク、回ヤワレヲ助クル者ニアラザルナリ。ワガ言ニ於テ説ヨロコバザル所無シ。

「助」ハ「益」である。古註に、『ワレヲ助クトハ、子夏ノワレヲ起ス（四八）ガゴトシ。疑問ニ因リテ以テ相長ズルアルナリ。』とある。

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『顔回は質問によつてわしを啓發してはくれない。何分にもわしの言ふことをたちどころに理解して喜んでしまふものだから。』

いはゆる顔回が「終日違ハズ愚ナルガ如」きを言はれたのであつて、「困つたものぢや」といふやうに聞えて實は「大したものぢや」とほめられたのである。質問で「助クル者」ではなかつたが、實行では孔子様も啓發されたのであつて、すなはち「亦以テ發スルニ足ル。回ヤ愚ナラズ。」であつた（二一五）。

二五七 子ノタマハク、孝ナルカナ閔子騫、人其父母昆弟ノ言ヲ聞セズ。

閔子騫が二十四孝の一人であることは前に言つたが、「孝子傳」に曰く、

『閔子騫親ニ事ヘテ孝ナリ。後母コウヂニ子ヲ生ム。コレニ絮（綿入）ヲ衣セ、襦ニ衣スルニ蘆花ヲ以テス。父察知シ、後母ヲ出ダサント欲ス。騫父ニ告ゲテ曰ク、母在サバ一子寒ニ、母去ラバ三子寒エント。父遂ニ出ダサズ。其母モ變化シテ慈ト爲ル。』

X X X X X

孔子様がおつしやるやう、『孝行なことかな、閔子騫は父母兄弟が彼をほめても、人が親馬鹿



身びいさだと言はぬ。』

「人其父母昆弟ヲ問スルノ言ナシ」とよんで、他人が其父母兄弟の悪口を言はぬ、と解する人もあるが、文法上無理なやうだ。

二五八 南容白圭ヲ三復ス。孔子其兄ノ子ヲ以テコレニ妻ハス。

「白圭」は詩經（大雅抑篇）の詩。

「白圭（白玉）ノ玷ケタルハ尙ホ磨クベシ。斯ノ言ノ玷ケタルハ爲ムベカラズ。」

X

X

X

X

南容は、詩經を讀んで白圭の詩の所に來ると、何度もくりかへして打ち誦じた。かやうに言葉を慎む男ならばまちがひなからうといふので、兄の娘を嫁にやられた。

孔子様が南容に姪をやつた話は前にも出てゐる（九三）。其場合に「廢テラレズ」「刑戮ヲ免ル」とあるの

も、南容が慎み深いからである。

二五九 季康子問フ、弟子孰カ學ヲ好ムト爲ス。孔子對ヘテイハク、顔回ナル者アリ、學ヲ好メリ、不幸短命ニシテ死セリ、今ヤスナハチ亡シ。

哀公が同じく問ひ孔子様が同じく答へたことが前に出てゐるが（二二二）、前の場合の方が詳しい。重複ではない。哀公と季康子とがそれぞれ別に問ふたのである。

X

X

X

X

季康子が一門人中だれが學問が好きですか。』とたづねた。孔子様が答へられるやう、『顔回といふ者があつて、學問好きでありましたが、不幸にも短命でなくなり、今はもう居りません。』

二六〇 顔淵死ス。顔路子ノ車ヲ請ヒテ以テコレガ椁ヲ爲ラントス。子ノタマハク、才モ不才モ亦各其子ト言フナリ。鯉ヤ死セシトキ、棺有リテ椁無カリキ。ワレ徒行シテ以テコレガ椁ヲ爲ラザリシハ、ワレ大夫ノ後ニ從フヲ以テ徒行スベカラ



ザレバナリ。

顔路ハ顔回の父、名を無繇ムトといふ。孔子様がはじめて教へた時の門人で、六歳の年少。

「鯉」は孔子様の子なる伯魚の名。誕生の時魯の君から祝に鯉魚を賜はつたので名づけたといふ。御氣の毒ながら賢とはいへなかつたらしい。「才不才」と言はれたのは、「お前の子は賢く、わしの子は賢くないが」の意味を含んでゐよう。

X X X X X

顔淵が死んだ。父の顔路が、貧しくて外棺がととのへられないので、孔子様の車を譲つていただきそれを金にかへて外棺を買ひたいと願つた。愛弟子のことだから承知されるかと思つたところ、孔子様はそれをおつしやるやう、「子が賢くても賢くなくても、せめて葬式ぐらゐはりつばに出してやりたいと思ふ親の情には變りがない。わしの息子の鯉が死んだときも、内棺は出来たが外棺がととのはなくして氣をもんだことがあるので、お前の氣持はよくわかるが、車を賣つてかちあるきをしてまで外棺を買はうとしなかつたのは、わしも大夫の末席をけがしてゐるので、職掌がら車なしに徒歩で出勤といふわけにも行かなかつたからだ。お前も身分相應の所で、外棺無しに

濟ませたらどんなものだらう。」

顔回が先生に車を賣らせてまで葬式をりつばにしてもらつて喜ぶはずはないのに、其氣持がわからないとは顔路もかなり「不肖の父」だ。孔子様は、外棺の有無はお前の息子のねうちに關係ないぞよ、といふ意味を含めて、車を與へることを拒絶されたのであらう。情によつて理を曲げない孔子様がよくあらはれてゐる。

二六一 顔淵死ス。子ノタマハク、噫アア天ワレヲ喪ホロボセリ、天ワレヲ喪ホロボセリ。

X X X X X

顔淵が死んだ。孔子様がなげき悲しんでおつしやるやう、「ああ天がわしを亡ぼした、天がわしを亡ぼした。」

孔子様時に七十歳、道の後繼おとしぎとして頼みに頼んだ愛弟子に先立たれたのだから、わしもこれでおしまひぢや、と思はず最大級の言葉が出たのも無理はない。しかも二度くりかへした所に無限の痛恨がある。おそらく顔回の死を知らされた瞬間の言葉だらう。



二六二 顔淵死ス。子コレヲ哭シテ慟ス。從者イハク、子慟セリ。ノタマハク、慟スルコト有リシカ。カノ人ノ爲メニ慟セズシテ、誰ノ爲メニカセン。

X X X X X

顔淵が死んだ。孔子様が取るものも取り敢へず其家に駆けつけ、靈前で聲を上げて「哭」されたのみならず、身もだえして前後不覺に絶え入るばかり「慟」された。孔子様としては珍しい事なので、歸宅されてから、御供に行つた内弟子が、「先生は先刻慟哭なさいました。」と告げたら、孔子様がおつしやるやう、「さうか、慟哭したか。あの人のために慟哭しないで、誰のために慟哭しようぞ。」

「哀シンデ傷ラズ」(六〇)の孔子様が慟したことに気がつかなくつたのだから、從者が驚いたのも無理はない。

二六三 顔淵死ス。門人厚クコレヲ葬ラント欲ス。子ノタマハク、不可ナリ。門人厚ク

コレヲ葬ル。子ノタマハク、回ヤワレヲ視ルコト父ノゴトクセリ。ワレ視ルコト子ノゴトクナルヲ得ザリキ。ワレニアラザルナリ、カノ二三子ナリ。

「門人」は顔回の門人だといふのが通説だが、孔子様の門人、すなはち同門の友人たちと見た方が面白い。「二三子」と言はれた所からもさう取れる。

X X X X

顔淵が死んだ。同門の友人たちが葬式をりつばにしようとして計画した。そして孔子様が、「いけなさい、」とおつしやつたのに、盛大な葬儀を執り行つた。孔子様がおつしやるやう、「回はわしを父親のやうに思つてゐた。それ故わしはわが子の鯉を葬つた振合で、りつばではなくとも心がこもつた葬式をしてやりたいと思つてゐたのに、わが子の如くしてやることができなかつたのは、残念千萬だ。回もさぞ不本意に思つたらう。これはわしのせいではない。あの二三人のせいぢや。」

「喪ハソノ易メンヨリハムシロ戚メ」(四四)と、耳にタコのできるほど聞かされてゐるはずの門人たちまで此始末なのだから、當時の葬儀がいかに形式主義だつたかがわかる。



以上四章の「顔淵死ス」とりどりに名文だが、順序が前後してゐる。二六一・二六二・二六〇・二六三の順に讀むべし。

二六四

季路鬼神ニ事<sup>ツカ</sup>ヘンコトヲ問フ。子ノタマハク、未ダ人ニ事フルコト能ハズ、イヅクンゾ鬼<sup>キ</sup>ニ事ヘン。イハク、敢テ死ヲ問フ。ノタマハク、未ダ生ヲ知ラズ、イヅクンゾ死ヲ知ラン。

X

X

X

X

子路が、神靈に事へるにはどうしたらよろしや、と質問したので、孔子様が、「まだ人に事へることもできないで、どうして神靈に事へることができようぞ。」と答へられた。すると子路がさらに推しかへしておたづねした。「それでは死とは何でありますか。」孔子様がおつしやるやう、「まだ生を知らないで、どうして死を知り得やうぞ。」

古註に

『鬼神ニ事ヘンコトヲ問フハ、ケダシ祭祀ニ奉ズル所以ノ意ヲ求ムルナリ。而シテ死ハ人ノ必ず有ル所ニシ

テ知ラザルベカラズ。皆切問ナリ。然レドモ誠敬以テ人ニ事フルニ足ルニアラズンバ、スナハチ必ず神ニ事フルコト能ハズ。始ヲ原<sup>ウ</sup>ホテ生ズル所以ヲ知ルニアラズンバ、スナハチ必ず終ニ反<sup>カ</sup>リテ死スル所以ヲ知ルコト能ハズ。ケダシ幽明始終ハジメヨリ二理無シ。但コレヲ學ブニ序有リ、等ヲ踰<sup>ユ</sup>ユベカラズ。故ニ夫子コレヲ告グルコトカクノ如シ。』  
とあり、又安井息軒も

『未ダ能ハズ未ダ知ラズト言フハ、スナハチ既ニ能クシ既ニ知ルノ後チモトヨリ將ニコレニ語<sup>ツ</sup>グントスルナリ。子路ノ地位未ダココニ至ラズ、其力ヲ人事ノ急ナル所ニ用ヒンコトヲ欲ス。故ニ以テ告ゲザルナリ。』と説いてゐる。『鬼神及び死ノ事ハ明カニシ難シ、コレヲ語ルモ益無シ。故ニ答ヘザルナリ。』といふ反對論もあるが、本文の文勢から見ても、さうではないらしい。

息軒はさらに『コレケダシ子路初メテ見ユルトキノ言ナリ。』と言ふが、これはどうだらうか。入學早々かういふ質問をするはずもなし、又子路は相當進んだ後でも突飛な質問や議論をする人なので、とかく先走りたがる所を、孔子様がいましめられたのだらう。「敢テ」がうまく現代語にならなかつたが、一本釘をさされながら又推し返して「敢テ問フ」所が、いかにも子路らしくて面白い。

参照——一三九



二六五 闕子側ニ侍ス、闇闇如タリ。子路行行如タリ。冉有・子貢侃侃如タリ。子樂ム。由ヤガ如キハ、其死ノ然ルヲ得ザラン。

「若由也」を「由ガゴトキハ」とよんでもよいが、「也」は親愛の呼び方で、わが國で女中を呼んで「梅や」「竹や」といふやうなものだらうから、「由ヤ」とよんで置きたい。  
 「不得其死然」の「然」は「焉」と同じだといふので、「其死ヲ得ザラン」とよむ人もあり、又「其死ヲ得ズ、然リ」とよむ人もある。或は「其死然ヲ得ザラン」とよんでもよいかも知れぬ。前記は自己流のよみ方だ。

X X X X X

闕子嚮が行儀よく、子路が強よさうに、冉有と子貢とが楽しげに、御側に侍べつてゐる。孔子様も嬉しさうだ。しかし子路の此氣性では疊の上では死ぬまい、と常に心配して居られた。

「子樂」は「子曰」の誤寫だ、といふ説があるが、とんでもない。此二字が本章の眼目なのだ。私も及ばずながら弟子をもつたことがあるので、孔子様の氣持がよくわかる。孟子（盡心章上）の左の一段は、私の同感共

鳴する所だ。

『君子ニ三樂有リ。而シテ天下ニ王タルハ與リ存セズ。父母俱ニ存シ兄弟故無キハ、一ノ樂ミナリ。仰イ天ニ愧ヂズ俯シテ人ニ忤ヂザルハ、二ノ樂ミナリ。天下ノ英才ヲ得テコレヲ教育スルハ、三ノ樂ミナリ。君子ニ三樂有リ、而シテ天下ニ王タルハ與リ存セズ。』

心安立てに叱りもし又からかはれもしたが、孔子様は子路には特別の親愛をもたれたことが、ここでもわかる。最後の句は子路に對して注意された言葉だとの説もあるが、さうではあるまい。蔭ながら常に心配し、居られた、とする方が情がある。そして孔子様の御心配通り、子路は衛の國の内亂の際切り死をした。敵に一太刀切られて後ち、落ちかかつた冠の紐を結び直して死んだといふ。孔門の勇者らしい最期であつた。

二六六 魯人長府ヲ爲ル。闕子嚮イハク、舊貫ニ仍ラバコレヲ如何。何ゾ必ズシモ改メ作ラン。子ノタマハク、カノ人言ハズ、言ヘバ必ズ中ル有リ。

「府」は藏だが、財物を入れるのが、「府」で、武器を収めるのが「庫」だ。「長府」は藏の名。

X X X X X



魯の當局者が長府を新築しようとしたとき、関子雋が、『元のものを修復したらどんなものだらうか。何も新築するにも及ぶまい。』と言つた。孔子様がそれを傳へ聞いておつしやるやう、『あの男はメツタニ物を言はぬが、言ふと必ず圖星といふ所に當たるわう。』

関子雋の言葉は簡單だが、長府の新築は無益に民力を費すものだし、もしそれを擴張するのなら増税の準備と思はれる。いづれにしても宜しくない、といふ意味なので、孔子様が、わが意を得たり、とされたのである。

二六七

子ノタマハク、由ノ瑟シツ、ナンスレゾ丘キョウノ門ニ於テセント。門人子路ヲ敬セズ。  
子ノタマハク、由ヤ堂ニ升ノボレリ、未ダ室ニ入ラザルナリ。』

「瑟」は「琴瑟相和」の瑟。琴の十三絃に對して二十五絃である。朝鮮京城の李王家の樂部で、これが琴、これが瑟、といふ寶物を拜見して、面白く思つたことがある。

「堂」は表座敷、「室」は奥の間。安井息軒の説明に、『堂ハ賓客ニ接シ禮樂ヲ行フノ處、室ハ其奥ナリ、以テ道ノ源ニ喻フ。』とある。

「瑟」の上に「鼓」の字があつて、「由ノ瑟ヲ鼓スル」とよめる本もある。

X X X X X

子路は性質が剛強なので、そのひく瑟にもおのづから殺伐な音がある。そこで孔子様が、『由の瑟はわしの家には似合はしからぬ。』と言はれた。それを聞いて若い門人たちが子路を尊敬せぬ氣味だつたので、それをたしなめておつしやるやう、『由は表座敷へ通つたがまだ奥の間にはいらぬのぢや。お前たちはまだ表座敷へもあがつてゐないのだよ。』

二六八

子貢問フ、師ト商トハイヅレカ賢マサレル。子ノタマハク、師ヤ過ギタリ、商ヤ及バズ。イハク、然ラバスナハチ師愈マサレルカ。子ノタマハク、過ギタルハ猶ホ及バザルガゴトシ。

X X X X

子貢が『師（子張）と商（子夏）とどちらがまさつて居りませうか。』とおたづねしたところ、孔子様が『師ヤ過ギタリ、商ヤ及バズ。』と答へられたので、子貢は、及ばぬよりは過ぎる方がよ



からうかと思つて、『それでは師がまさつてゐるのでありますか。』と言つたら、孔子様がおつしやるやう、『過ギタルハ猶ホ及バザルガゴトシ。』

孔子様は常に中庸を最高なりとして、過不及ひとしく不可とされるのである。子張と子夏の人物については、古註にも、

『子張ハ才高ク意廣ク、而シテ好ンデイヤシクモ難キヲ爲ス。故ニ常ニ中ヲ過グ。子夏ハ篤信謹守、而シテ規模狹隘ナリ。故ニ常ニ及バズ。』

とあつて、好對照だつたらしい。論語中隨所に其性格の相違が見える。

本章の結語は現在でもしばしば用ひられることはさになつてゐる故、かういふのは原文のままにして置く。

二六九

季氏ハ周公ヨリモ富メリ。シカルニ求ヤコレガタメニ聚斂シテコレニ附益ス。子ノタマハク、ワガ徒ニアラザルナリ。小子鼓ヲ鳴ラシテコレヲ攻メテ可ナリ。

本章は最初から孔子様の言葉であること、「求ヤ」とあるのでわかる。「子曰」を中途にはさんだのは、重點の語氣を強めるための古文の一手段だといふ。

周公は魯の君の先祖だが、孔子様は實は「季氏ハ魯公ヨリ富メリ。」と言ひたい所を、それではあまり露骨になるので、「周公ヨリ」と言つて其意味をほのめかしたのである。なほ冉求を責める言葉が非常に強いのは、これを通して季氏を責める氣持であらう。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『大夫の季氏は殿様の御先祖の周公よりも富んでゐる。君の物を私し民の財を取るにあらずんばさやうに富むはずがない。しかるに冉求は季氏の宰（執事）となつて、主人を正しき道に導くことをせず、かへつて其意を迎へて租税の取立に骨折り、其富を増し加へてゐる。われわれの仲間でない。若者どもよ、責め鼓を鳴らして大に攻撃してやるが宜しい。』

伊藤仁齋曰く、

『孟子曰ク、政事無ケレバスナハチ財用足ラズト。ソレ國家ノ財用ヲ足ラス所以ノモノハ、亦民ノ爲メニスルノミ。冉有政事ヲ以テ稱セラシム（二五五）、ソノ季氏ノ爲メニ聚斂シテ附益セシ處置調度ハ、當ニ其方有ルベシ。未ダ必ズシモ後世ノ貪吏ノ如クナラジ。然レドモ季氏周公ヨリ富メルトキハ、スナハチ冉有クル者、宜シクコレガ爲メニ粟ヲ散ジ財ヲ施シ、其民ヲ救フヲ以テ急ト爲スベシ。シカルニ反ツテコレニ附益ス。コ



レ夫子ノ深クコレヲ責ムル所以ナリ。ソレ下ヲ損ジテ上ニ益スハ、マサニカノ上ヲ損スル所以ナリ。冉有ノ意ハモト季氏ノ爲メニスルニ在リテ、シカモ季氏ノ爲メニスル所以ヲ知ラズ、亦惜シムベカラザランヤ。』

二七〇 柴サイヤ愚、參センヤ魯、師ヘキヤ辟、由カンヤ嗇。

本章にも「子曰」を冠していないが、「何ヤ」とあるので「子曰」であることがわかる。柴も門人、姓は高、字は子羔。

X X X X

孔子様が四人の門人を評しておつしやるやう、『柴は馬鹿正直で融通がきかぬ。參は遅鈍で吞込がよくない。師はかたよつて脱線的ぢや。由は粗暴で行儀がわるい。』

これは孔子様が門人たちの心安立てに、四人の短所をつかまへて悪口を言はれたのだが、「過チヲ觀テココニ仁ヲ知ル」(七三)の含みもあつて面白。

二七一

子ノタマハク、回カクヤソレ庶チカカラシカ、シバシバ空シ。賜ハ命ヲ受ケズシテ貨殖ス。億ヒカレバスナハチシバシバ中アタル。

X X X X

孔子様が顔淵と子貢とを比較しておつしやるやう、『回は理想に近からうか。米櫃がしばしばからになつても、天命に安んじ道を楽しんでゐる。賜は天命に甘んぜず自ら活動して財産を作る。しかし考へが道理にかなふから、不義の富にならぬ。』

孔子様は結論を出して居られぬが、顔回は仁者に近く、子貢は知者なり、故に回まされり、といふことなるのであらう。春秋左氏傳によれば、孔子様が『賜ヤ不幸ナリ。言ヘバ中ル。コレ賜ヲシテ多言ナラシム。』と言はれたとのことだ。

伊藤仁齋曰く、

『人ノ貧富ニ於ケルハ、義有ルノミ。イヤシクモ義ニ合スレバ、スナハチ以テ富ムベク、以テ貧シカルベシ。然レドモ亦命有リ。貧富ノ表ニ超ユル者ニアラザレバ、スナハチ泰然トシテ自ラ安ンズルコト能ハズ。』



ソレコレヲ致スコト無クシテ至ルモノハ命ナリ。イヤシクモ致ス所有リテ至ルモノハ、義ト雖モシカモ命ニアラザルナリ。子貢ノ貨殖ノゴトキハ、モトヨリ世ノ財ヲ豊カニスル者ノ比ニアラズ。然レドモ致ス所有リテ至ルコトヲ免レズ。故ニコレヲ命ヲ受ケズト謂フベク、而シテ義無シト謂フベカラザルナリ。コレ子貢ノ顔子ニ及バザル所以ナリ。』

二七二 子張善人ノ道ヲ問フ。子ノタマハク、迹ヲ踐マズ、亦室ニ入ラズ。

ここに「善人」とは「質美ニシテ未ダ學バザル者」である。』

X X X X X

子張が、『先生は性善説をとられますが、生れついでに善人で悪事をしないならば、學ばなくてもよささうなものではござりませんか。』といふ意味の質問をしたところ、孔子様がおつしやるやう、『せつかくの善人でも學問がないと、古聖賢の積み置かれた貴い遺産たる禮樂文物の御蔭をかふむり得ず、従つてまた聖人の道の奥座敷に入ることができぬ。惜しい事ではないか。』

「迹ヲ踐マズ」を、古聖賢の跡に従はなくても自然に善道に合し悪事を爲さぬ、の意に解するのが通説だが、それでは意味が通らず、次との續きがわるいやうな氣がする故、自己流に右の如く解した。

二七三 子ノタマハク、論ノ篤キニコレ與ミセバ、君子者カ、色莊者カ。

「色莊者」は後章にいはゆる「色厲クシテ内荏」なる者（四四三）であつて、見かけは威儀堂々として中味の柔弱卑怯な者をいふ。

X X X X

孔子様がおつしやるやう、『言論のもつともらしさだけを受け込むと、君子人であるかも知れず、色のみ莊んな偽君子にぶつかるかも知れぬ。』

二七四 子路問フ。聞クガママニココニコレヲ行ハンカ。子ノタマハク、父兄在ス有リ、コレヲ如何ゾソレ聞クガママニココニコレヲ行ハンヤ。冉有問フ、聞クガママニココニコレヲ行ハンカ。子ノタマハク、聞クガママニココニコレヲ行ヘ。公



西華イハク、由ヤ問フ、聞クガママニココニコレヲ行ハンカト、子ノタマハク、父兄在ス有リト、求ヤ問フ、聞クガママニココニコレヲ行ハンカト、子ノタマハク、聞クガママニココニコレヲ行ヘト。赤ヤ惑フ。敢テ問フ。子ノタマハク、求ヤ退ク、故ニコレヲ進ム。由ヤ人ヲ兼ヌ、故ニコレヲ退ク。

X X X X X

子路が、「善い事を聞いたら聞いたままにすぐさま行ひませうか。」とおたづねしたら、孔子様が「父兄も居られることだから、其意向も尊重せねばならず、どうして聞いたままにすぐさま行つてよからうぞ。」と答へられた。別の時に冉有が、「聞いたままにすぐさま行ひませうか。」とおたづねしたら、孔子様が、「聞いたままにすぐさま行へ。」と答へられた。両方の場合ともに側に居合はせられた公西華がふしぎに思つて、「由が「聞クガママニココニコレヲ行ハンカ。」とおたづねしたときは、先生は、「父兄在ス有リ。」と答へられ、又求が「聞クガママニココニコレヲ行ハンカ。」とおたづねしたときには、先生は「聞クガママニココニコレヲ行へ。」と答へられましたが、どういふわけか、赤は甚だ迷ひますので、推しておたづね致します。」と質問した。孔子様がおつしやるやう、「求は引込み思案だから推進し、由は人の分まで買つて出る男だから牽制したまでのことだ。」

「はゆる」「人によつて法を説く」孔子流である。

二七五

子匡ニ畏ル。顔淵後レタリ。子ノタマハク、ワレナンヂヲ以テ死セリト爲セリ。イハク、子在ス、回何ゾ敢テ死セン。

X X X X

孔子様が匡で御難のとき(二一〇)、顔淵が一行からおくれて行方不明になつたので、心配して居られたら、やがて追いついた。孔子様がおつしやるやう、「わしはお前が死んだかと思つたよ。」顔淵が申すやう、「先生がおいでになります。顔回何とて軽々しく死にませうや。」

師は死生を天にまかせ、弟は死生を師にまかす。肝膽相照らし、死生相許し、勇あり、情あり、最も平和温良なる孔夫子と顔回とが、一旦緩急あればあだかも日本古武士主従の如し。吉野落の義経と忠信といふやうな芝居的一幕ぐらゐになりさうだ。



二七六 季子然問フ、仲由・冉求ハ大臣ト謂フベキカ。子ノタマハク、ワレ子ヲ以テ異ナルヲコレ問フト爲ス、スナハチ由ト求トヲコレ問フカ。イハユル大臣トハ、道ヲ以テ君ニ事ヘ、不可ナレバスナハチ止ム。今由ト求トハ具臣ト謂フベシ。イハク、然ラバスナハチコレニ從ハン者カ。子ノタマハク、父ト君トヲ弑センニハ亦從ハザルナリ。

X X X X X

季氏一門の季子然が仲由（子路）と冉求とが季氏の家臣になつてゐるのを誇りとして、『仲由や冉求は「大臣」と申すべきでせうか。』と問うた。孔子様は季氏が陪臣の分際で其けらいを大臣などといふのさへけしからんことと思はれるし、かねがね季氏が不臣の非望をいだいてゐることをにらんで居られたので、ここでひとつその僭越の鼻柱をくづいて置かうと思はれたか、『私はあなたが誰か異常非凡な人物の事をお問ひになるかと思ひましたに、あの由や求の事をおたづねでありませうか。「大臣」と申すのは、正しき道を以て主君を輔佐し、諫を聽かれなければ身退くべきものがあります、由や求にはそれだけの事ができさうありません故、「大臣」どころではありません。まづ「具臣」すなはち御役に立つごけらいとでも申すべきであります。』と皮肉な返事をされた。

ところが季子然はおぼつちやんで、其意味がわからなかつたものと見え、御役に立つとだけ聞いて、『それでは何でも主人の言ひ附けをさく者ですか。』といふ愚問を發した。すると孔子様が痛烈に答へられるやう、『かれらも大義名分は教へられて居りますから、小事はともかく、父や君を弑する如き大逆にはまさか盲從致しますまい。』

孔子様は單に「溫良恭儉讓」（一〇）だけではなくて、時にはかやうな巨砲を放たれたことを知つて置きた

二七七 子路、子羔ヲシテ費ノ宰タラシム。子ノタマハク、カノ人ノ子ヲ賊ハン。子路イハク、民人有リ、社稷有リ、何ゾ必ズシモ書ヲ讀ミテ然ル後ニ學ト爲サン。子ノタマハク、コノ故ニカノ佞者ヲ惡ム。

X X X X X

「社」は土地の神「稷」は穀物の神、そこで「社稷」といへば國家の事になる。



子路が季氏の執事だったとき、おとと弟子の子羔を季氏の私領の費の代官に推舉しようとした。そこで孔子が、『勉強ざかりのあの若者を害することにならうぞよ。』と注意された。ところが子路が、『治むべき人民もあり、祭るべき社稷の神もある。それを教科書にして實地の政治をするのも學問であります。何も書物を読むだけが學問ではござりませぬ。』と言つたので、孔子様がおつしやるやう、『これだからわしは口巧者なやつがさらひぢや。』

書物を読むだけが學問ではない、といふことは、孔子様自身が常に言はれる所なのに、子路がそれを言つてなぜ叱られたのだらうか。元來費は、住民の氣が荒い有名な難治の所であり、子羔は前に「柴ヤ愚」(二七〇)とあつたやうな馬鹿正直者で、若輩でもあり學問修養も未熟なのだから、さういふヤツカイな土地を受持たせては、本人の爲にもならず、人民の爲にも宜しくない、と心配されたのである。子路は全く子羔を引立ててやらうといふだけの氣持で、そこまでは氣が附かなかつたのだから、なるほどさうでござりましたと言へばよいのに、負けおしみの強辯をしたものだから、えらく叱られたのである。

二七八

子路・曾哲・冉有・公西華侍坐ス。子ノタマハク、ワガ一日ナンヂヨリ長セルヲ以テワレヲ以テスルコトナカレ。居レバスナハチイハク、ワレヲ知ラズト。モシ或

ハナンヂヲ知ラバ、スナハチ何ヲ以テセンヤ。子路卒爾トシテ對ヘテイハク、千乗ノ國、大國ノ間ニ攝マリ、コレニ加フルニ師旅ヲ以テシ、コレニ因ヌルニ饑饉ヲ以テス。由ヤコレヲ爲メバ、三年ニ及ブコロホヒ、勇有リテ且方ヲ知ラシメント。夫子コレヲ晒フ。求ヨ、ナンヂハ何如。對ヘテイハク、方六七十、モシクハ五六十、求ヤコレヲ爲メバ、三年ニ及ブコロホヒ、民ヲシテ足ラシムベシ。其禮樂ノ如キハ、以テ君子ヲ俟タント。赤ヨ、ナンヂハ何如。對ヘテイハク、コレヲ能クスト曰フニアラズ、願ハクハコレヲ學バン。宗廟ノ事モシクハ會同ニ、端章甫シテ願ハクハ小相ト爲ラント。點ヨ、ナンヂハ何如。瑟ヲ鼓スルコト希ナリ。鏗爾トシテ瑟ヲ舍キテ作チ、對ヘテイハク、三子者ノ撰ニ異ナリ。子ノタマハク、何ゾ傷マンヤ、亦各其志ヲ言フナリ。イハク、莫春ノコロ、春服既ニ成ル、冠者五六人、童子六七人、沂ニ浴シ、舞雩ニ風シ、詠シテ歸ラント。夫子喟然トシテ歎シテノタマハク、ワレハ點ニ與ミセント。三子者出ツ。曾哲後ル。曾哲イハク、カノ三子者ノ言ハ何如。子ノタマハク、亦各其志ヲ言フノミ。イハク、夫子何ゾ由ヲ晒フヤ。ノタマハク、國ヲ爲ムルニハ禮ヲ以テス。其言讓ラズ。コノ故ニコレヲ晒ヘリト。タダ求ハスナハチ邦ニアラザルカ



ト。イヅクンゾ方六七十モシクハ五六十二シテ邦ニアラザルモノヲ見ント。タ  
グ赤ハスナハチ邦ニアラザルカト。宗廟會同ハ諸侯ニアラズシテ何ゾ。赤ヤコ  
レガ小タラバ、タレカ能クコレガ大タラン。

これは論語中の一番長い一章だが、實に名文で、師弟の打ち解けた談笑が活き活きと描かれてゐる。ウシロ  
に琴の音をあしらつた所など、編者も中々の演出家だ。

四人の門人の年齢は、孔子より若きこと、子路は九歳、曾哲は十二三歳らしく、冉有は二十九歳、公西華は  
四十二歳。曾哲は曾參の父、名は點。

「師」は二千五百人、「旅」は五百人の軍隊だが、ここで「師旅」とは戦争兵亂のこと。」

「穀ノ熟セザルヲ饑ト曰ヒ、蔬ノ熟セザルヲ饑ト曰フ。」とある。

「端」は「玄端」として黒色の角張つた禮服、「章甫」は禮冠。

「莫」は「暮」と同じ。

「冠者」は元服した者、年齢十八九ぐらゐる青年。「童子」はまだ元服せぬ十五六歳までの少年。」

「舞雩」は天を祭り雨乞をする築山。

X X X X X

子路・曾哲・冉有・公西華の四人が御側にはべつてゐたとき、孔子様が、『わしがお前たちより  
多少年上だからとて、わしに遠慮せず物言つてくれ。お前たちは平生、私を知つて用ひてくれ  
ないから仕事ができないなどと不平を言ふが、もしお前たちを知つて用ひてくれる人があつたら  
お前たちはどういふ事業ができるつもりか、めいめいの抱負を言つて見たらどうぢや。』と四人に  
問ひかけられた。すると子路がイキナリ口を開いて無遠慮に、『魯・衛・鄭の如き兵車千乗程度の  
諸侯の國が、齊・晉・楚の如き萬乗にも近い大國の間にはさまり、それだけでも形勢困難な所へ戦  
争が始まり、おまけに饑饉で食糧難が重なりといふやうな國歩艱難な場合に、由が其難局に當つて  
其國政を執りましたならば、三年たつかたために、其人民の勇氣を回復させ、且國民の義務をわか  
まへ君國のために身命をなげうつやうにさせて御覽に入れます。』と言つた。例の子路らしい大  
言壯語なので、孔子様も思はず破顔一笑された。そして次には曾哲に問はれるのが順なのだが、ち  
ようど二十五絃琴をひいてゐたのであと廻しにし、冉有に向つて『求よ、お前はどうかぢや。』とた  
づねられた。冉有は子路がえらさうな口をきいて先生の御笑を受けたのを眼前に見てゐる故、大に  
用心謙遜して、『千乗の國などは及びもつかぬことではありますが、六七十里四方或は四五十里四



方ぐらゐの小國でありますならば、求がこれを治めて殖産興業に力をそそぎ、三年ほどのうちに人民の衣食を足らしめて生活を安定させることはできさうに存じます。しかし禮樂を以て民心を感化するといふやうな所に至りましては、私のがらにないことでありますから、盛徳の君子に御願ひ致さねばなりません。』と申し上げた。そこで孔子様が今度は公西華に向つて、『赤よ、お前はどうかや。』とおつしやつた。公西華は元來禮樂を志してゐたのだが、今再求が禮樂は君子に待つと言つたばかりの所だから、私は禮樂の方を致しますとイキナリ言つては、自ら君子を以て任するやうに聞えて具合がわるい故、さらに大にへりくだつて、『私にできると申すのではござりませんが、勉強かたがた致して見たいと存じますのは、國君の御先祖廟の御祭又は諸侯の國際的會合といふやうな場合に、衣冠束帶で式部次長ぐらゐの所を勤めさせていただくこととござります。』と言つた。そこで最後に曾哲に向つて、『點よ、お前はどうかやな。』と問はれた。曾哲は其時右の問答を聞きながら二十五絃琴をジャマにならぬ程度にボンボンとひいてゐたが、カチャンと音をさせて琴を置き起立して、『私のは三君の抱負とはおよそ種類ちがひでござりますから。』と遠慮したところ、『めいめいに思つた事を言ふだけだから、何のさしつかえがあらうや。』と孔子様がおつしやるので、『それでは申し上げますが、晩春の寒むからず暑からぬ好季節に、仕立おろしの春着をき、五人の若い者や六七人の少年たちをつれて、沂水のほとりの温泉に入浴し、舞雩の雨乞臺でひとす

すみして、鼻歌でもうたひながらブラブラ歸つて來たうござります。』と言つた。すると孔子様がああと歎息されて、『わしも點の仲間入がしたいものぢや。』とおつしやつた。さてほかの三人は引ささがつて曾哲だけが残つたところで、曾哲が『あの三人の申したことをどう思召しますか。』とおたづねしたので、孔子様がおつしやるやう、『めいめいの平生の志を言つた次第で、いづれも適切なことと思ふ。』『それでは先生はなぜ由をお笑ひになつたのでありますか。』『國を治めるには禮が根本なのに、由の言葉には少しも禮讓の氣味がないので、矛盾を感じてつひ笑つたのだよ。』『それでは求のは國を治めるといふ抱負ではなかつたのでござりますか。』『六七十里四方又は五六十里四方でも、もちろん國に相違ない。求なら由と同じく千乗の國でも治め得るのだが、謙遜して小國の物質方面だけと言つた所が神妙ぢや。』『しかし赤のは國政ではござりますまい。』『イヤイヤ宗廟や會同は諸侯の重大事で、りつばな國政だが、赤ならば十分につと得める。赤が式部次長と謙遜したら、誰が式部長官をつとめ得ようぞ。』

曾哲の悠遊自適主義に對して孔子様が「與ミセン」と言はれたことにつき、いろいろ深遠らしい議論をする人もあり、或は「ユルサン」とよんで「勝手にせよ」と言はれたのだとする人もあるが、私はかう考へたい。

孔子様は元來由や求や赤と同じ志をもつて居られたのである。時利あらずして其志成らず、天下後世から見れ



ば誠に仕合せな事だつたが、孔子様としては謂はばやむを得ず教育と著述とに隠れざるを得ないことになられたのである。そこで今弟子たちが天下國家の志に燃えてゐるのを見て、頼もしくもうらやましくも思はれ、自身がつひに曾皙に與みせざるを得ざるに至つたことを、「喟然トシテ」歎息されたのである。

子路と冉有とが政治家として、又公西華が外交官として適任であることは、既に孔子様が許して居られる所である（九九・一二五）。

## 顔淵第十二

此篇には多く孔子様と門人及び國君、大夫との問答を載せてゐる。

二七九 顔淵仁ヲ問フ。子ノタマハク、己ニ<sup>オウレ</sup>克チテ禮ニ復ル<sup>カク</sup>ヲ仁ト爲ス。一日己ニ克チテ禮ニ復レバ天下仁ニ歸ス。仁ヲ爲スハ己ニ由ル、人ニ由ランヤ。顔淵イハク、請フ其目<sup>モク</sup>ヲ問ハシ。子ノタマハク、非禮視ルナカレ、非禮聽クナカレ、非禮言フナカレ、非禮動クナカレ。顔淵イハク、回不敏ト雖モ、請フ斯ノ語ヲ事トセシ。

本章は「克己復禮之章」として、論語中でも特に有名な本文である。「克己復禮」は古語らしき。「禮ニアラズンバ視ルコトナカレ」とよむ人もあるが、格言としては言葉の短い方がよい。

× × × × ×



顔淵が仁とは何かをおたづねしたのに対し、孔子様が「おのれの私に打ち勝つて先王の定め置かれた禮の大法則に立ち歸るのがすなはち仁である。一旦「己ニ克テ禮ニ復ル」ことができれば、天下が其仁徳に歸服するであらう。而して仁を爲すか爲さぬかは、克己復禮をするかせぬかの自分次第のことぢや。他人事であらうや。」とおつしやつた。そこで顔淵がさらに進んで、「どうぞ其細目をうかがはせてくださりませ。」とお願ひしたので、孔子様が「禮にかなはぬことを視るな。禮にかなはぬことを聽くな。禮にかなはぬことを言ふな。禮にかなはぬことで動くな。」と教へられた。顔淵が感激して申すやう、「回はおろか者ではござりますが、どうか此御言葉を一身一生の仕事に致します。」

「ナカレ」は「勿」の字が書いてあるので、これを「四勿」の教といふ。又「視ざる聽かざる言はざる」のはゆる「三猿」も、ここから出たのかも知れない。

二八〇

仲弓仁ヲ問フ。子ノタマハク、門ヲ出デテハ大賓ヲ見ルガ如クシ、民ヲ使ヒテハ大祭ヲ承クルガ如クス。己ノ欲セザル所人ニ施スナカレ。邦ニ在リテモ怨ミ無ク、家ニ在リテモ怨ミ無ケン。仲弓イハク、雍不敏ト雖モ、請フ、斯ノ語ヲ

事トセン。

×

×

×

×

仲弓（冉雍）が仁とは何かをおたづねしたのに対して孔子様が、「ひとたび門を出て世間に立ちまじらば、接する人のすべてが大事の御客様であるかの如く心得よ。人民を使ふには軽々しくせず、大祭を執行してゐる如き氣持であれ。仁とは結局「恕」すなはち「おもひやり」であるから、自分がしむけられたくないと思ふやうな事を他人にしむけるな。さうすれば國內國際に於ても怨恨がなく、家庭内に於ても不平があるまい。」とおつしやつた。仲弓が感激して申すやう、「私はおろか者ではござりますが、どうか此御言葉を一身一生の仕事に致します。」

「門ヲ出デテハ大賓ヲ見ルガ如クス」は、わが國の「男は敷居をまたげば七人のかたきがある。」とか「人を見たら泥棒と思へ。」などは天地雲泥の相違だ。又わが國の今までの官僚が「大祭ヲ承クルガ如クス」の格言を知らなかつたのが返す返すも残念だ。「怨ミ無シ」を、自身に後悔がない、の意に解する人もあるが、前記の方が續きがよさうだ。

「己ノ欲セザル所人ニ施スナカレ」がすなはち「恕」だといふことは、後にも出て來る（三九九）。きはめて平



凡でははめて適切な千古の金言だが、私は同時に「己ノ欲スル所人ニ施スナカレ」をも考へてもらひたいと思ふ。すなはち自分がすきだからといつて人に押賣するのも慎むべきことであつて、結局は「相手の身になつて見る」といふことが、仁の一端なのだ。支那事變の始まる前だが、日支關係が相當險惡になつてゐたころ、わが國實業團の一行が中華民國を訪問したことがある。其時蔣介石が一行を招待して歓迎の盛宴を催したが、卓上演説中に、

『自分は若い時貴國の御世話になり、殊に故瀛澤榮一子爵の御愛顧をかふむつたが、子爵は御承知の通り論語によつて貴國の實業界を指導された方なので、私も其感化で論語を愛讀するに至り、今でも座右を放しません。其論語中私の最も愛誦する金言は「己ノ欲セザル所人ニ施スナカレ」の一句であります。』

と述べたのは、日本側一本頂戴した形で、一言もなかつたといふ。實際わが國は、滿洲なり中華民國なり或は其他のいはゆる大東亞諸國に對して「己ノ施セザル所人ニ施シ」はしなかつたかといふことを、深く反省せねばならぬ。考へ方によつては、それは必ずしもわが方としては悪意ではなく、むしろ親切のつもりで「己ノ欲スル所人ニ施シ」たところ、それが相手方にとつては甚しい「有難迷惑」になり、「怨有り」になつたのだとも言へよう。例へばジャヴァやフィリッピンに日本語を押賣してそのすみやかな普及をほこつてゐたところ、其地の住民にとつて最後に役に立つた日本語は、敗退引上げの日本軍民に對する「バカヤロウ、ザマヲミロ」の罵聲だつたといふ。まことに皮肉な且遺憾な事であつて、日本としてはもはやこれでこりこりして、過ちを再びせぬことを誓ふ次第だが、これは日本だけのことではなく、個人間の又國際間の自由主義的通義たるべき

だと思ふ。米國が日本に對するしむけについても、「己ノ欲セザル所人ニ施サザル」はかたく信じて安心してゐるが、「己ノ欲スル所人ニ施ス」については、十分に日本の歴史と現状、そして日本人の氣持を考慮してほししいと思ふ。

二八一

司馬牛仁ヲ問フ。子ノタマハク、仁者ハツノ言フヤ<sup>カタン</sup> 認ズ。イハク、ソノ言フヤ 認ズ、ココニコレヲ仁ト謂フカ。子ノタマハク、コレヲ爲スコト難シ、コレヲ言フコト認ズル無キヲ得ンヤ。

門人司馬牛、名は犁又は耕。

「認」は「ジン」、「カタンズ」又は「シンブ」とよむ。

「斯」の下に「可」がはいつて、「斯ニコレヲ仁ト謂フベキカ」とよませる本もある。次章も同じ。

X X X X

司馬牛が仁とは何かをおたづねしたら、孔子様が「仁者は言葉が出にくい者じや。」とおつしやつた。それで司馬牛が不思議に思つて、『言葉の出にくいだけで仁といへるのでござりますか。』と



押返した。孔子様がおつしやるやう、『實行がむつかしいことを知つてゐるから、言葉も出にくくならうじゃないか。』

古註に曰く、

『牛ノ人ト爲リ、多言ニシテ躁ナリ。モシコレニ告グルニ其病ノ切ナル所ヲ以テセズンテ、アマネク仁ヲ爲スノ大概ヲ以テコレニ語グレバ、スナハチカレノ躁ヲ以テシテ必ズ深ク思ヒテ以テ其病ヲ去ルコト能ハズ、而シテツヒニヨリテ以テ德ニ入ルコト無カラン。故ニソノコレニ告グルコトカクノ如シ。』

二八二

司馬牛君子ヲ問フ。子ノタマハク、君子ハ憂ヘズ懼レズ。イハク、憂ヘズ懼レズ、ココニコレヲ君子ト謂フカ。子ノタマハク、内ニ省リミテ疚シカラズ、ツレ何ヲカ憂ヘ何ヲカ懼レン。

X X X X

司馬牛が君子とは何かをおたづねしたら、孔子様が『君子は心配せず又こはがらぬものぞ。』とおつしやつたので、司馬牛が物足らず思つて、『心配せずこはがらぬだけで君子といへるのでござりませうか。』と再び質問した。すると孔子様がおつしやるやう、『内心に自ら問うて見てうしろぐら』

『ことがないならば、何を心配し何をこはがらうぞ。』

司馬牛はおしやべりでさはないと古註にあるが、他方心中に大きななやみをもつてゐた。かれは宋の人だが、其兄がかの孔子様を害さうとした司馬桓魋かんたいていであり(一六九)、其弟二人も悪人で、宋國に亂を起さうとしてゐるため、司馬牛は常に憂へ懼れてゐる。そこで孔子様が、『兄弟はどうあらうとも、お前自身何等やまし』  
『所がな』ならば、何も憂へ懼れることはなし、君子たるの自信を失ふな。』と慰安激勵されたのである。(一一三三)

二八三

司馬牛憂ヘテイハク、人皆兄弟有リ、ワレ獨リ亡シト。子夏イハク、商コレヲ聞ケリ、死生命有リ富貴天ニ在リト。君子敬シテ失フコト無ク、人ト恭シクシテ禮有レバ、四海ノ内皆兄弟ナリ。君子何ゾ兄弟無キヲ患ヘンヤ。

X X X X

司馬牛が『人は皆兄弟よくしてゐるのに、私ひとり兄弟有れども無きにひとしく、さびしい



ことじや。』とぐちをこぼした。同窓の子夏が慰めて言ふやう、『私は先生から「死生命有リ富貴天ニ在リ」とうかがつたことがある。君の兄弟運のわるいのも、これ亦天命で致し方ないではないか。君子たる者人を敬つて永續がし、丁寧懇切で禮儀があれば、「よものうみみはらから」ぢや。君子たる者、兄弟無しとなげくに及ばうや。』

孔子様を害せんとまでした悪人の弟を、親切に指導慰安する、さすがは孔門であり、もつべきものは師友である。

春秋左氏傳には十七文字の俳句があり、論語には三十一文字の和歌がある、と江戸の漢學書生はたはむれたものだ。春秋の俳句とは

夏五月鄆伯段に郟に克つ

又論語の和歌とは

司馬牛が憂へていはく人は皆兄弟あるにわれひとりなし

二八四

子張明ヲ問フ。子ノタマハク、浸潤ノ譖、膚受ノ愬、行ハレザルハ明ト謂フベキノミ。浸潤ノ譖、膚受ノ愬、行ハレザルハ遠ト謂フベキノミ。

「明」は聰明の明、目のよく見えることから轉じて、智の明かなるをいふ。而して其智が遠くまでとどくのを「遠」といふ。

「浸潤」は水が紙などをだんだんにしめしうるほして行くこと。「譖」は誹謗讒言。直接露骨な悪口はかへつて受け付けられぬが、ジリジリと遠廻しにする告げ口は人を動かしやすい。

「膚受」は皮膚に直接受けるの意。肩に火が附くとか、身を切られるとかいふやうな、眼前の危急。「愬」は元來無實の罪なる旨を陳情することだが、ここではひろく哀訴歎願。

X

X

X

X

子張が、『明とはどういふことでありますか。』と質問した。孔子様がおつしやるやう、『水のしみこむやうなシリにも火のつくやうなウツタへにもたやすく動かされぬに至つてこそ、明といふべきぢや、遠といふべきぢや。』

安井息軒は、

『明ハ智ヲ以テ言ヒ、遠ハ慮ヲ以テ言フ。智ハ目ニ在リ。故ニ明ト曰フ。慮ハ後日ニ及ブ、故ニ遠ト曰フ。』



と説明したが、それほど區別するにも及ばまい。結局は心が明かで見通しがきくといふことなのだが、それをくりかへして言つたのは、子張が元來志高くして事に綿密ならず、何でも持ちかけられたものを呑み込む缺點があるので、ねんごろにいましめられたのである。

二八五

子貢<sup>ツリゴト</sup>政ヲ問フ。子ノタマハク、食ヲ足シ、兵ヲ足シ、民コレヲ信ニス。子貢イハク、必ズヤムコトヲ得ズシテ去ラバ、コノ三者ニ於テ何ヲカ先ニセン。ノタマハク、兵ヲ去ラン。子貢イハク、必ズヤムコトヲ得ズシテ去ラバ、コノ二者ニ於テ何ヲカ先ニセン。ノタマハク、食ヲ去ラン。古ヨリ<sup>イニシハ</sup>皆死有リ。民信無クンバ立タズ。

X . X . X . X

子貢が政治の要領をおたづねしたら、孔子様が、「食をゆたかにし、兵を強くし、民を信ならしめることじや。すなはち政治の要領は食糧問題と國防問題と道義問題である、と言はれた。すると子貢が『なるほど食と兵と信と、この三拍子そろへば申分ありますまいが、國家の現状どうしてもやむを得ずして此三者中の一つをやめにせねばならぬといふことになりましたら、何から先にや

めにすべきでござりませうか。』とおたづねした。すると孔子様は『兵ヲ去ラン』(軍備はおやめた)と答へられた。そこで子貢が重ねて、『さらに又どうしてもやむを得ずして残りの二つすなはち食と信とどちらかを断念せねばならぬことになりましたら、どちらをやめにすべきでありますか。』と質問すると、孔子様がおつしやるやう、『もちろん食をやめにする。食がなければ人は死ぬが、昔から今まで、おそかれはやかれ人は皆死ぬのぢや。人に信がなくなつたら、國家人生の根本が立たぬぞよ。』

これは今日のが國に恐ろしいほど適切だ。「兵ヲ去ラン」は、新憲法にはゆる「戦争の抛棄」で、これは「ヤムコトヲ得ズシテ」であつたかも知れぬが、結局は人類の通義として列強がわれにはんことを切望し期待する次第である。ところで食と信との二つにつき『何ヲカ先ニセン』ともし子貢がたづねたならば、われわれは異口同音に、『信ヲ去ラン。古ヨリ皆信無シ。民食無クンバ立タズ。』と答へはしないだらうか。残念だ。恥しいことだ。

二八六

棘子成<sup>キキセイ</sup>イハク、君子ハ質ノミ、何ゾ文ヲ以テ爲サン。子貢イハク、惜イカナ夫  
子ノ君子ヲ説クヤ。駟<sup>シ</sup>モ舌ニ及バズ。文ハ猶ホ質ノゴトク、質ハ猶ホ文ノゴト



シ、虎豹ノ鞞クワッハ猶ホ犬羊ノ鞞ノ如シ。

X X X X X

衛の大夫の棘子成が、「君子たる者は實質が大事ぢや、形式などはどうでも宜しい。」と言つた。子貢が申すやう、「大夫殿の君子論は甚だ遺憾に存じます。「駟モ舌ニ及バズ。」と申しまして、大夫殿のやうな方が一旦口から出されると、四頭立てで追つかけても取りもどしができません。文と質とは別物ではなく、文が質であり、質が文であります。大夫殿は質だけで文はなくとも君子小人の見わけはつくやうに言はれましたが、虎や豹の皮でも毛を抜いてしまつたなめし革では、犬や羊の皮と見わけが附かぬではござりませんか。」

参照——一三五。

二八七

哀公有若ニ問ヒテイハク、年饑ウツエテ用足ラズ、コレヲイカンセン。有若對ヘテイハク、ナンゾ徹セザル。イハク、ニモワレ猶ホ足ラズ、コレヲイカンゾソレ徹センヤ。對ヘテイハク、百姓ヒヤクセイ足ラバ、君タレトトモニカ足ラザラン。百姓足

ラズンバ、君タレトトモニカ足ラン。

X X X X

魯の哀公が有若に、「飢饉で國の財用が不足だが、どうしたらよからうか。」とたづねた。すると有若が、「なぜ十分一税にならぬのですか。」と言つたので、哀公が驚いて、「既に十分二税を取つてそれでも足りないで困つてゐる始末なのに、どうして十分一税にできようか。」と言つた。そこで有若が答へて申すやう、「君民は一體でありまして、民が富めば君も富み民が貧しければ君も貧しいのであります。もし人民が「足りた」といふことになつたら、殿様は誰と共に「足りた」とおっしゃれるのですか。もし人民が「足らぬ」といふことになつたら、殿様は誰と共に「足りた」とおっしゃれるのですか。そもそも凶作と財政不足の根本対策は、減税によつて民力を休養させることに外ならぬと存じます。」

有若は風采が孔子様をつくりだつたといはれるのだが、此議論も亦孔子様をつくりの金言であつて、今日では實際上申々かうは行かぬけれども、政治の根本原理は結局そこになくはならぬと思ふ。哀公が此献策をいれたかどうかは記録されてゐないが、もしそこで減税でもしてゐたら、それこそ「仁徳」とでもたたへらるべ



きはすで、「哀公」などといふ情ない「おくり名」はもらはなかつたらうと思ふ。

二八八 子張徳ヲ崇クシ惑ヲ辨ゼンコトヲ問フ。子ノタマハク、忠信ヲ主トシ義ニ徙ルハ、徳ヲ崇クスルナリ。コレヲ愛シテハ其生ヲ欲シ、コレヲ惡ミテハ其死ヲ欲ス。既ニ其生ヲ欲シ又其死ヲ欲スルハ、コレ惑ナリ。

此次に「誠不以富。亦祇以異。」の二句があるが、これは後に入るべきものが間違つてここにはいつたのだから、ここでは削り、其場所(四二九)に出す。

X

X

X

X

子張が、徳を高くし惑を解くにはどうしたら宜しいでせうか、とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「心の誠を盡して虚偽なき忠と信とを旨とし、萬事の不合理を去つて道理の存する所に移るのが、徳を高くする所以である。これを愛すれば生きんことを欲し、これを憎めば死なんことを欲するのが凡人の情だが、生死は人力の如何ともすることのできない天命であるのに、生きればよいの死ねばよいのと、同一人についてさへ愛憎によつて考がかはるやうな惑ひは、よく辨別せねば

ならぬ。

二八九

齊ノ景公政ヲ孔子ニ問フ。孔子對ヘテイハク、君君タリ、臣臣タリ、父父タリ、子子タリ。公イハク、善イカナ。信ニモシ君君タラズ臣臣タラズ父父タラズ子子タラズンバ、粟有リト雖モワレアニ得テコレヲ食ハンヤ。

X

X

X

X

齊の景公が孔子に政治を問うた。孔子がこれに對して、「政治とは、君が君らしく、臣が臣らしく、父が父らしく、子が子らしくあることとござります。」と答へた。景公が感服して言はるやう、「善い言葉ぢやのう。なるほど、君君ならず、臣臣ならず、父父ならず、子子ならずであつたならば、國に穀物がゆたかでも、落つてたべることができやうや。」

左の古註によつて其間の事情がわかる。

「コレ人道ノ大經、政治ノ根本ナリ。コノ時景公政ヲ失ヒ、而シテ陳氏(大夫)厚ク國ニ施ス。景公又内嬖(寵愛の婦人)多クシテ、太子ヲ立テズ、其君臣父子ノ間、皆其ノ道ヲ失フ。故ニ夫子コレニ告グルニコレ



ヲ以テス。景公孔子ノ言ヲ善シトシ、而シテ用フル能ハズ。其後果シテ繼嗣定マラザルヲ以テ、陳子君ヲ殺シ國ヲ篡フノ禍ヲ啓ク。」

すなはち孔子様の景公に對する答には、特別の寓意があるのだが、話が遠廻したものだから景公はわが事と思はず、抽象的に「善イカナ」と賛成しただけになつてしまつたのだらう。前に出た「異與ノ言ハ能ク説フコト無カラシヤ」(二二八)の好適例である。そして景公は「説ンデ釋ネズ」だつたので、孔子様も「如何トモスルナキノミ」と引きさがられたのであらう。

しかし又孔子様の此言葉は、單に景公に對する「對症與藥」だけではなく、いつでも言はれる政治の根本義であるが、これはもちろん、君臣父子それぞれ君たり臣たり父たり子たる道を盡すべしといふのであつて、條件ではない。すなはち「君君タラズンバ臣臣タラズ、父父タラズンバ子子タラズ」といふ風に逆用すべきでない。ともかくも本章は人の耳に入りやすく、よく知られてゐる。瀧亭鯉丈の「和合人」の、眞夏の日に綿入れをきて物干臺で「日見の宴」をするといふくだりに、

「綸言にたとへし汗もかくやらんヒミヒミタレバシンシンと出る」

といふ狂歌がある。

参照——一四二

二九〇 子ノタマハク、片言以テ獄ヲ折ムベキ者ハ、ソレ由ナルカト。子路諾ヲ宿スル

コト無シ。

X

X

X

X

孔子様が子路を褒めて、「一言のもとに訴訟を裁決して當事者を納得させるのは、由に限る。」とおつしやつた。子路は一度引受けたら即時實行して、承諾に宵越をさせることのない正義勇斷の人物なので、人が信服したのである。

原告被告一方の言ふ事だけを聽いて判決を下し得るほど明察であつた、といふ意味に解する人もあるが、全體片口でさばくことは裁判の大禁物であつて、それを孔子様が褒められるのも異なるものだ。或は褒められたのではない叱られたのだ、といふ説もあらうが、本文はお小言の口調でないし、後段とも續かない。古註に「言簡ニシテ理ニ中ル。故ニ片言以テ罪人ヲ服セシムベシ。」とあるのが當つてゐる。

二九一 子ノタマハク、訟ヲ聽クハワレ猶ホ人ノゴトシ。必ズヤ訟無カラシメンカ。



孔子様がおつしやるやう、『裁判をさせればわしも人並にはできようが、わしの大願は訴訟の無  
し世の中をつくることぢや。』

これこそ今日の政治家法律家の座右銘たるべき金言だ。醫者も亦「必ずキ疾病無カラシメンカ。」でありた  
す。

二九二 子張政ヲ問フ。子ノタマハク、コレニ居テ倦ムコト無ク、コレヲ行フニ忠ヲ以  
テス。

子張が政治のやり方をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『其職に専らであれ。あきては  
いけない。仕事をするに忠實であれ。』

子路に對しても「倦ムコト無カレ」と言はれた(三〇三)。子路や子張は、顔回や曾參などと違つて、あきつ  
ぽかつたと思はれる。

二九三 子ノタマハク、博ク文ヲ學ビテコレヲ約スルニ禮ヲ以テスレバ、亦以テ畔カザ  
ルベキカ。

これは重出(一四四)。

二九四 子ノタマハク、君子ハ人ノ美ヲ成シテ、人ノ惡ヲ成サズ。小人ハコレニ反ス。

孔子様がおつしやるやう、『君子は他人の善事や成功を喜んでそれが成就せんことを願ひ、他人  
が失敗したり悪評を受けたりするのを心配して、援助したり辯解したりする。小人は其反對ぢや。』

「人ノ惡ヲ成サズ」はまだできようが、「人ノ美ヲ成ス」がむつかしい。古川柳に「よいはよいがとは女のそ



ねみなり』とあるが、よくうがつてある。あの奥さんはいい器量だといふうはさが出るとつひ、いい器量だが少しケンがある、などとケチがつけたくなるのが人情だ。前に出てゐた「人ト歌ヒテ善ケレバ」(一七八)といふ孔子様のまねがしたい、と常に思つてゐるが、中々さう行かない。

二九五 季康子政ヲ孔子ニ問フ。孔子對ヘテイハク、政ハ正ナリ。子帥キルニ正ヲ以テセバ、タレカ敢テ正シカラザラン。

X X X X

魯の大夫の季康子が政治のしかたを質問した。孔子様が答へられるやう、『政は文字から見ても正といふことであります。上に立つあなたが率先して正しき道を行はれたならば、人民たち誰が正しくならぬ者がありませうや。』

政府當局は常に、人民が言ふことをきかなくて困る、と言ふ。それに對して孔子様は常に、まづ以ておのれを正しくせよ、と説かれる。本章以下三章、同時の説話かどうかは知らぬが、其定石で一貫されてゐる。

参照——三〇八・三一五

二九六 季康子盜ヲ患ヒテ孔子ニ問フ。孔子對ヘテイハク、イヤシクモ子ノ不欲ナラバコレヲ賞スト雖モ竊マシ。

X X X X

季康子が人民に盗み心の多いことを心配して、孔子様にどうしたらよいかと相談した。孔子様が答へられるやう、『もしあなたさへ無慾ならば、懸賞附でも盗みをする者はありますまい。』

孔子様としてはかなり大げさな當てつけがましいことを言はれたものだが、古註に

『季氏ハ柄(國政)ヲ竊ミ、康子ハ嫡ヲ奪フ。民ノ盜ヲ爲ス、モトヨリ其所ナリ。ナンゾ亦其本ニ反ラザルヤ。孔子不欲ヲ以テコレヲ啓ク、其旨深シ。』

とあり、又太宰春臺は、

『公室ヲ四分シテ季氏其二ヲ取ル。季氏ノ盜ヲ爲スコト大ナリ。民ノ盜ヲ爲スハモトヨリ其所ナリ。』と言つた。しかし孔子様のせつかくの此苦言も、季康子の胸にピンと來なかつたらしいことは、次章でも推測



される。

日本が「盗ヲ患ヒテ孔子ニ問」はなければならぬやうになつて来たことは、残念千萬だ。

二九七

季康子政ヲ孔子ニ問ヒテイハク、モシ無道ヲ殺シテ以テ有道ニ就カバイカン。孔子對ヘテイハク、子政ヲ爲スニナンゾ殺ヲ用ヒン。子善ヲ欲スレバ民善ナリ。君子ノ徳ハ風、小人ノ徳ハ草、草コレニ風ヲ尙フレバ必ず偃ス。

X X X X X

季康子が政治について孔子に、「國が治まらないのは人民に無道の者がある故だから、無道の者を殺して人民を道有る方へ赴かせるやうにしたらいかかなものか。」とたづねた。孔子が答へて言はるるやう、「政治をするのに何で「殺ス」必要がありませんや。あなたが先づ善を欲するならば、民はおのづから善になります。上に立つ者の持前は風の如く、下に在る者の持前は草の如くでありまして、草は風があたれば其方向にねるものであります。」

以上三章、季康子に向つて眞正面から、「子正シキヲ以テスレバ」「子ノ不欲ナラバ」「子善ヲ欲スレバ」と、

一々に「子」と言つて居られる所を見ると、孔子様はかなり痛烈に季康子の不正・多欲・不善を責められたのだが、それに對して腹も立てず、さりとて反省もしなかつたのであるならば、季康子なる者相當にカンがわるい。

二九八

子張問フ。士イカナルヲココニコレヲ達ト謂フベキカ。子ノタマハク、何ゾヤナンヂガイハユル達トハ。子張對ヘテイハク、邦ニ在リテモ必ず聞コエ、家ニ在リテモ必ず聞コエ。子ノタマハク、コレ聞ナリ、達ニアラザルナリ。ソレ達ナルモノハ、質直ニシテ義ヲ好ミ、言ヲ察シテ色ヲ觀、慮リテ以テ人ニ下ル。邦ニ在リテモ必ず達シ、家ニ在リテモ必ず達ス。ソレ聞ナルモノハ、色仁ヲ取リテ行違フ。コレニ居テ疑ハズ。邦ニ在リテモ必ず聞コエ、家ニ在リテモ必ず聞コエ。」

「在邦トハ諸侯ニ仕フルヲ謂ヒ、在家トハ卿大夫ニ仕フルヲ謂フ。」とする説があるが、家はやはり家庭と見て、公生活、私生活といひたい。







制する、これが徳を高くし、悪心を除き、惑ひを去る所以である。』

子張の同様な質問(二八八)に對するのと、孔子様の答が又異なる。例の人を見て法を説くものである。

参照——一三九

三〇〇

樊遲仁ヲ問フ。子ノタマハク、人ヲ愛ス。知ヲ問フ。子ノタマハク、人ヲ知ル。樊遲未ダ達セズ。子ノタマハク、直キヲ擧ゲテコレヲ枉レルニ錯ケバ、能ク枉レル者ヲシテ直カラシム。樊遲退キ、子夏ヲ見テイハク、サキニワレ夫子ニ見エテ知ヲ問フ。子ノタマハク、直キヲ擧ゲテコレヲ枉レルニ錯ケバ、能ク枉レル者ヲシテ直カラシムト。何ノ謂ゾヤ。子夏イハク、富メルカナ言ヤ。舜天下ヲ有チ、衆ニ選ビテ皋陶ヲ擧ゲ、不仁者遠ザカレリ。湯天下ヲ有チ、衆ニ選ビテ伊尹ヲ擧ゲ、不仁者遠ザカレリ。

「擧直錯諸枉」は前にも出てゐる(三五)。説明は其部分に譲る。

X X X X

樊遲が仁とは何かをおたづねしたら、孔子様が「人ヲ愛ス」と言はれた。知とは何かをおたづねしたら、孔子様が「人ヲ知ル」とおつしやつたところ、樊遲に「人ヲ知ル」の意味がわからなかつたので、孔子様はさらに「直キヲ擧ゲテコレヲ枉レルニ錯ケバ、能ク枉レル者ヲシテ直カラシム。」と説明した。樊遲にはまだ十分呑み込めなかつたらしいが、あまりしつこく質問するのもいかがと思つたと見えて、其場はそれで引きさがり、其後子夏に會つたとき、「此間私は先生におめにかかつて、知とは何かをおたづねしたところ、直キヲ擧ゲテコレヲ枉レルニ錯ケバ、能ク枉レル者ヲシテ直カラシム。」とおつしやつたが、どういふ意味でせうか。」と問うた。子夏が答へて言ふやう「とても内容豊富な御言葉かな。舜が天下を治めたとき、衆人の中から選り出し賢人皋陶を採用して宰相としたので、不仁な者どもが遠ざかり、殷の湯王が天下を治めたとき、衆人の中から選り出し賢人伊尹を採用して宰相としたので、不仁者どもが遠ざかつた。先生が「人ヲ知ル」と言はれるのは、そこなのだよ。』

樊遲はあたまはあまりよくないらしいが、熱心な質問家だ。論語六ヶ所に出て來るのが皆質問だが、馬車を



御しながら質問したり、散歩の途中におたづねしたり、わからなければ兄弟子あいでしに説明してもらつたり、いい心がけた（二二・一三九・二九九・三〇六・三二一）。

三〇一

子貢友ヲ問フ。子ノタマハク、忠告シテコレヲ善道シ、不可ナレバスナハチ止ム。自ラ辱シメラルコトナカレ。

X X X X X

子貢が友人に交はる道をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「まごころを以て其過ちを告げ、親切にこれを善い方へ導くのが、友だちづきあひの道だが、どうしても其忠告を受けいれてもらへぬときは、一應手を引いて様子を見るがよい。あまりしつこくして、こちらの面目までつぶぬやうにしない。」

前に子游の言葉として「朋友ニシバスレバ疏ウツマル」とある（九二）。おそらく自分が叱られた受賣りなのだらう。子貢も少々世話やきが過ぎるので、それでは自分が恥をかくのみで、かへつてききめがないぞ、と教へられたものらしい。

三〇二

曾子イハク、君子ハ文ヲ以テ友ヲ會シ、友ヲ以テ仁ヲ輔ク。

X X X X

曾子が言ふやう、『君子の友だちづきあひは學問文藝が中心であり、そして友達づきあひを仁徳修養のおきなひにする。』



### 子路第十三

此篇は主として治國と修身とに關する訓言を集めてある。

三〇三 子路政ヲ問フ。子ノタマハク、コレニ先ンヂコレヲ勞イダハレ、益サンコトヲ請フ。ノタマハク、倦ムコト無カレ。

X X X X

子路が政治のやり方をおたづねしたら、孔子様が、「人民を働かせようとするならば、先づ自身先立ちになつて働け。人民が働いたならば、これを慰勞せよ。と言はれた。『もつと御願ひします。』と言つたら、『あきてはいけない。』とおつしやつた。

子路はおそらく「先ンジ、勞ハレ、」だけではあまり平凡で物足りなく思ひ、もつと雄大な經綸を聞きたかつたのだらうが、孔子様は、それで十分なのだをそれを「倦ムコト無ク、」と言はれたのである。古語に「勇者

ハ爲ス有ルヲ喜ンデ持久スル能ハズ、故ニコレヲ以テ告グ。」とあつて、子路の急所を突かれたのであらう。子張についても同様であつた(二九二)。

三〇四 仲弓季氏ノ宰ト爲リ、政ヲ問フ。子ノタマハク、有司ヲ先ニス。小過ヲ赦シ、賢才ヲ舉ゲヨ。イハク、イツクンゾ賢才ヲ知リテコレヲ舉ゲン。ノタマハク、ナンヂガ知レル所ヲ舉ゲヨ。ナンヂガ知ラザル所ハ、人ソレコレヲ舍オカンヤ。

X X X X

仲弓が魯の大夫季氏の執事になつて、政治のしかたをおたづねしたとき、孔子様が、「お前は大體をすべて、こまかい事はそれぞれ擔當の屬官にまかせて置くがよろしい。人に備はるを求めず、大過失はもちろん捨ておけぬが、小さな過失は大目に見てやれ。そして賢人を見出してこれを採用することが何よりも大切ぢやぞよ。」と教へられた。すると仲弓が、「どうして私一人で天下の賢人を知り得てもれなく採用することができませうや。」と言つたので、孔子様がおつしやるやう、「其心配は無用ぢや。ともかくもお前の知つてゐる賢人を拾ひ上げなさい。さうすればお前の知らない賢人は人が捨てておかうや、必ず推薦して來る。」



私も永年役人だったが、大學教授なるものには、謂はば上役も下役もなかつたところ、今度はじめて自分の部下に何人かの「有司」をもつて見て、なるほどと思ふ。

三〇五 子路イハク、衛君、子ヲ待チテ政ヲ爲サバ、子マサニ何ヲカ先ニセシ。子ノタマハク、必ズヤ名ヲ正サンカ。子路イハク、コレ有ルカナ、子ノ迂ナルヤ。ナシト正サン。子メタマハク、野ナルカナ由ヤ。君子ハソノ知ラザル所ニ於テケダシ闕如タリ。名正シカラザレバスナハチ言順ナラズ、言順ナラザレバスナハチ事成ラズ、事成ラザレバスナハチ禮樂興ラズ、禮樂興ラザレバスナハチ刑罰中ラズ、刑罰中ラザレバスナハチ民手足ヲ措ク所無シ。故ニ君子コレヲ名ヅクレバ必ズ言フベキナリ。君子ハ其言ニ於テ苟クモスル所無キノミ。

「衛君」は出公であるが、當時父と國を争つてゐたことが、前に出てゐる(一六一)。それ故に「名ヲ正サン」と言はれたのだ。

× × × × ×

子路が「今もし衛の君が先生を御招きして國政をまかされたならば、先生は何を先になさるおつもりですか。」とおたづねしたら、孔子様が「まづ以て名分を正しくしようか。」と言はれた。すると子路が、「それだから世間が先生は迂遠だと申すのです。此急場に名分など正したとて何のたしになりますか。」と言つたので、孔子様が叱つて言はれるやう、「何といふがさつ者なのか、由は。君子たる者はよく知らないときにはだまつてゐるものぢや。そもそも大義名分が正しくなくては言ふことが道理にかなはず、言ふことが道理にかなはずは思想混亂して萬事成就せず、思想混亂萬事不成就では禮儀整はず音樂興らず、禮儀整はず音樂興らずしては法律適正ならずして刑罰が不公平となり、法律不適正刑罰不公平では人民が不安で手足の置き場も知らぬことになる。それでは國家は治まらぬのであつて、其根本は大義名分が亂れてゐるからぢや。それ故にわしは先づ名を正さうと言つたのであつて、殊に現在の衛に在つてはそれが先決問題である。其深意も知らずして無遠慮な放言をするとは何事ぞ。君子たるものは、名分の立たぬ事は言ふべきでなく、言つた事は行はねばならぬのだから、めつたな事を申すではないぞ。」



實に堂々たる政治論で、殊に「禮樂興ラザレバ刑罰中ラズ」は、特にわが國の法律家の座右銘としたい。總選舉後の特別議會で何を議すべきかについて、此食糧事情切迫の際憲法改正などはあたまはしにすべし、といふ論があつたが、政治の實際論としては知らず、私は「迂ナルヤ」と言はれるのは承知の上で「必ずヤ名ヲ正サンカ」と考へてゐた。

三〇六

樊遲稼ヲ學バント請フ。子ノタマハク、ワレハ老農ニ如カズト。圃ヲ爲ルヲ學バント請フ。子ノタマハク、ワレハ老圃ニ如カズト。樊遲出ヅ。子ノタマハク、小人ナルカナ樊須ヤ。上禮ヲ好メバスナハチ民敢テ敬セザルナシ。上義ヲ好メバスナハチ民敢テ服セザルナシ。上信ヲ好メバスナハチ民敢テ情ヲ用ヒザルナシ。カクノ如クナレバスナハチ四方ノ民其子ヲ嚮負シテ至ラン。イツクンゾ稼ヲ用ヒン。

「嚮」はわが國のいはゆる「ネンネコバンテン」。

X X X X

樊遲(字は須)が五穀を作ることと教へていただきたいとお願ひしたら、孔子様が『田を作らせてはわしは老練な農夫にはかなはん。』と言はれた。さらに野菜を作ることと教へていただきたいとお願ひしたら、『畑を作らせてはわしは老練な畑師にはかなはん。』と言はれた。樊遲がそのまゝ要領を得ずに引下がつたので、ほかの門人たちにおつしやるやう、『小人物であるわい樊須は。上に立つ人が禮を好んで人民を扱へば、人民が尊敬しないはずはない。上に立つ人が義を好んで行ふ所が正しければ、人民が服従しないはずはない。上に立つ人が信を好んで誠實であれば、人民に人情の出ないはずはない。さういふことになれば、一國の民だけでなく、天下の人が子をおぶつて領内に來り集り、田畑を作るだらう。何で自身農耕を學ぶ必要があらうや。』

このあたりになると、何といつても農工商は士君子の事にあらずとする封建思想のあらはれであつて、「國民皆農」の今日の考へ方と一致せぬが、孔子様としては、樊遲が道德の本を務めずして技術の末に走らんとしたのをいましめられるつもりだつたのであらうし、なほ食糧問題は末で道義問題が本だといふ意味も含まれて居よう。

三〇七 子ノタマハク、詩三百ヲ誦スルモ、コレニ授タルニ政ヲ以テシテ達セズ、四方



ニ使<sup>ツカヒ</sup>シテ專對スルコト能ハズンバ、多シト雖モ亦ナニヲ以テ爲サン。

X  
X  
X  
X

孔子様がおつしやるやう、『詩はただの文藝のみではないのであつて、人情風俗に通ぜしめ言葉使ひを美しくさせるものである。しかるに詩經三百篇を暗誦することができて、政治をやらせて見ると一向行きとどかず、他國へ使に出すとひとりでは臨機應變の應對もできないやうなことは、物知りだとして何の役に立たうぞ。』

後にも「詩ヲ學バザレバ以テ立ツコト無シ」とある(四三〇)。

三〇八

子ノタマハク、其身正シケレバ、令セズシテ行ハル。其身正シカラザレバ、令スト雖モ從ハズ。

X  
X  
X  
X

孔子様がおつしやるやう、『政治をするには、上に立つ人の品行が第一ぢや。其行狀が正しくて

衆人の模範になるやうならば、命令せずとも行はれるが、不正をはたらきながらいくら命令しても、人民は服従しな<sup>ス</sup>。』

これは孔子様が口をすくして繰り返されるどころだが(二九五・三一五)、伊藤仁齋は左の如く説明してゐる。

『コレ聖賢人ヲ治ムルノ常法ナリ。カクノ如クナラズシテ能ク人ヲ治ムル者ハ、未ダコレ有ラザルナリ。ケ  
ダシ先王ノ治ハ、徳ニ詳<sup>ツツレラ</sup>カニシテ、法ニ略セリ。法ノ恃ムニ足ラザルヲ知レバナリ。孟子曰ク、人恒<sup>ツツネ</sup>ノ言  
有リ、皆天下國家ト曰フ、天下ノ本ハ國ニ在リ、國ノ本ハ家ニ在リ、家ノ本ハ身ニ在リト。故ニ能ク其本ヲ  
修ムレバ、スナハチ末ハオノヅカラ從ヒ、天下爲メ難キモノナシ。故ニ聖人治平ノ道ヲ論ズルニ、其言毎<sup>ツツネ</sup>ニ  
皆甚<sup>オホキ</sup>ダ易クシテ近キモノハ、ケダシコレガ爲ナリ。』

三〇九 子ノタマハク、魯衛ノ政ハ兄弟ナリ。

X  
X  
X  
X

孔子様がおつしやるやう、『魯は周公の後、衛は周公の弟康叔の後であつて、元來が兄弟の國だが、はじめ魯の國を立つるや、「尊キヲ尊ビ、親シキヲ親シミ、」衛の國を立つるや、「徳ヲ明カニ



シ、罰ヲ慎ミ、「道行はれ國治まれることに於て正に兄弟の國であつた。しかるに今日の魯と衛とは、道すたれ國亂れたることに於て正に兄弟の國である。何ともなげかはしい事ぢや。』

本章を「腐つても鯛」の意味に解する説もある。前の第一四一章は其意味だらうが、ここはさうではないらしい。魯は「君君クラス、臣臣クラス、」衛は「父父クラス、子子クラス、」負けず劣らずの現状をなげかれたのである。

三二〇 子衛ノ公子荆ヲ謂フ。善ク室ニ居ル。始メ有ルニイハク、イササカ合ヘリト、少シク有ルニイハク、イササカ完シト。富ニ有ルニイハク、イササカ美シト。

「公子荆」は衛の大夫。荆といふ公子（若殿）ではない。

× × × × ×

孔子様が衛の大夫荆を評しておつしやるやう、「かれは住み方を心得てゐる。はじめ家財道具がはいつたときに、「相當間に合ひます。」と言つた。すこし整つたときに、「大體そろひました。」と

言つた。十分に出来上つたときに、「ずゐぶん結構です。」と言つた。常に足ることを知る心がまへが、まことに奥ゆかしい。』

中井履軒が次の如く説明した。

『始メ有ルハ、コレ未ダ合ハザルナリ、荆ハスナハチ認メテ以テ合ヘリト爲シテコレニ安ンズ。少シク有ルハ、コレ合フノ時ニシテ未ダ完カラザルナリ。荆ハスナハチ認メテ以テ完シト爲シテコレニ安ンズ。富ニ有ルハ、コレ完キノ時ニシテ未ダ美ナラザルナリ。荆ハスナハチ認メテ以テ美ナリト爲シテコレニ安ンズ。(中略)寡欲ノ人大概コノ意思有リ。』

三二一 子衛ニ適ク。冉有僕タリ。ノタマハク、庶イカナ。冉有イハク、既ニ庶シ、又何ヲカ加ヘン。ノタマハク、コレヲ富マサン。イハク、既ニ富メリ、又何ヲカ加ヘン。ノタマハク、コレヲ教ヘン。

× × × × ×

孔子様が衛の國に行かれたとき、冉有が御供して馬車を御してゐた。孔子様が車の上から衛の國



の模様を見て、『さても人口の多いことかな。』と感歎された。そこで、冉有と孔子様との間にかういふ問答があつた。『實に大した人口でござりますが、此上何か附け加へることがありませうか。』  
 『人が多くても貧しくて日々の生活に困るやうなことでは何にもならぬから、産業を盛にし租税を軽くして、人民を富まさねばならぬ。』  
 『人民が富んで生活がゆたかになりましたら、其上にまだ何か附け加へることがありませうか。』  
 『富んだだけで教育がないと、仁義道德を知らずして人たるかひがない故、これを教化せねばならぬ。』

國としてはまづ以て人口が多くなつてはならぬ。フランスのやうでは困つたものだが、人口が多いといふことは、他方國家の大負擔でもある。支那事變も太平洋戦争もさかのぼればわが國の大人人口のはけ口を求めねばならなかつたことが原因だが、敗戦の結果其はけ口がふさがつたばかりか、八千萬人の大人人口がいはゆる邊土粟散（ぞくぞく）の小天地に押しこめられて、「庶イカナ」と、感歎ではなくて、歎息せねばならぬことになつてしまつた。而していたづらに庶いのみで、食糧難・住宅難・就職難、さらにそれに加ふるに意氣沮喪・道義頹廢。まことに「コレヲ富マサン」「コレヲ教ヘン」と絶叫せざるを得ないではなからうか。

三二二 子ノタマハク、イヤシクモワレヲ用フル者有ラバ、キゲツ 暮月ノミニテ可ナリ。三年

ニシテ成ル有ラン。

「暮月」は「期月」。すなはち今年三月から來年三月まで、といふやうなわけで、一周年をいふ。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、『もしわしを用ひて政治をやらせてくれる人があるならば、一年でも結構ぢや。三年もあつたらりつばに成績を擧げて見せるのだがなあ。』

此あたりになると、孔子様も相當あせつて居られる模様が見える。

「三年」といふのが、支那のきまり文句だ。(一一・八六・一九六・二七八・四五二)ここでも「五年計畫」の「十年計畫」のといふやうな正確な意味ではなからう。

三二三 子ノタマハク、善人邦ヲ爲ムルコト百年ナラバ、以テ殘ニ勝チ殺ヲ去ルベシト。  
 誠ナルカナ、コノ言ヤ。



孔子様がおつしやるやう、「古語に「善人が相繼いで國を治めること百年ならば、人間の残忍性に打勝つて、死刑などを必要とするやうな大罪をなくし得る。」とあるが、本當ぢや、此言葉は。」

前章及び次章と關聯させて、聖人は三年、善人は百年、王者は三十年、といふやうな論もあるが、孔子様がそんな區別をされさうもないことだ。又この「善人」は、第一七二章及び第二七二章に於けるやうな、區別的限定的の意味ではなく、一般的の「善い人」の意味だらう、(三三二)。そして此古語は、一方に爲政者が善人でなくては治績があらぬことをいふと同時に、他方では「殘ニ勝チ殺ヲ去ル」といふやうな根本的人性改造は、中々人間一代の仕事ではない、といふことを暗示したものと見て、孔子様が賛成されたのである。

三一四 子ノタマハク、モシ王者有リトモ、必ズ世ニシテ後ニ仁ナラン。

「王者」は、聖人の徳を備へて天の命令を受けて帝王たる者。

「世」は、一世代すなはち三十年をいふ。「世」の字が元來「三十」なる字の組合せだ。「四十ニシテ仕へ、

七十ニシテ致ス」といふ所から、人間一人の働く期間が三十年といふ計算になる。

× × × × ×

孔子様がおつしやるやう、「たとひ王者といはれるほどの聖主が出て、天下を教化して一人の不善を爲す者なき仁徳あまねき國とするには、どうしても三十年はかかる。」

本章も前章と同様、王者の徳をたたへるよりも、むしろ教化の困難を言はれたものと思ふ。

三一五 子ノタマハク、イヤシクモ其身ヲ正シクセバ政ニ從フニ於テ何カ有ラン。其身ヲ正シクスルコト能ハズンバ、人ヲ正スコトヲ如何セン。

「政ヲ爲ス」は帝王の事、「政ニ從フ」は大夫の事。すなはち本章は大夫に對する訓言だと説明されるが、事柄は帝王とても同じで、孔子様が毎度言はれる所だ(二九五・三〇八)。

× × × × ×



孔子様がおつしやるやう、『もしも自分の一身を正しくすることができるならば、政治の局に當るなどは何でもない事ぢや。自分の一身すら正しくすることができないで、どうして人を正しくすることができようぞ。』

三二六 冉子朝チヨウヨリ退ク、子ノタマハク、何ゾ晏ヤキヤ。對ヘテイハク、政有リキ。子ノタマハク、ソレ事ナラン。モシ政有ラバ、ワレヲ以ヒズト雖モ、ワレソレコレヲ與リ聞カン。

X X X X X

冉有が大夫季氏の執事であつたが、或日季氏の家の事務所から退出して來たとき、孔子様が『どうしてこんなにおそくなつたのか。』と問はれた。冉有が答へて、『マツリゴトがありましたので、時間がかかりました。』と言つた。孔子様がおつしやるやう、『それは國政ではあるまい、季氏の家事だつたのだらう。もし國政ならば、わしも以前は大夫だつた重臣なのだから、今は非役だけれども、御相談にあづからぬはずはあるまい。』

季氏が専横で、他の同僚重臣にも相談しないで國の大事を私邸で家臣等と謀議するのを、孔子様がけしからんことに思はれ、わざとそらとぼけて冉有をたしなめられたのである。ところでこれは「朝」を「私朝」とし「政」を國事「事」を家事と見る解釋に従つたのだが、「朝」は公朝なり、「政」も「事」も國政にて大事と小事となり、とする説もある。中井履軒曰く、

「朝ハコレ公朝ナリ。時ニ政季氏ニ在リ、故ニ冉子ハ家宰ナリト雖モ亦隨從シテ事ヲ辨ズルナリ。大ヲ政ト曰ヒ、小ヲ事ト曰フ。當ニ國ト家トニ分屬スベカラズ。ケダシオヨソ興作徵發シ及ビ新ニ號ヲ發シ令ヲ出ダスモノハ皆政ナリ。例ニ循フモノハ皆事ナリ。政ハ宜シク詢謀僉議スベシ。諸大夫與リ聞カザルノ理ナン。事ハスナハチ必ズシモ然ラズ。コノ時實ハコレ政ナリ。シカルニ孔子ヲシテ與リ聞カシメズ。故ニ孔子疊ヲ裝ヒテコレヲ規切セルナリ。」

三二七 定公問フ。一言ニシテ以テ邦ヲ興スベキモノコレ有リヤ。孔子對ヘテイハク、言ハ以テカクノ如クソレ幾スベカラザルナリ。人ノ言ニイハク、君タルコト難シ、臣タルコト易カラズト。モシ君タルコトノ難キヲ知ラバ、一言ニシテ邦ヲ興スニ幾カラズヤ。イハク、一言ニシテ以テ邦ヲ喪ボスベキモノコレ有リヤ。孔子對ヘテイハク、言ハ以テカクノ如クソレ幾スベカラザルナリ。人ノ言ニイハク



ワレ君タルヲ樂シムコト無シ。タダソノ言ヒテワレニ違フコトナキナリト。モシソレ善ニシテコレニ違フコトナクバ亦善カラズヤ。モシ不善ニシテコレニ違フコトナクバ、一言ニシテ邦ヲ喪ボスニ幾カラズヤ。

同じ「幾」を前には「キ」とよみ後には「チカ」とよむのはおかしいといふので、「一言ニシテ邦ヲ興スニ幾セザランヤ」とよむ人もあるが、どうせ日本よみにするのだからわかりよい方がいいと思つて、「チカカラズヤ」とよんだ。

「一言ニシテ以テ邦ヲ喪ボスモノ」となつてゐる本もあるが、論語はかういふ場合にいつも同じ口調をくりかへすのが例だから、「邦ヲ喪ボスベキモノ」とある方によつた。

×

×

×

×

魯の定公が孔子に、『一言で國家を興隆させ得るほどのききめのある言葉が、そもそも有るものだらうか。』とたづねた。孔子が答へて申すやう、『言葉と申すものは、必ずかういふ益があるときめこんでしまふことができるものではありませんが、世間で「君となるのはむづかしい、臣となるのもやさしくない。』と申します。その「君タルコト難シ」といふことがわかれば大したものです

から、これなどは一言で國家を興隆させ得るに近い言葉ではござりますまいか。』『それでは一言で國家を滅亡させ得るほどの害のある言葉が、そもそも有るものだらうか。』『言葉と申すものは、必ずかういふ害があるときめこんでしまふことができるものではありませんが、世間で「わしは君となるのを別に楽しいと思はないけれども、ただ何を言つてもわしに反對する者がないのは愉快ぢや。』と申します。善い事を言つて反對する者のないのが愉快だといふのなら結構ですが、もし悪い事を言つても反對する者のないのが愉快だといふことになるとおふない話ですから、これなどは一言で國家を滅亡させ得るに近い言葉ではござりますまいか。』

三一八

葉公政ヲ問フ。子イハク、近キ者説ベバ、遠キ者來タル。

「説ビ」「來タル」と對句によむ人もあるが、連關させた方が意味が通らう。

×

×

×

×

楚の大夫葉公が政治のやり方をたづねた。孔子様がおつしやるやう、『近所の人民が悦び服するやうになれば、遠方の者も徳を慕つて來り集ります。』



三一九 子夏<sup>トホ</sup>莒<sup>トホ</sup>父ノ宰トナリ、政ヲ問フ。子ノタマハク、速カナランヲ欲スル無カレ、小利ヲ見ル無カレ。速カナランヲ欲スレバスナハチ達セズ、小利ヲ見レバスナハチ大事成ラズ。

X X X X X

子夏が莒父といふ地方の代官になつたとき、政治のやり方をおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『政治をするには、急いで成績を挙げようと思つてはいけない。又眼前の小さな利益に目がくれてはいけない。急いで効果をあらはさうとすると、順序をあやまつたり思はぬ手落があつたりして、かへつて目的を達し得ない。小利を追つて遠大のはかりごとがないと、天下後世を益するやうな大事業を成就し得ない。』

子張に對する教訓(二九二)とくらべて見よ。それぞれ其人の短所について教へられるのである。

三二〇 葉公孔子ニ語ゲタイハク、ワガ黨ニ躬<sup>トホ</sup>ヲ直クスル者有リ、其父羊ヲ攘<sup>ズ</sup>ミテ子コレヲ證セリ。孔子イハク、ワガ黨ノ直キ者ハコレニ異ナリ。父ハ子ノ爲メニ隱<sup>カク</sup>シ、子ハ父ノ爲メニ隱ス。直キコト其中ニ在リ。

レヲ證セリ。孔子イハク、ワガ黨ノ直キ者ハコレニ異ナリ。父ハ子ノ爲メニ隱シ、子ハ父ノ爲メニ隱ス。直キコト其中ニ在リ。

「直躬」は人名だといふ説があつて、それだと「ワガ黨ニ直躬トイフ者有リ」とよませる。二三の證據もあげてゐるが、人名と見ない方が面白い。

「攘」は外からまぎれ込んで來た物を着服することだといふ。すなはち此場合も、よその羊がこちらの地内に迷つて來たのをかくしたのであらう。

この「黨」とは「仲間」とか「方」とかいふほどの意味。

X X X X

葉公が孔子に、『わしの方にかういふ正直者がある。父が羊を着服したのを子が證明した。』とほこりに話した。すると孔子が申すやう、『私どもの方の正直者は少々違ひます。父は子の爲めに其罪をかくし、子は父の爲めに其罪をかくするのでありまして、そこにおのづから人情の正しさがあるのでござります。』



これは法律道德の關係上微妙な面白い問題だ。「大義親ヲ滅ス」ることももちろんあり得るが、祖國や同胞の缺點悪事を外國に向ひ摘發暴露して自ら快しとするやうな近頃の風潮については、「ワガ黨ノ直キ者ハコレニ異ナリ」と言ひたくなる。古註にも

『理ニ順ナルヲ直ト爲ス。父ハ子ノ爲メニ隱サズ、子ハ父ノ爲メニ隱サズ、理ニ於テ順ナランヤ。瞽瞍人ヲ殺サバ、舜ヒソカニ負ヒテ逃ガレ、海濱ニ避ヒテ處ラン。コノ時ニ當リテヤ、親ヲ愛スルノ心勝ル。ソレ直不直ニ於テ何ゾ計ルニ暇アランヤ。』

とある。この舜のたとへ話は孟子（盡心章上）に出てゐる。

三三二

樊遲仁ヲ問フ。子ノタマハク、居處恭シク、事ヲ執リテ敬ミ、人ト忠ナルハ、夷狄ニ之クト雖モ棄ツベカラザルナリ。

古語に『恭ハ容ヲ主トシ、敬ハ事ヲ主トス。恭ハ外ニ見レ、敬ハ中ヲ主トス。』とある。

×

×

×

×

樊遲が仁とは何かをおたづねした。孔子様がおつしやるやう、「事無くして休息の時も其態度行

儀をうやうやしくすること、仕事をする時には十分に謹慎用心すること、人と附合ふには中心の誠をつくしていつはらざること、この恭・敬・忠の三つは仁を行ふ根本であるから、たとひ禮儀道德の低い野蠻國に行つても棄ててはいけないぞ。』

わが國には「旅の恥はかきずて」といふけしからん言葉がある。願はくは「夷狄ニユクト雖モ棄ツベカラズ」でありたいものだが、今日では都の眞中でも恭・敬・忠は棄て去られて、「恥のかきずて」どころか、恥を恥と思はぬやうになつたのだから、情ないことだ。

樊遲は三度仁を問ひ、孔子様は毎回違つた答をして居られる。おそらく其進度に應じて教へられたのであらう。學者は本章が最初、第一三九章が其次、第三〇〇章が最後だらう、と言つてゐる。

三三三

子貢問ヒテイハク、イカナルヲコレト謂フベキカ。子ノタマハク、オノレヲ行フニ恥アリ、四方ニ使シテ君命ヲ辱シメズ、士ト謂フベシ。イハク、敢テ其次ヲ問フ。ノタマハク、宗族孝ヲ稱シ、郷黨弟ヲ稱ス。イハク、敢テ其次ヲ問フ。ノタマハク、言ヘバ必ず信、行ヘバ必ず果、硜硜然トシテ小人ナルカナ。ソモソモ亦以テ次ト爲スベシ。イハク、今ノ政ニ從フ者ハイカン。子ノタマハク、



噫、斗筭ノ人、何ゾ算フルニ足ランヤ。

「士」は士農工商の士である。當時の封建的思想から、士を指導者階級として特に問題にしたのである。ところで近頃或農村人が、今までは士農工商といつたものだけでも、今度は士がなくなつたのだから、農が一番上だ、といはつたとのことだが、それこそ正に封建的階級思想だ。今始つた事ではない、士農工商の階級は明治維新と共になくなつたはずであつて、も一つ言へば、今日ではすべての人が士なのである。それ故論語で「士」とか「君子」とかいふのは、今日ではすべての人にあてはまる。

「斗」は木のマスで十升入、「筭」は竹のミで一斗二升入たといふ。

「磴」は小石。

X X X X X

子貢が『どういふ人物を士と申すべきでありますか。』とおたづねした。孔子様がおつしやるやう、『士たる者は恥を知るべし。すなはち自身の言行について、いやしくも恥づべきことを言はず爲さざる操守がなくてはならぬ。さらに士たる者は有爲なるべし。すなはち四方の外國に使節としてよく任務を全くし、君命をばづかしめず國威を揚げるだけの腕前がなくてはならぬ。此徳と此才

とがあつて、はじめて士と謂ふべきである。』それは中々大したことではござりませんが、そこまで行かなくては士と謂へないのでせうか。第二流の士はありますまいか。それを一つうかがひたうござります。』士たることの根本は孝悌だから、親類中から孝行者とほめられ、村中から兄弟思ひと評判されるやうな人物なら、たとひ才能は足らずとも、第二流の士と謂つて宜しい。』今一つ推してうかがひますが、其次はいかがでござりませうか。』一旦言つた事は必ず實行を期し、やりかかつた事は必ずしとげようとつとめる。見はからひがなく融通のさかぬコチコチした小人物ではあるが、ともかくも第三流の士として置かう。』そこで子貢が『それでは現在の諸國の當局者たちはどうでござりますか、士と申して然るべき人物が居りませうか。』とおたづねしたら 孔子様が歎息しておつしやるやう、『ああ、マスやミではかるやうな小人物ばかりで、かぞへるねうちもないわ』

「斗筭ノ人」を狭量小規模の人物と解するのが通説だが、十升入り、一斗二升入りといへばマスやミとして小さい方ではなく、「算フル」とある所からも、十把ひとからげの意味と解した方がよさうだ。

三三三 子ノタマハク、中行ヲ得テコレニ與ミセズンバ、必ズヤ狂狷カ。狂者ハ進ミテ



取り、狷者ハ爲サザル所有リ。

古註に『狂者ハ、志極メテ高クシテ行掩ハズ、狷者ハ、知ルコト未ダ及バズシテ守ルコト餘リアリ。』とある。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『行が中正を得たほどのよい人物を得てこれと共に道を行ひたいものだが、現在では中々さやうな中庸の人物を得がたい故、もし中行の人を得られないならば、律義一偏優柔不斷の人物よりも、むしろ狂者・狷者を得てこれを仕立てたい。狂者は進んで善を取らんとする氣魄があり、狷者は斷乎として不善を爲さぬ節操があるから、見込みがある。』

三二四

子ノタマハク、南人言ヘル有リ。イハク、人ニシテ恒無クンバ、以テ巫醫ヲ作スベカラズト。善イカナ。其徳ヲ恒ニセズンバ、或ハコレニ羞ヲ承ムト。子ノタマハク、占ハザルノミ。

「恒無シ」は一定の主義がなく心の變り易いこと。

「巫醫トナルベカラズ」とよむ人もある。それだと、易者にも醫者にもなれぬ、といふことになる。

X

X

X

X

孔子様がおつしやるやう、『南國の人のことわざに、「移り氣で恒無き人にかかつては、易者も八卦が立たず、醫者も匙を投げる。」とあるが、いふ言葉だ。實際それでは學問も修養もできたものではない。』又易經に「其行に一定不變の道德標準がないと、とんだ恥辱を受けることがある。』といふ意味の言葉があるが、それについて孔子様がおつしやるやう、『それは占はなくてもわかるほど確な事ぢや。』

「占ハザルノミ」の意味がハッキリしないが、中井履軒の『此理確然、實ニ占ヒヲ待タザルナリ。』といふ説明によつた。

三二五

子ノタマハク、君子ハ和シテ同ゼズ、小人ハ同シテ和セズ。



孔子様がおつしやるやう、『君子は和衷協同するが、附和雷同しない。小人は附和雷同するが、和衷協同しない。』

前に「周シテ比セズ、比シテ周セズ」とあつたのと(三〇)、大體同趣旨。

三二六 子貢問ヒテイハク、郷人皆コレヲ好セバイカン。子ノタマハク、未ダ可ナラズト。郷人皆コレヲ惡マバイカン。子ノタマハク、未ダ可ナラズ。郷人ノ善キモコレヲ好シ、郷人ノ善カラザル者コレヲ惡ムニ如カズ。

X X X X X

子貢が『郷里の人皆にすかれるやうな人が善人でありませうか。』とおたづねしたところ、孔子様が『さうとも言へぬ。』とおつしやつた。そこでさらに『それでは郷里の人皆にくまれるやうなのがへつて善人でありませうか。』とおたづねしたら、孔子様がおつしやるやう、『さうとも言

へぬ。郷里の善人にすかれ郷里の悪人にくまれるのが善人ぢや。』

きはめて平凡だが、又きはめて確かな眞理だ。議員選舉などもここに問題がある。かつて選舉肅正ポスターの懸賞入選標語に、『よき人よく見てよく選べ』といふのがあつた。作者なり選者なりが、『よき人のよしとよく見てよしといひし、よしのよく見よき人よく見つ』といふ萬葉の本歌を知つてゐたのかどうかわからぬが、口調もよく、意味も深い。初句の「よき人」は「よき人を」とも「よき人が」とも取れるが、要するに、選ぶ人が「よき人」であつてはじめて「よき人」を選び得るのである。

三二七 子ノタマハク、君子ハ事ヘ易クシテ説バシメ難シ。コレヲ説バシムルニ道ヲ以テセザレバ、説バザルナリ。其ノ人ヲ使フニ及ビテハ、コレヲ器ニス。小人ハ事ヘ難クシテ説バシメ易シ。コレヲ説バシムルニ道ヲ以テセザルモ、説ブ。其ノ人ヲ使フニ及ビテハ、備ハラシコトヲ求ム。

「器ニス」は機械視し道具扱ひすることではない。適材を適所に用ひること。